

「詩語」と云はれるものは茲に述べた様に、實際は「古語」の事に外ならぬのです。

古語が詩によく使はれるのは、元來詩といふ藝術が保存されよい藝術で、昔からの名品が我々の間に澤山残つて居るために、詩人には多かれ少かれ、古典主義の傾向のあるもので、特にそう云ふ名詩が書かれてある「昔の言葉」に對する憧れがあり、そう云ふ言葉が、詩を生んだやうに考へて、「古語愛用」といふ習慣が出来るのです。

所がよく考へてみると、昔の詩の立派な作品は成程、昔の言葉で書かれてあるが、第一に我々がその言葉を感じし、その詩のよさが、言葉から生れて來たのだと思つたら、寧ろその詩人の眞價を否定する侮蔑であると云つてもよい位です。第二には、我々から見て「昔の言葉」であつても、それを作つた人にとつては「昔の言葉」ではなく、自分の時代の言葉、その人の現代語であつたと云ふ事を見損つてゐるわけです。如何にその作品がよいからと云つて、自分達が自分の詩を作る時、その古語を使ふといふ事

その詩を讀むとダイナモが唸り出す  
その詩は結局その詩の通りだ  
その詩は高度の原の無限の變化だ  
その詩は雄然と並んでもある  
その詩は矛盾撞着支離滅裂でもある  
その詩はただ奥の動きに買れてゐる  
その詩は清靜以前の麗照である  
その詩は氣まぐれ無しの必至である  
その詩は生理的機構を待つ  
その詩は鬱然と空間を押し流れる  
その詩は轉落し天上し興滅し又よみがへる  
その詩は姿を破り姿を孕む  
その詩は電子の反撥親和だ  
その詩は眼前咫尺に生きる  
その詩は手きびしいが如に親しい  
その詩は不思議に手に取れさうだ  
その詩は氣がつくと歩道の行疊にま誓いてある

は、全く意味を爲さぬ誤りです。それらの作品は、當時の人が、當時の言葉即ち自分にとつて、一番使ひよい言葉を使ひこなしたから、そんなよい作品を生んだのだ、といふ事實を考ふべきです。

我々は萬葉の歌の素晴らしさを見て驚くが、しかし萬葉のよさが、あの言葉から出て來るものだと勿論考へないし、また萬葉人が、自分達の言葉よりもつと古い「古語」を使つたのだとも思はない。萬葉人にとつてあの言葉は「現代語」であり、それを使ひこなしたればこそ、ああしたよき作品を生んだのだと考へねばなりません。それを中には、萬葉に感心したからと云つて昭和の現代に生きる自分達まで萬葉語を用ふ人があるが、ああいふ事は寧ろ、眞に萬葉のよさを本當に解して居ないからと云ふ事が出來ます。萬葉の言葉が、決して「詩語」だの「古語」などでなく、平易な自分たちの言葉であつたといふ事は、「防人歌」だの「東歌」だのを見れば解ります。方言や俗語が交じつて居り、當時の極めて平易な言葉で歌はれてゐる事を感じます。

ぼろぼろな鴛鳥

高村光太郎

何が面白くて鴛鳥を飼ふのだ  
動物園の四坪半の泥濘の中では  
脚が大股過ぎるぢやないか  
頭が餘り長過ぎるぢやないか  
雪が降る國に景では  
羽がぼろぼろ過ぎるぢやないか  
腹がへるから、堅パンも食ふだらうが、鴛鳥の眼は遠くばかり見てゐるぢやないか  
身も世もないやうに燃えてゐるぢやないか  
瑠璃色の風が今日も吹いて來るのを待ち構へてゐるぢやないか  
あの小さな繁村な頭が  
無限大の夢で逆まいてゐるぢやないか  
此はもう鴛鳥ぢやないぢやないか  
人間よ、  
もう止せ、こんな事は



だからそれを思ふと、古典を愛着する餘りとはいへ、古語を用ひて得々としたり、古語を用ふとよい詩が生れる、といふ様な考へは、必ず持たぬやうにすべきです。

中には古語を使つて特別の気分が出ると考へたり、古語を使ふために意味が不明瞭になるのを喜んでりする人があるが、それらはいづれも健全な詩の作り方ではありません。

我々は詩の表現は言葉に俟たず、自分の心に依るべきです。自分の心を最も適切に現はす自分の言葉、「現代の日本語」を一番愛すべきです。そして自分の優れた心によつて、優れた詩を生む事を考へるべきです。

#### 四、古語と現代語

我々の現在使つてゐる言葉は勿論現代語です。しかし現代語と云つても、この全部が現代に入つて出来たものではなく、大部分が昔から傳はつて來

火星が出てゐる  
高村光太郎

火星が出てゐる

要するにどうすればいいか、といふ問は折角たどつた思索の道を始にかへす。要するにどうでもいいのか。否、否、無限大に否。

待つがいい、そして第一の力を以て

そんな間に急ぐお前の弱さを滅すがいい。

際約された結果を思ふのは卑しい正しい原因に生きる事

そのみが淨い。

お前の心を更にゆすぶり返すためには

もう一度頭を高くあげてこの腹脚まつた駒込台の眞上にかかる

た言葉だと云ふ事を忘れてはなりません。

勿論、飛行機、潜水艦、トーチカ等、昔は無くして新しく出来たものもあるが、現代語の大部分は昔から使つて來たもので、云はば「生きてゐる古語」だと云ふ事が出来ます。そして現代語の中には、今でも間に合ふ古語、使ひ得る古語は、皆使つてゐるのだと云ふ事を知るべきです。だから現代語を使ふと云ふ事は、それだけで充分、間に合ふ古語を使つてゐる事でありませぬ。

我々が普通「古語」と云つてゐるものは、現代では最早や使はなくなつた死語だけを云つてゐます。そうした死語を殊更使ふ必要はない。我々は現代語の意味をよく味ひ、現代語を生かす事によつて、傳統的なる精神を充分に生かし得る事を、自覺しなければなりません。因循な懐古主義だけが、決して日本の傳統を生かすものではありません。

あの大きな、まつかな星をみるがいい。

火星が出てゐる

木枯がさいかちの實をからから鳴らす。

犬がさかつて狂奔する。

落葉をふんで藪を出れば

火星が出てゐる。

己は知らない

人間が何をせねばならないかを。

己は知らない

人間が何をせよとすべきかを。

己は思ふ

人間が天然の一片であり得る事を

己は感ずる

人間が無に等しい故に大である事を。



### 五、文語と口語

古語現代語の相違と混同され易いものに、「文語」「口語」の區別があります。前者は時代による區別であり、後者は用途による區別で、その意味は全く違ふ。文語とは文章用語であり、口語とは會話に使ふ言葉です。文語が古い言葉で口語が現代語だなどいふ事は決してない。現代の文語のやうなものは、過去のどの時代にも使はれた事はないし、又、口語だつて現代口語以外に、昔の口語といふものもある。「狂言」の言葉、「芝居の科白」「膝栗毛」の言葉などで、我々は容易に室町時代の口語や、江戸末期の口語を見る事が出来ます。

だから、文語も口語も、現代のものなれば、みな我々の言葉であり、充分詩に使ひ得ます。必ずしも口語詩に限つた事はないし、文語を使つた詩を以つて、直ちに古いと云ふ事も出来ません。

あゝ己は身ぶるひする  
無に等しい事のたのもしさよ。  
無をさへ滅した  
必然の瀾漫よ

火星が出てゐる。

天がうしろに廻轉する。  
無数の遠い世界が登つて来る。  
己はもう昔の詩人の襟に  
天使のまたたきをその中に見ない  
己はたゞ聞く  
深いエーテルの波の様なものを。  
さうしてたゞ  
世界が止め度なく美しい。  
見知らぬものだらけな無氣味な興  
が  
ひし／＼と己に迫る

火星が出てゐる

静かさ

千家 元麿

しかし我々は文語と口語の差別は、はつきり解つておく必要がある。文語は記録用であるため、簡潔で引締つてゐるだけに、口にし耳にすると、一字一字の發音がはつきりと響く點、口語と非常に違ふ。口語も文字としては一字一字書くが、口にし耳にしてゐる時は、平素の實用が反映して、發音が非常に文語と違つて變化して居ります。即ち母音子音の發音均衡が失はれて、速度も早く、集團的に發音される等、文語が一字一字はつきり發音されるのとは非常な違ひです。

だから文語の場合は、字數律になり易いが、口語は字數律のみでは、律し切れぬ事になるのです。

### 六、日本語の歴史的變化

我々の用ひてゐる現代語は、この中に國初以來連綿と續いて來た傳統を持つてゐる事を忘れてはならぬが、しかし古代の日本語からは非常な變化

静かさよ

おまへに囀れる時  
私は涙ぐむ

深い世界は静かだ  
山々の静かさ

海の静かさ

雲の静かさ

自然は静かだ

静かに諸君を  
取り巻いてゐる

巨大な星

千家 元麿

小さい星の中に  
一つ大きな星が交しつて  
輝いてゐる

その輝きの神秘さ、聖さ  
麗麗で、斬新で  
歌びを告げるやうに靈異の星だ



を受けて来てゐる事も事實です。それは凡ての物の歴史と同じく、時の流れと共に、絶えず變化發展して来たものですが、その中でも、特に著しい變化を三回受けてゐます。

第一回は奈良朝前後の、支那・朝鮮文化の入つて来た時です。第二回目は室町末期から江戸時代の始め迄の間で、社會組織が近世化した時期で、東洋や南蠻文化の影響もあるが、主として、國內の社會組織の變化によるものです。第三回目は明治維新前後の、急激な社會變化と同時に、歐米文化の急激な流入をした時です。

第二回の變化に際しては、本來濁りのない澄んだ、線の太い感じのする純日本語に、濁音（ニゴリ）半濁音（マル）鼻音（ン）拗音（キャキュキ）その他）等を入れ、又日本文字即ち假名の創定をしました。

第二回目は若干の新しい舶來語もあるが、社會組織の變化に連れて、言葉が急激に近世化した事です。恐らく會話の速度も、この頃から早くなり始めたに違ひありません。

あの光は唯ならぬ光た  
静く歌宴に燃えてゐる明るい光  
だ  
何か神々しい物が生きてゐる光

ある神が  
歡喜のシムボルのやうに  
あの巨大な魚の脚き

まるで神が夢みてる世界に  
現れてゐるやうに  
明るく燦々と燃えてゐる

花

千家 元曆

毎年定まつた季節になると  
咲く花達の可憐な姿よ

お馴染の季節が来たのを知らせ  
て

何か懐しい思ひを抱かせる

移りゆく季節の

第三回の明治維新前後は、歐羅巴語の感化に甚大なものがあり、母音發音の變化、外國文法の觀念の流入、翻譯調の混入などが、更に激しい現代生活の出現、生活のスピード化と共に、非常な變化を與へたのです。

かうして出来て来た現代日本語は、古代の純日本語とは勿論非常に違ふものになり、之を不純になつたと嘆く人もあるし、發展したのだと喜ぶ人もある。夫々尤な點のある説だが、詩をやる程の者は言葉に對しては特に重大な責任を感じ、將來の日本語を健全に發達させる、最も大切な地位にゐる者である事を、自覺せねばなりません。

今まで發達して来たと云ふ事も事實であり、將來とても益々種々な變化を受けて發達して行く事は當然であつて、そのよき發展には努力しなければならぬが、古來の美しい日本語を、不純にしたり混亂したりする事は極力、詩人が身を以つて妨ぎ守らねばならぬものであります。

淡い喜びと静しみの

あわいあわいに

静かに咲いて散つて行く

いろいろな花達の

美しさ

初夏

千家 元曆

家を出ると

静かな生垣つゞきの横丁が

どこへでも通じ

眞實だのに人も通らず

實に閑静を極めてゐる

カンカン輝く澄んだ道と

涼風の通ふ樹の下の道と

木々が優雅に初夏の

澄み渡る光をあびて

清らかな村を安らかに

自由に生々と明るく

伸々してゐる

おゝこの木蔭の光の明媚さ



七、外國語を避けよ

詩には「自分の言葉」を使ふ以上、外國語を避けるのは當然です。しかし近代詩は、その發生當時から歐米詩の影響を受け、其の後の發達中も絶えず歐米の感化があつたため、過去の詩壇には、いつも非常に強い歐米崇拜思想があり、用語の中にも外國語が相當入つてゐました。

尤も外來語だと云つても、すつかり日本化してゐるものもある。「煙草、羅紗、更紗、靴、天鵝絨」等は、それが舶來語だと聞いたら驚く位のもの、又「ナイフ、ポンプ、ランプ、ズボン」等も殆んど日本語だと云つてよい。これ程まででなくても、我々の言葉になつたものが相當澤山ある。人によつて多少は違ふが、一般の人に通用する程になつたものは、「自分の言葉」になつてゐるのだから、その意味で、詩に使つても差支へありません。

然し中にはかうした生活の自然の結果でなく、これと全く逆に、外國語

を詩の中に使ふ者がある。寧ろ一般の人に解らないのを得意にして、わざわざ漢字を書いて、その振假名に英語佛語など使つたり、一般の人に解らぬ外國語を使つて得意になつたり、高尚がつたり、或は日本語で書けば何でもないのに、わざわざ中學二三年生程度の英語を入れた者もあります。

外國語を使はぬにしても、表現法を生な直譯體にして「新鮮な感じがする」とか「異國的な」など云つて得意になつたり、かうした變な文脈ばかりで一種のリズムを出すと云ふやうな事も屢々見受けました。殊に或る時代の専門詩人の評論など見ると、是れが日本文かと驚く様なものがある。

かういふ事が如何に下らない、不健全な事であるかは云ふまでもないが、それは日支事變の發生と共に、煙の様に吹き飛ばされて了つたし、又かうした弊風は現代の健康な勤勞青年の中には全然ない事だから、深く云ふ必要のない事です。唯、古い詩集や詩論でも見た時、誤つてかういふものが詩かと思ふやうな事のないために、一寸注意までに書いて置きます。

この光の透明さ  
願むものもない深い落着いた  
清らかな感じ

俺は眞晝の沈黙が好きだ  
至る所に伸び生きて行く  
草木のつぶやきか聞える氣がする

神秘めくものが俺の全身に傳り  
俺を喜びにたつぷり浸して呉れる

月

千家 元廣

路次を出ると  
月が出てゐる

長屋が煎んだ狭い路次の奥から  
溝板を鳴らし乍ら歌を唄つて出  
て来る子供らの上に  
明るい大きな月が出てゐる  
星は冴えた光りの中に  
輝福が群れてゐるやうに

天の一方にかたまつて  
きらきら煌めいてゐる

あゝむさ苦しい路次の奥も  
この月夜には光りの京殿だ  
燈火が廊下から漏れて月光と交

り  
霜の花が溝板の上に夢と興き  
雲を纏した母が  
飢しそりな子供らと  
こたごた眠る薄い壁の相隣る

貧しい長屋の  
破れた屋根の穴からも  
星は美しく悲しげに見下してゐる

あゝ月光よ

疲れ果てて睡りつた都會の夜に  
私は物を思はれ  
悲しくて眠られ無いのだ  
こんな月明の清い夜

誰か貧困と勞苦と  
罪の生涯を思はない者があろう



八、漢語

外來語といふ意味では、漢字もまた外來語で純粹の日本語でない事は勿論です。

漢字の移入はかなり早く、奈良朝以前既に日本に入つて居り、日本文字もこれから生れて來た位で、かなり日本語化してゐる事は云ふまでもありません。しかしそれでも、詩を作る上には、或る程度の警戒を要するものがあるから、詩と云ふものは、恐ろしいものです。

我々はすべての漢字に「訓讀」と「音讀」と二様の「よみ方」を與へてゐます。例へば「水」をミツと讀むのは「訓讀」であり、スイと讀むのは、「音讀」といふ方です。訓讀の方は、その漢字の意味を日本語で讀ませるもので、漢字を訓讀にすれば、それは全く日本語となり、日本語を假名の代りに漢字で書いただけの事になる。然し「音讀」の方は、その移入の當

眞想と神祕に人の頭を狂はす月  
よ  
深夜影暗く落ちて行く月を見  
れば  
自分と同じ貧しい人々の  
眼の上を思はずにみられやう  
か

あゝ月は泪を落してゐるのだ  
月は大海の上にも  
都會の上にも  
飄零孤獨の人々の上に  
月は月は  
涙をそそいで居るのだ。

雪の庭

千家 元麿

雪の夜の美しさ  
子供よ窓へ来て御覽  
妻よ燈し火を射して呉れ  
ほら庭の木が

時の支那に於ける讀み方であり、支那式發音です。従つて音讀の方は元來日本語ではないのだから、耳で聞いただけでは、日本人には一寸解りません。字を見て知つてゐる時には、その意味が解るけれど……。この方は充分日本語化してゐるとは云はれません。

「訓讀」の方は日本語化してゐるから、詩の中へ使つて何の不自由も起つて來ません。しかし「音讀」の方は、相當の不自由が起つて來る事を知つて置かぬといけません。

それは音讀漢字が入つて來ると、(一)聞いただけでは意味が解らず、心象が不確かになる。(二)發音が他の部分と違つて來て、調子が取り憎くなる。

漢語 詩は現在では印刷したものを讀む事が多くなつてゐるが、本來口で云ひ耳で聞く筈ものだ。「音讀漢字」が入つてゐても目で讀むだけならいいが、詩本來の使命の通り口に出し耳に聞くと、まるで日本語になつてゐない缺陷が露出して來る。この事は近來の如く詩の朗讀が唱導される

假裝行列をしてゐるよ

白い髻を垂らした老人や  
シルクハットの紳士や  
人形の入つてゐる大きな  
ボール箱を抱えた娘や  
伊達な戀人達や  
天使のやうな子供や

美しい着物も縮だらけ  
帽子からは氷柱を坐らし  
御辭儀をしたり  
搦手したり  
あんなとほけた顔や  
幸福そうな顔や  
情無い格好をしてゐるのや

ほら  
樹木僅の假裝行列

先生

千家 元麿

小學校の女の先生が



時には、餘計注意すべきです。發音から云つても、音讀漢字だけの發音が他の日本語のなだらかなのと、ひどく調子が違つて、まるで飯の中に砂が混つたやうに感じて、忽ち均衡が破れて了ひます。

この均衡を取ろうとすると、次々と同じ様に音讀漢字を混ぜる事になるが、そうして澤山入れて了ふと、發音の調子は取れて来るが、もうまるで讀んだだけでは、何の事か解らなくなつて了ひます。

### 九、音讀漢字の不便

「音讀」は漢字の支那式の發音だと云つたけれど、それは完全に支那發音を示すものでもない。何故なら支那發音は、あつた讀み方だけではなく、その他に、日本語にはない聲の抑揚法がある。「四聲」と云ふものです。スイの二字に強弱をつけて四種の區別をしますので。例へば(一)スを強くする(二)イを強くする(三)兩方を強くする(四)兩方を弱くする。こ

子供を引率して  
原へ来て遊んでゐる  
眞實な身なりをした  
オールドミス  
淋しさが見える  
他人の子を預かつて  
薄給を帯て歌へてゐる  
その淋しさがどこかに見える  
子供らは先生を尊敬して  
よく馴れて  
幸福に樂しそくに戯れてゐる  
先生を見てゐると泣く  
先生は生徒を列べて  
號令をかけてゾッゾロ歸つて行  
く  
先生は淋しそうだ  
子供らに取り巻かれてゐても  
淋しい時はあるものだ

れで四種に分けられる。しかしかういふ事は日本語にはなく、日本人には出来ない。そこで日本式には四種の發音をみな一様にスイと讀むだけだ。

例へばスイと云はれると、我々は純日本語の「酸ひ、吸ひ」等も頭に浮ぶが、それは別として、漢字としては

水 推 誰 錐 垂 唾 吹 炊 出 衰 醉 粹 遂  
燧 遠 慧 綬 揣

等二十二三字を考へ出さねばならぬ。しかし支那人なれば四聲を分けるので、この四分の一の字を念頭に浮べるだけで済むから、非常によく解る。だから日本人の場合では、音讀を耳にしても、字を思ひ出し意味を感じる事の出来ぬ場合が、多くなるのです。

支那文字は元來象形文字だから目で見るには都合がよい。だから默讀には便利だが、耳で聞いたり朗讀したりする場合には、全く解らなくなる。但し熟語になつてその言葉が生活中に非常によく使はれて居り、耳で聞いてすぐ解るやうなもの、「センソウ、リクグン、カイグン」等は全く日

原はしんとした  
バツタの飛ぶ羽音ばかり聞えて  
ゐる  
何だか淋しくなつた  
震 災  
千家 元磨  
凡てが空しく無に歸した  
大地は死に占領され  
市は冷たく沈黙してゐる  
息の根を留めたやうに  
活動が全くない  
慄然とする冷たさが  
人の心を凍らせる  
彼方の死の丘  
廢墟の土に  
喪布のやうな空が  
淋しく垂れ  
凡てが無言である



本語になり切つてゐるから、意味は直ぐ解つて何の不便もないが、問題はただこれが、他の日本語發音と調和するかどうかです。實用上の使用には差支へないが、詩の場合にはその困難が残るのです。

これは實際詩の有難くもあり、恐ろしくもある所です。二千年の年月が立ち、實生活ではもう何の差支へなく使用してゐる言葉でも、詩の中に入れて見る時だけは、かうもはつきり純日本語でない事を痛感させるのだから、詩の深さ、言葉の恐ろしさを必々感じます。

しかし是等も要するに理窟ではない。實際上、我々の思想の中に自然に感じて來るものは、日本語化してゐるのだから、そのまま使へばよい。それはよし音讀漢字にしても、すつかり日本語になり、日本人のものになつてゐるのだから。そしてリズムや發音の釣合ひも、自分の實感によつて自然の間に均衡が取れます。すべて自然に感じるままに書けばよいのです。

問題は一部の人、殊に老人などは殊更に難解な漢語を使つて得々とするのをよく見受けるから、あゝした不自然さが、諸君の詩の中に持ち込まれ

あゝこの塵土の上に  
生き續つた人間のいのちが  
あはれに見える

青き魚を釣る人

室生 犀嵐

ほのかなる惱みのうちに  
ひと日過ぎゆき

ひと日しづかに歸り來る  
魚はかたみに青き眼をあけ  
噴き上げに打たれ悲しむ

藍のうろこも痛く  
釣人の眼もいたく

魚はかなたにのがれ行き  
鉢なでしこの日の表

つよき反射のなかに浮きも悲しむ

みどりを拜む

室生 犀嵐

みどりを拜む  
つみ重なる樹のはてを拜む

ぬやうにと云ふ注意です。

### 十、方言、詛、専門語、術語

方言とは一地方だけの言葉であり、詛とは誤つた使ひ方の言葉、専門語術語とは、特殊な技術とか學問だけに使ふ言葉です。

かうしたものを使つて、詩に特別な味を出そうとするやうな人を、時々見受けるが、殊更にそういふ心算で使はれるのは感心しない。それらが自分のものになつて居り、自然に出て來る場合は、使ふのが當り前だけれど、自分のものでない場合に使ふのは、やはり言葉で詩を作り出そうといふ態度で、感心する事は出来ません。

### 十一、言葉に敏感であれ

さびしい下宿の窓から  
のぼる町の煙とを拜む

けふも安らかに暮れて行くゆゑ  
みどりを拜む

山の温泉

室生 犀嵐

めざむれば寂しやひとり

うぐひすの蒼き谷間に啼き留れり

寂しや唯だに啼き留れり

朝は涼しく明かによくぞ晴れたり

と見れば

谷あひの畑にいと静かに

畑打つをみなあり

寂しや我れ一人山の温泉にありて

もの本などを讀む

友情的なる

室生 犀嵐

この日雪降り

この日わが心鬱せり

この日我れ出で行かむとばせり



詩を作る時は、言葉を組合せて詩が出来るとか、言葉から詩が生れるといふ考へは絶対に持たず、自分の感じが、心が結晶して来て、自然に言葉になり、言葉を見出して来るものと云ふ態度を、堅く守る事が必要です。しかし詩を作る位のもは、平素に於いて充分言葉に對して敏感であり、澤山の言葉を注意深く勉強して置いて、自分の實感が、いざと云ふ場合に、細かい所まで遺憾なく表現される言葉を、自由に發見出来る準備を、平素して置く事が必要です。

詩を作る者は平素言葉を、充分澤山持つてゐなければならぬ。そして言葉に對して、一通りの意味を感じるだけに止まらず、細かい色合までしっかり感じ分けてゐなければならぬ。似た様な言葉、同じやうな言葉もなるべく澤山知つて居り、それについての一々の違ひを、よく噛み分けて置かぬと、いざといふ時、心の中に感じる細かい微妙な味ひを盛り切る事が出来ません。

言葉には意味があるだけでなく、一つ一つ「語感」もあるし、「聯想」

何者かに逢はむ望を持てり  
何者かに――  
何者かに留め難き友情を感じず  
友情的なる憧憬を感じず  
この日雪降り  
友情的なるものを痛感せり  
雪の中に我れ出で行かむとはせり  
夕の歌  
室生 犀星  
人々はまた寂しい夕を迎へた  
人々の胸に温良な祈りが湧いた  
なぜこのやうに夕べの訪れと共に  
自分の寂しい心を通して  
その道つれと共に永い間  
休みなく歩まなければならぬ  
らうか  
きのふはけふのやうに  
眠ることなく  
移り行きもせず  
悲哀は悲哀のままの姿で

もあるし、「色合」もあり、たとへ意味が同じ言葉でも、そうした意味以外の細かい作用に違ひがあるものだから、實感を言葉に表現する場合には、それらを生かして、充分有効に使はねばなりません。

言葉は日常生活により、人の作品により、讀書により、注意深い觀察、緻密な研究によつて、あらゆる機會に、豊富に自分の物にして置く必要があります。「自分の詩は自分の言葉で現はすのが一番よい」と云ふ作詩態度の裏には、平素心掛けて自分の言葉を豊富にして置く事が、特に必要です。自分の言葉が豊富でなかつたならば、表現の範圍が非常に狭くなり狭くなつて了ひます。

言葉と云ふものは、實に微妙で微妙なものだから、日本では昔から「言葉」があることさへ云はれてゐる位です。使ひ方が下手なれば死んで了ふが、上手なれば生きて働らき、まるで生き物のやうに活動するから、そうした場合の微妙さに打たれて「言葉」と尊敬されるのです。

詩を作る場合も言葉が生きてゐなければならぬ。生きて働く位びつたり

また明日へ廻りゆくのであらうか  
かの高い屋根や立木の上に  
けふも太陽は昇つて  
又沈みかけてゐる  
それが其儘に人々の胸に響つた  
人々は夜半の茶卓の上で  
深い思索に沈んでゐた

街と家々と遠方

室生 犀星

この菜の畑も  
畑士の盛り上つた心持をも  
今は是れまでにない親密さを以て  
眺めることが出来る  
一直線に走つた菜の畑は  
ところどころに冬枯れの  
寂しさを點綴してゐる  
ごぼごぼといふ小川の水  
これは又生れて初めて聞く小川の  
音だ  
この正しい流れやうけ！  
どこまでも流れて盡きない此の微  
妙さはどうだ



した言葉が使へるやうに、平素自分を訓練し、そしていざといふ時、最も適切な言葉で、最も適切な表現をしなければなりません。

### 十二、文字について

觀念が外に現はれる時言葉になり、言葉が形を興へられる時文字になる。觀念である間は全く無形のものだが、言葉になると先づ音が出來、文字になると更に形が出來ます。

そのため、觀念の藝術が、言葉に現はれ、文字に現はれて來る間に、最初は音樂的な効果を派出し、次には繪畫的效果を派出する事があります。

それで觀念の藝術である詩も、言葉に托され、文字に托される事から、音樂的傾向のものに進んだり、繪畫的な道を取つたりする事があるが、いづれもそれらは本道ではなく、派生的な脇道です。

詩が精神的な本質から離れて、音響効果を考へ過ぎたり字數律や口調に

いつまでも無限に  
くさむらを分けて行く  
微笑のやうな優しく秀れたるもの  
俺は噓んで喜ぶ  
是らのものを今こそ解り掛けたこ  
とを喜ぶ

#### 氷

室生 犀星

我は張り詰めたる氷を愛す  
かかる切なき思ひを愛す  
我はその虹の如くに輝くを見たり  
かかる花に非ざる花を愛す  
我は氷の奥にあるものに同感す  
その朝の如きものの中にある熱情  
を愛す  
我はつねに狭小なる人生に住めり  
この人生の荒涼の中に呻吟せり  
さればこそ張り詰めたる氷を愛す  
斯る切なき思ひを愛す

#### 晴れ間

室生 犀星

走り過ぎるのはこれです。殊に發音が美しいと云はれるフランスなどは、字音が特にやかましく云はれ、殊に象徴派の場合などは、字音で氣分を現はそうとする傾向さへありました。

また文字の繪畫的效果では、紙の上に書かれたり印刷された時の形態などを、非常に喧ましく云ひ、遂には形態詩などいふ一派を派出しました。

形態詩は未來派、印象派、ダダリスト等の、繪畫音樂其他の姉妹藝術の聯合した藝術運動の場合などに屢々試みられたものです。支那文字のやうな象徴文字はその文字の繪畫效果、西洋語のやうな發音文字は、詩全體の文字の形が構成する圖標的な効果を表現方法に用ゐるのです。元來日本語の假名は發音文字だが、漢字も交ざつてゐるので、時には、假名と漢字の關係を面白がつたり、平假名の丸さ、片假名の簡明さに興味を持つたりして、書き方でも何等かの藝術表現をしてゐるやうに考へるのも、要するに文字の形態効果を弄するもの一種です。

又言葉の發音や響きに特殊の興味を感じたり、漢字の形に興味を感じた

美しい女を見て感心した  
どこからどこまでも美しい  
そしてやがて悵惘な自分に氣がつ  
いた  
間もなくからりとした氣になつた  
襖を渡つて忘れて了つた  
美しい女といふものは忘れ易いもの  
のか  
あんまり長い間美しさに見とれた  
ら  
折角の人生が楽しく無くなるたら  
うに  
襖を渡りわが子の側へ歸つて行く  
私の心はからりとした  
この晴れ間よ  
わが子の美しさよ  
私とはとつとつと歩るく

#### 火の種子

福田 正夫

半かけらの月が僕に冷たい



り特別な文字や言葉に興味を曳かれ、それで特殊の味を出さうとせず、やうな詩も随分あるが、やはり詩の本道からは離れてゐるものです。

文字言葉に對して常に敏感であり、勉強する必要はあるが、それは自分の實感を表現する場合に遺憾なきためであつて、詩の根本問題は飽くまで、「自分の實感」「自分の心」にあるのです。文字なり言葉なりを如何に弄しても、それから幾分でも藝術が生れて來ると考へるやうな事は間違つてゐます。

健康なる勤勞青年の詩は、勤勞青年の健康な心から生れる詩でなくてはなりません。言葉も文字も、それを生かすためのものでなくてはなりません。

冬空をしようつてゐるから  
 青白い風のいろ、夜のいろ  
 武蔵野は夜更けになると  
 木枯の音ばかりになつてしまふ  
 胸に火を焚かう  
 暗い生活を燃しつくして  
 火の子を風に吹き散らしてやれ  
 甲かけらの月が僕に冷たい  
 がそれが何だ、燃え上がれ、

### 第八章 特殊表現（氣分と象徴）

#### 一、詩に表現すべきもの

詩の表現する世界は感情や氣分であり、決して言葉の表面の、その組合ふ意味や、それが組合つて現はれる常識や理智の世界ではありません。従つて表現されるものは、常識や理性から見ても意味の判然するものではなく、言葉の意味だけでは捉へる事の出來ぬ、「氣分」「感じ」「情緒」「心の躍動」といふやうなものであります。しかしそれを捉へるために意味内容の伴ふ言葉を利用するより他ないので、その結果、詩の表面にはもちろん言葉の持つ意味が浮んで來るけれど、しかし意味は決して詩が表現せんと狙ふ所の本體ではありません。詩の現はさんとするものは、その言葉が

### 徴象詩

#### 死の歡び

シャルル・ボードレール

蝸牛這ひまわる泥土に

我れは深き穴を掘らんかな

その土に枯骨を埋め

蟻の如く忘却の底に消えんかな

我れ遺書は殘さし墓は立てじ

死して世の涙を受けむより

寧ろ生き乍ら鵝を招き

汚れたる背嚙を喰ばましめん

おゝ頰上眼なく耳なき闇の友よ

汝がもとへ喜びて來たる死屍

そは腐蕩の哲人腐敗せる人の子

食ひ入れよ、わが屍に躊躇なく

訊ね見よわが骨に死に果てし腐肉

に

生ける日の苦しみ、今もありやと



組合さつて生ずる氣分や察圍氣、リズムといふやうなものであります。

だから詩にそれを現はすには、前述のやうに意味内容を伴ふ言葉を用ひて、常識や理智の世界をも合理的に（筋道立てて）表現すると同時に、その組合せ方によつて、その時の詩的内容を有効に表現しようといふのが、普通一般の表現法であります。かう云ふ表現は第一一二頁の四つの場合の（一）に該當するもので、表面の常識の現はす世界も筋が通り、同時に詩的内容もそれに連れて表現されて來ます。これは表面の理性と詩的内容との均衡が取れて、健康な表現といふ感じを與へます。

しかしもしも、詩が感情や氣分を第一に表現すべきものでありとすれば、それは言葉の意味内容によつて表面の理智的常識的な筋道の方をまづ先に表現して居り、肝心の詩が本當に表現すべきものは寧ろ從屬的に、それに連れて出て來るのを待つと云ふ感があり、詩表現としては、多少消極的だと云ふ嫌があります。

秋の唄

ポール・ヴェレリス

秋の月の  
ギオロンの  
ためいきの  
身にしみて  
ひたぶるに  
うら悲し  
鐘のおとに  
胸ふたぎ  
色かへて  
涙ぐむ  
過ぎし日の  
おもひでや  
げにわれは  
うらぶれて  
ここかしこ  
さだめなく  
とび散らふ  
落葉かな

上田 敏

二、「氣分」表現の程度

そこで當然、もつと積極的に「詩の表現すべきもの」を純粹に強く表現しようといふ努力が生れて來、それがいろいろな程度に行はれ、いろいろな方法で行はれます。それを列記してみると

- 一、先づ表面に現はれる理性的な意味を通し、それと同時に、本來詩が現はすべき世界を、それと均衡を取つて表現する（一九四頁「わが家」）
- 二、表面の理性的な表現を極力少くする（一八八頁「蛙よ」）
- 三、それを全く無視する（一八五頁「竹」）
- 四、更に進んで、表面の理性的な表現を支離滅裂にして意味を通さなくする（二四六頁「黒い蝙蝠」）
- 五、（甲） 逆効果を擧げ、別の意味を發生させる
- （乙） 他の意味表現を持つて來る事によつて本來のものを現はす

無題

ポール・ヴェレリス

空は屋根のかなたに  
いと静かにいと青く  
樹々は屋根のかなたに  
青く深き葉をゆすぶる  
ふと聞けば鐘寺の鐘  
やはらかに鳴り  
打ち仰げば梢の小鳥  
かなしく歌ふ  
あゝ神よ、繁村なる世は  
かしこなりけり  
平和なる街の物音  
かしこより響き來る  
君過ぎし日に何をか爲せし  
君いま茲に何をか嘆けく  
君固れ、若き日に――し  
何をか爲せし



(一) は一般の詩表現の方法で、最も解り易く健全な表現方法とされているが、「詩表現」としては消極的であります。

(二) はやや積極性のもので、表面の意味表現と詩内容の表現の均衡は破れ、表面の筋を通す事は第二とされるため自然多少不完全となり、その代りに力を専ら、本来「詩の内容」となるべき気分、完全な表現に、集中する方法であります。

(三) はその態度が極端になつたもので、表面の理性的な表現は全く無視されて意味を通さうと云ふ努力はせず、その代りそれだけ詩内容の表現に専念するものです。

(四) はこの態度が更に強化され、表面の理性的な表現を、わざ／＼筋の通らぬ支離滅裂なものにし、そちらの方に意味が出て来るのを積極的に防ぐのです。それは表面の理性的な面に多少でも意味が出来て理解されると、読む人の注意力は自然そちらの方へ引き着けられて行き、元來仄かで認識され憎い「詩内容」に注がるべき注意力を奪ふ危険が多いから、積極

ましろの月

ポール・ヴェレヌ

ましろの月

森に咲き

枝々は

緊みに張きて

あゝ愛する者よといふ

底なき鏡

池水に

影いと暗し糸柳

風さめざめと囁きぬ

いざ二人して夢見んと

ひろく優しき

明けさに

月の光は虹となり

涙よひ充てり

夜の空

嘆息

ステファン・マラルメ

わが魂は、あゝ淋しき妹よ

的にそれを防止するために難解にし、いくら理性的に解釋しやうとする人があつても、それを出来なくして了ふ事によつて、読む人の注意を全部、正常な詩内容の上に注がうとするものです。即ち表面の理性的な筋道を抹殺して、「詩内容」だけを強く浮き上げようとするものです。

(五) はただ支離滅裂にするに止まらず、現実的にその詩のもとになる感の理性的な筋道とは、全然違つた他の理性的効果を、人為的に組み上げるものです。そしてともすれば事實の理性的な面のみを見ようとする読む人の注意を、他へ誘導するのです。

(甲) はモデルと全然別な理性的表面を作り、そこに出来上つて来るモデルと別な意味上の効果を喜ぶもので、時にはそのために却つて、本来第一に言はんとする詩内容を無視するやうになる事さへあります。かうすると、既に遊戯的になり興味的になつたものであつて、多少健康性を失ひ病的になつたものと云はねばなりません。

(乙) は、詩的内容を表現するのに、現実のモデルに従はず、それとは全

枯れ葉飛ぶ秋の宿れる君が顔を慕

ふかな

憂愁の庭に遊ぶ白き水、青空に向

ひて見づく如く

わが魂は、汚れぬ君が眼の、定ま

らぬ空の色をば慕ふかな

蒼ざめて澄みし十月の色もやさ

しき青空

その限りなき霞は廣き池水に映

りけり

枯れし葉の惱みの色の風にさまよ

ひ

謎の静さ度きさむ死したる水に

黄ばみし月はいと長き一條の光を

流す

その蒼ざめて澄みし十月の青空

を、わが魂は慕ふかな

永井荷風講

小曲

ステファン・マラルメ

緋には「時」の薫すれと

「妄執」の肉體せにけり



然別なものを持つて来て、その言語的效果によつて、より以上強く具體的に原感激だけを直接に現はさうとするものです。例へば引例による表現とか、比喩とか象徴等による特殊の表現法であります。

かう云ふ風に、一方では理性的な意味の表現を弱くすると共に他方ではその「詩」内容を少しでも強く現はさうと云ふ努力が工夫されて行くのは、當然の事ですが、中には(五)甲の如く、理性減退に急で却つて逆の理性面を形成し且つ本來詩の表現すべきものをも弱めたり失くしたりする逆結果を現はすものが生じた事は注意すべきで、かうなつたものは勿論健康な詩とは云はれません。

### 三、「氣分」表現の方法

翻つて我々は今一度、詩に於いて主目的である「氣分」とか「感じ」と

鏡のそとに溢れたる  
雲の御裳にしかめやも  
心いられの旗しろし  
道の衝に勢へど  
我れはた感か寝たくれを  
枕きてあら寝もきりて  
げに唇のいと切に  
憶るとてもあやなしや  
君戀ひわたるあて人が  
丈け長が髪のかくだみに  
玉をなげうつ心地して  
「名利の叫び」たがはずば  
(上田敏爾)  
そぞろあるき  
アルチウル・ラムボオ  
蒼ざめし夏の夜  
草を踏み萎の香に酔ひ  
我れ小路を行く  
心爽やかに足は軽るく

か「雰圍氣」と云ふやうなものを表現するため、どんな特殊な方法が行はれてゐるかを研究してみませう。

第一、「語感」 詩では「感じ」と云ふものが表現せんとするものの中心であるため、詩に於いては、語感といふものが、非常に大切に取扱はれ尊重され、注意深く識別されてゐます。

詩を作る場合には、「言葉」をただその意味だけで考へるやうな、鈍感であつてはなりません。自分の使ふ言葉に對しては、極度に敏感であつて、それが意味の上に持つ極く微細な違ひは勿論、ただ夫れだけでなく、更に進んで言葉が持つ感じ、即ち「語感」を充分敏感に識別して、充分にそれを使ひ分け活用しなければなりません。そして用語はただ意味上で筋が通るだけでなく、その全體の用語の語感も整然と統一されて、破綻や混亂がなく、それから自ら一つの雰圍氣を醸成するやうなものでなくてはなりません。これは詩の上で極めて大切で、語感の統一といふ事は、作詩上の最も重大な一つの表現法であると云ふ事が出来ます。例へば「憂鬱、憂愁、

風あらはなる  
わが頭を吹く  
我れ語らず我れ思はず  
たゞ魂の底に  
限りなき夢湧いづる  
我れは歩む限りなく  
宿無しの如く  
我れは歩む「自然」と  
戀人の如く  
夜 曲  
アンリ・ド・レニエ  
暮れ方の静かなるそよ風は  
わが歩みの下に踏みて行きし  
リラの小さき花の吐く匂ひを  
足のはとりにまつはらせつゝ  
限りなくその花を散らし行くなり  
わが魂惱みに充ち、わが心漸く醒  
れぬ  
屋根の上に鳩はとまりて  
暮方の空氣をは



憂恨、悲痛、寂寥、寂寞、傷心等々」澤山の似たやうな言葉がある時、我  
我は一々それらの間にある細かい意味上の區別を知つてゐるのは勿論、同  
時にそれが持つ「感じ」の異同についても十分に理解識別しなければなり  
ません。

例へば、同じく「さびしい」と云ふ意味でも、和かみがあるとか、激し  
いとか、新鮮味があるとか、古風だとか、近代的だとか、女性的だとか云  
ふ、意味以外に持つ色合について、十分に感受識別して居なければなりま  
せん。そして主題の「感じ」や「氣分」を、その語感によつて充分言外に  
漾はすだけの敏感さと腕前とを持つて居なければなりません。

次は、そうした個々の言葉の語感を理解し、それを巧みに組合せて一つ  
の雰圍氣を作る事は勿論必要だし、又ある言葉と他の言葉が組合さつたた  
め、そこに意味上の變化だけでなく、新しく特殊の氣分を發生する事も理  
解してゐなければなりません。

然しそれは、言葉の意味に伴ふ「感じ」なり「氣分」ですが、更に進ん

長き啼聲もて悲しませけり  
その嘴よりぞ降り來る  
引き抜きし鳩の羽  
わが心の中に、隠れたる苦しみの  
雪、降り來り

水盤の中、噴水は  
物悲しげに噴き上げぬ  
まろらかに眠れる波を  
揺り動かしながら  
かくてその膝に立ちたる樹々は  
一様におびえおののく  
心の中に思ひ出は、感ひつゝ、嘔り  
泣く

やがて夜は來たれり  
その惱まじき混濁はきたれり  
風は最早吹かず山鳩は飛び失せぬ  
噴水は溜息を洩らずが如く  
聞え出て嘆き悲しむつゝ  
かくて汝の大きく開きたる眼こそ

では、「氣分」や「感じ」だけを、言葉から切り離して直接に純粹に表現  
する工夫も起つて來ます。

第二、「副詞、形容詞」 勿論「感じ」を現はす最も一般的な方法とし  
ては、形容詞や副詞があります。これは最も原則的な方法で、誰れでもや  
る事です。つまり一番適切な「形容句」を發見する事です。

しかしこれも、決して通り一遍の、言葉の意味の上の形容だけに止まら  
ず、勿論、語感とか色合といふものをも、充分敏感に感じて、それに適切  
なものばかりで、揃へねばなりません。そして極く微細な意味の上まで充  
分に表現し盡す上に、更に語感の中に不適切があつたり、或はたとへ極く  
微細な感じの違ひがあつたりしても、直ぐ飯の中に砂が入つてゐるのを感じ  
る如く、充分に繊細に敏感に神経を働かせなければなりません。

そして、用語がすべて自分のものになつて生きてゐねばならない。一部  
にでも、全く自分の言葉でないものや、血の通つてゐない死んだ言葉が交  
り込んで居るやうではいけません。そこから一貫した、その人の個性、そ

夜の中に我れを趁ふかな

(柳澤 健彌)

逝きし日に向ひて

アンリ・ド・レニエ

眠れる池の上に葦はゆらめく  
この時過ぎしは過ぎ行く早き時の  
流れ

あたかも目に見えざる鳥の物怖ぢ  
せる囀りの如く

息つきあへぬ微風の輕るき懐え  
月は静らかに蒼さめし光をば  
曠野の果てもなき廣がりの上に落  
とし

風はそこより折々に運び來る  
青き穀と花つけし野草の匂ひを

されどこいとも微かに騒げる歌  
の一ふし

ここ夜もすがら唄へる噴きの泉  
匠ふかき懐えもてゆするる心の  
なかに



の時の實際の感じが、秩序的に統一的に生きて浮き出て來ねばなりません。

第三、「特殊表現」以上のものは、モデルの理性的な表面と一致する表現で「寫實的表現」といふものですが、更に一步進むとそこに、「誇張表現」「比喻表現」及び「象徴表現」といふ特殊な表現方法が出て來ます。

#### 四、「氣分」の特殊表現法（誇張、比喻、象徴）

寫實表現はモデルの印象が入つて來た通りの形で、表現効果が出されるものです。換言すれば、理性とも一致し、感情が理性と同じ線に沿つて表現される方法で、理性的表面と詩内容とが一致する表現法です。然しそれが一步進むと、「誇張的表現法」と云ふものが出來て來ます。それは或る「感じ」を十分よく解らせるために強く大げさに云ふ方法です。例へば、「非常に寒かつた」とか、「非常に長いひげで、胸の所まで垂れてゐた」

おぼろなる優しき憶みこそ目醒めぬれ

かくて思ひ出は過ぎ去れる時の奥より

暮れ方の悲しくも物柔らかく浮び出づる

さてはまた囁き揺るる物藤の戀の歌謡は

いと遙けき彼方よりこの唇に流れよる (柳澤健譯)

#### 相伴

アルベール・サマン

しろがね色のはこ柳、菩提樹や、樟や……

月は水の面に木の葉の如く散りかかる……

夕風に吹かるる髪に似て

夏の夜のものの香は黒き潮を匂はせ

かくはしき潮は鏡の如く脚き出づ

等は當り前の寫實表現です。けれど、「身を斬るやうな寒さ」「白髪三千丈」などと云へば「誇張表現」で、それはモデルの實際とは違つてゐる。然しそう云ふ理性的表面では、モデルの實際と違ふものを持つて來ても、却つて「長い」と云ふ「氣分」や「感じ」は、寫實法より強く適切に表現されるのであります。

更にその次は「比喻表現」です。これは誇張表現が更に進んだもので、誇張はモデルの實際と違ふと云つても、ただ程度の差、量の差だけですが、比喻の方は、そこへモデルと全然別なもの質の違ふものを持つて來るのです。即ち全然そこに實在して居ないものを持つて來、理性的表面では全くモデルと違つて居るが、その方が「寫實表現」や「誇張表現」より、更に強く、更に適切に具體的に、「感じ」や「氣分」や「形容」を出す表現法です。「全身に水を浴びせられたやうな」とか、「氷の中に立つてゐるやうな」とか、「サンタクロースのやうな白ひげ」「銀の糸を垂れたやうな髪」など云ふのは比喻で、勿論モデルには實際、「水をあびせられた」

揺は浮きつ沈みつ

わが舟は夢幻の境を滑り行くなり

わが揺はみそらを滑る形なき湖の上……

わがやる二本の楫の右なるは「もの憂さ」左は「沈黙」

眠とち、拍子とりつつ

おおわが心よ、揺をやれかしゆるやかに、しめやかに、おほろかに、水を打ちつつ

かなた月は丘の上に眩つきて水の上ゆく我が舟の静けさに聞き入りつつ……

新らしく折りて來し大百合の花三つ、我が脱ぎ捨てし

上衣の上にてしほれ行くなり

おお、色蒼ざめし繁露の夜よ

汝が唇に照び寄るは百合の精か、はたわが魂か



事實もないし、「サンタクロース」も居ないし、銀の髪毛なども實在はして居らぬが、かく存在しないものを描出する事によつて、寫實表現や誇張表現ではとても出来ぬ程に、形容上の「氣分」や「感じ」を、具體的に適切に強く表現するのである。

最後に「象徴表現」と云ふと、或る意味から云へば比喩表現の一種だとも云へます。しかし一般の比喩は、似た物を引用して来て二つを見較べて適切に具體的に表現するのですが、「象徴」の場合は、引用される物だけを示す事と、それから引用される物と形容される物とが、非常に性質が違つてゐる事です。

「象徴」は他の物を引用して来て、具體的で適切な表現をする點比喩の一種と云へますが、「二つの物」を持つて来て「全體」を代表するとか、「判然した形の物」を以つて来て、「形のない物」「目に見えぬもの」を表示すると云ふ點、普通の「比喩」とは違つてゐます。換言すれば、象徴とはそのままでは具體的には表現し憎いものを、何か他の一つのはつきりした

しろがねの夜の黒髪は長き處の糺  
と垂れかかる……  
水の面の月のごと  
空を滑べる櫓のごと  
我が心鳴咽となりて散りかかる  
(堀口大樹)

また秋の來て  
ジャン・モレア

また秋の來て  
朽果てし水車の古池を落葉もて被  
はん時  
また風の來て、破れし戸の隙と  
昔挽臼の廻りゐたる空しき小屋と  
を讀たす時

またしても我れかの汀に行きて想  
はん  
年經て赤き木葛を纏れる壁に身を  
凭せつつ  
かくて我れ冷たく淋しき水の面に  
わが影と背ざめし日の消え行くに

物を持つて来て、その表現力で端的に現はす事でありませぬ。

### 五、「象徴」の意味

一體象徴に似たものに符號、徽章と云ふものがあります。しかし符號や徽章が象徴と違ふ點は、前二者は知識上の理解に基いて始めて解るものだが「象徴」はそのものの自然な實感によつて解るものだといふ事です。例へば音楽に使ふ符號の「お玉杓子」が何であるかと云ふ事は、「樂典」といふ知識がなくては理解出来ませぬ。あの「お玉杓子」をいくら敏感な人が注意深く見詰めて居ても、音楽上の知識が無い限り、いつまでたつても、何の事だか解るものではありません。又、何々會社の社章とかバツヂなども、それ自身の實感からは決して解るものではなく、それが何を現す約束になつてゐるのかと云ふ知識が無かつたら、いくら敏感な人が眺めてゐても、何の事だか解るものではありません。それは結局符號とか徽章と云ふ

眺め入らん

(堀内大樹)

空氣は陽氣、時は  
楽しい五月

海は鐘の上に光つてゐる。海は貝  
殼のやうに光つてゐる。そこで  
釣をして見たいといふ、氣がす  
る。空は陽氣、時は楽しい五月

離れ上の海は軟かだ。まるで子供  
の手のやうに軟か、御でて見た  
いと云ふ氣がする。空は陽氣、  
時は楽しい五月。

微風の楽しい生き生きした手の中  
で、海と離れとを結びつける針が  
動いたり光つたり。空は陽氣、  
時は楽しい五月。

海は鐘の上に、蝶にも似た細かな  
ものを現はす。小舟が用掛ける



ものは理智的な約束、理解によつてのみ成立してゐるもので、それが現はすものは「知識」であり「藝術」ではありません。その點「象徴」とはまるで違つてゐます。

「象徴」はそれが持つ自然な質感、藝術的效果による表現力を持つてゐるものです。だから象徴の表現力は「藝術」です。例へばわが國の國旗「日の丸」は旭日昇天の勢を示すものですが、それは決して「あれは朝日の所だ」と云ふ説明を聞き、知識を與へられて始めて解るのではなく、純白な中央に眞紅の圓を見た質感、藝術效果だけで、充分それが旭日昇天の勢を現はすものだと思ふ事を、感じさせる力が夫れ自身にあります。

しかし徽章や符號と「象徴」が似てゐる點は、一寸現はし憎いものを、一つで非常に具體的に判然と現はすと云ふ點です。違つてゐる點は一方が「知識」で他方が「藝術」だと云ふ點です。

次に「象徴表現」と「寫實表現」を比較してみると、同じ旭日昇天でも、寫實の場合なれば、例へば油繪か日本畫で「海岸の朝日」でも描いた繪の

空は曇氣、時は楽しい五月。

鐘は金色の甲蟲のゐる深い井戸、吹き過ぎる微風は、更に轟はしい。空は曇氣、時は楽しい五月

海は、顔の上の涙のやうに軟らかく、鐘の上の涙のやうに軟らかく、港の方へ下つてゐる。しかし誰れも、泣かうと云ふ氣にはならぬ。

「一人の子供が海に落ちた」「海の中で死んだ。栗しそうな死だつた」。しかし誰れも泣かうといふ氣にはならぬ。空は曇氣だ、時は楽しい五月。

(柳澤健爾)

この娘みまかりぬ戀のまなかに

ポール・フォーレル

この娘、みまかりぬ。戀の眞中に

場合を想像して下さい。それはその時の太陽の色、雲の色、空、海、松などまでさへ、實に生々と「その時の光景をその儘」即ちモデルから受ける印象の通りに表現してゐます。しかし「日の丸」の方はと云ふと、何等實物とは似て居りません。あの眞紅の色は勿論の事、實際上如何なる時の太陽と雖も決してあんな眞紅である筈はなく、如何なる點から云つても實際のモデルの色を表現してゐるとは云へません。またあの生地は純白だつて、決して實際の景色にある筈はなく、是れまた決して實際の通りではありません。かくまるで「實際の日の出」には似て居らず、全然藝術效果の違ふ「白地に赤の日の丸」を借りて来て、旭日昇天の勢を表現してゐるのです。かく、その「實物の日の出」とは何等似てもつかぬあの「日の丸」こそは、どの寫實の「日の出の繪」よりも却つて力強く、具體的に、表現し憎い「旭日昇天の勢」を表現してゐるではありませんか。そして、あの「日の丸」は實際どの朝日の光景にも似てゐないのに拘らず、あらゆる朝日の出る勇壯な姿をただ一つの方法で、最もよく代表してゐるではありません

娘をば、人々は地に埋めぬ、地に埋めぬ。明け方に。

娘をば人々はたゞひとり、横たえぬ、たゞひとり。晴衣着せ。

娘をば人々は、たゞひとり、横たへぬ、たゞひとり。棺の中。

人々は歸り來ぬ、樂しげに、樂しげに。日と共に。

人々は唄ひたり、樂しげに「人はみなかくなる」と。

「この娘、みまかりぬ、みまかりぬ。戀の眞中に」。

人々は野に行きぬ、野に行きぬ。常のごと。

朝なり

蒲原 有明



んか！ しかもそれは、決して理窟を聞き、知識があつて始めてそうかと理解する「知識」ではなく、「純白の地に眞紅の圓」と云ふ自然の藝術効果、實感に基づくもので、何人にもすぐ解り、然も見る人に、生々と振ひ立たせるだけの、生きた感激を興へるものです。「象徴」とは、そういう生きた作用をするものです。

### 六、東洋的手法

かくの如く「象徴」と云ふ表現方法が、非常に表現し、憎いものを、具體的に強く、はつきり表現するものですから、この表現方法は自然種々な藝術に利用されて居ます。殊に注意すべき事には、精神的で直感的な東洋人は藝術表現の方法として、最もこの象徴表現に長じて居り、理智的で現實的な西洋人は概して、寫實表現に長じてゐると云ふ事が出来ます。(第十章四項、俳句の項参照)

東洋ではこの象徴表現は、古來各種の藝術に活用されて居ましたが、西洋でも近代に入ると、盛んに象徴表現をするやうになり、それが西洋の近代藝術の一特色となつてゐるのですが、その多くは東洋に學んだものであり、その點實に、西洋は藝術に於いて、近代に入つて東洋に征服されて居る、といふ觀のあるのは痛快な事でありませぬ。

### 七、詩に於ける象徴的手法

「詩」が現はすべきものは元來、「氣分」「感じ」「氛圍氣」「心の躍動」といふやうなもので、是等は普通の言語表現では非常に表現の難かしいものであります。そこで「表現の困難なもの、巧みに具體的に表現し得る」所の、この「象徴表現法」といふものが、詩の世界で、非常に重要視され利用されるのは、蓋し當然の事かも知れませぬ。實際「詩」に於いては、象徴表現は一つの特別な表現法として、非常に

朝なり、やがて川筋は  
ほの白めども夜の胞を  
運下徘徊るくぐもりに  
市編に列ぶ土蔵の  
壁もおぼれく川の關  
朝なり、やがて明け方の  
河岸のけしき動き出で  
堀江傳ひに差す朝の  
さざし早くも催せば  
逆押しのぼす濁り水  
見よ、流るるは瓜の皮  
核す、團扇、柿屑  
消えもなづめる朝露の  
鮎え開を群れて陽鳥  
何を喚るか飛び渡ふ  
また此方にはつらなみて  
黒すみ立てる橋柱  
人目はばかりをみな等の  
ひそめき合ひて足早に  
渡れば靴む襪の板

水は濁れどくちなはの  
あやに動めき縁飾り  
琉璃の端光り碧よどみ  
揚島の代にまつはりて  
鮎り色めき溢れ来る  
青物車いくつ、はた  
羅子人等、物乞ひの  
空手——魚荷の押し送り  
さては荷舟の脚置く  
竿さし上る舟男  
朝なり、緊き營みの  
人の世映す濁り川  
朝なり、河岸の土蔵も  
輝き出でぬ今日もまた  
かくて開くるわが「想」

水 鳥

蒲原、有明

靜やかに波たたぬ  
古池の旋みに映れる  
をぐらき樹々の



重要なものとなつてゐるのであります。

我國では古來短歌とか俳句といふやうな小型詩が盛んであり、小さい形の中によく大自然を一氣に掴む必要があつたので、自然に象徴的表現は盛んに用ひられて非常に發達し、その實例は極めて豊富ですが、それは今述べてつある詩には直接の關係がないから省略して、茲では新體詩以後の詩に於ける、象徴表現に就いてのみ説明する事に致します。

詩に於ける象徴的表現法が日本に入つて來たのは、上田敏の紹介でフランス詩壇から流入して來たものであり、わが國で試みた最初の人では蒲原有明が最も有名であります。だから詩に於ける象徴表現を理解するためには、先づフランス詩壇に於ける象徴詩運動を一應理解して置く必要があります。上田敏もその譯詩集「海潮音」の序に「詩に象徴を用ふる事、必ずしも近代の創意に非ず、是れ或は山嶽と共に古きものならむ。然れども是れを作詩の中心とし本義として殊更らに標榜したるは、二十年來の佛蘭西新詩を以つて嚆矢とす」と云つてゐます。

影のわびしさ

かゝる眺めには  
ひとと嘆かるるや——あな  
息附ゆる水の面を  
蒼白みたる光ぞ咽ぶ

いとも凄まじく  
にはひもあらぬわが夢よ  
寂びたる冬の袖を、  
胸毛眞白に、  
水禽はまどろむけはひ

暗みゆく「想」の空より  
雲はいま池の面にくづれ落つれど  
浮びて、身しろがぬ  
水禽の夢見ごころ

あまりりす  
あまりりす  
おほどかに  
ひとり微笑める  
わが戀の

蒲原 有明

### 八、フランス象徴派の移入

フランスの象徴派は、ボードレールに先驅を發して、ヴェレーヌ、マラルメ、ラムボオ、アンリドレニエ、アルベルサマン、ジャンモレア、ポールフォール等多數の詩人達によつて、象徴主義運動として展開されたものであります。

それは一八八五年以後で、かうした運動が詩壇に捲起つた原因は、その直ぐ前の時代が、所謂「高踏派」詩人の時代で、ゴーチエ、ルコントドリール等が餘りにも彫心鏤骨、技巧の精緻、韻律格調の嚴正を極めた詩風を横溢させてゐた所から起つた文學運動であつて、その運動の特色は嚴重極まる韻律規約からの解放、即ち「自由詩運動」と共に、高踏派の表現の餘りにも適確精緻なのに對抗する朦朧渺茫たる氣分の表現として「象徴的方法」を取つた事にあつたのです。

花やあまりりす

ちやしろも  
曇にするれんの  
照りいづる  
霜に似もやらず

思ひ屈し  
少したゆげにも  
うつむける  
あはれ、あまりりす

邪宗門秘曲

北原 白秋

われは思ふ、末世の邪宗、切支丹  
でらすの魔法

黒船の加比丹を、紅毛の不可思議  
國を

色赤きびいどろを、匂鏡きあんし  
やべいいる

南蠻の機留稿を、はた、阿刺吉、  
珍葩の酒を



だからフランスのこの新運動は、三つの特色を持つてゐました。(一) 所謂「自由詩」の韻律解放運動、(二) 格調や韻律から来る口調のよさとは趣きを異にした「新しく平明な内在律」の音響的效果の活用、(三) 描寫實體の現實性の減退、即ち朦朧たる氣分表現、この三つがそれであり、フランスの象徴派の詩は同時にこの三特色を兼ね備へて居るのでありますが、「象徴」は勿論その最後のものを現はすために利用された方法であります。そして他の二特色と結び着いて一つの大きい文學運動となつたフランスの「象徴主義詩」は單に昔から部分的に一表現法として象徴を用ゐた「象徴詩」とは、その文學史的な意味が違つてゐる事を注意すべきです。

上田敏が最初にヴェレーヌの詩を翻譯紹介したのは明治廿九年ですが、象徴詩運動を各種誌上に紹介し始めたのは日露戦争數年前でした。そして蒲原有明がいち早くそれを自ら試みたのであります。(上田敏の「海潮音」の出版は卅八年十月、蒲原有明の「春鳥集」は卅八年の七月)

目見背きドミニカびとは陀羅尼誦  
し夢にも醒る  
祭制の宗門神を、あるひはまた、  
血に染む聖骸  
芥子粒を林檎のごとく見すといふ  
けれんの器  
波羅華僧の空をも覗く伸び縮む奇  
なる眼鏡を  
屋はまた行もて遣り、大理石の白  
き血潮は  
ぎやまんの靈に色られて夜となれ  
ば火點るといふ  
かの美しき越懸機の夢は天鷲絨の  
蕪りにまじり  
珍なる月の世界の鳥獸を映像す  
と聞けり  
あるは聞く、化粧の料は毒草の花  
より絞り  
腐れたる石の油にて膏くてふ摩利  
耶の像よ

しかし勿論フランスと日本とは國情も違ふし「詩の規則」「詩の歴史」も異つてゐるから、如何にフランスから移入したとは云へ、日本の象徴詩はフランスの祖型とは、非常に面目の異つたものが生れました。

元來フランスの詩の規則は非常に複雑で、字數だけではなく音韻の上にも而到な規則がありますが、特に象徴主義運動發生直前は、詩法を最も嚴格に守る高踏派全盛の時代でした。しかし日本の方は、新體詩運動が漸く終末に近づいた頃で、定型律がすたれ「破調」が行はれてゐるいはば「文語自由調の時代」でありました。で「詩の規則」も僅かに字數律が痕跡を止めて居るだけで、然も文壇に現はれた「言文一致運動」はまだ詩壇の中に入つてはゐないといふ時代でした。かうした彼我の相違から、フランスの象徴詩の三特徴も、日本へ入つて來ると非常な變態をしたのです。

(一) 「韻律開放」

これは日本ではそう簡單には實現しなかつた。何故なら一面から云ふと

はた、羅旬、彼爾杜瓦爾らの横つ  
づり音なる假名は  
美しき、さはいへ悲しき歡樂の音  
にかも響つる  
いざさらば我等に賜へ、幻惑の伴  
天連聲者  
百年を利都に縮め、血の礎背にし  
死すとも  
惜しからじ、願ふは秘秘、かの奇  
しき紅の夢  
善主殿、今日も祈に身も囁も蕪り  
こがるる  
赤き僧正  
北原 白秋  
邪宗の僧ぞ彷徨へる……  
躍揚へつゝ  
黄昏の聖草園の外光に  
浮き出でながら  
赤赤と毒のほめきの恐怖して  
顔えをののく  
陰影のそこはかもなきおぼろめき



當時の「新體詩」は既に定型律を離れて「破調」となつて居り、いはば「文語の自由調」になつてゐたから、彼が高踏派の嚴重な詩格に惱まされたやうな「詩法の過重」といふ實情は決して日本にはなかつたのです。然も日本語はフランス語と違ひ文語と口語とが非常に大きい差を以つて居り、たとへ文語の定型解放が行はれるたとしてもそこにはまだ、字數律の性格が強く残つて居り、口語體とは非常に大きい差があり、「口語詩」の成立を見なければ、到底本當に字數律から解放される「韻律解放」が完成したとは云へないのです。所がこの「口語詩」成立にはまだ數年の日子を要し、明治四十年まで待たねばならぬのでした。

だから象徴詩は日本へ入つて來てもフランスに於けるやうに簡單に「韻律開放」を伴ふ事は出來ず、日本では「象徴詩運動」と「韻律解放運動」は別々に別れて了ひ、象徴詩運動は日露戦争前後に行はれたが、韻律開放の完成とも見るべき「口語詩運動」はそれより數年後の明治四十一、二年に行はれたのです。しかも不思議な事には、日本ではこの二運動がいつも

まへに、うしろに……  
さはあれど、日の光の  
水の潤なる草の若か芽に願ふ時  
あるは、露ふる遠方の窓の硝子に  
その青きソロのピアノの咽ぶ時  
腫脹多つ身動がす  
長き僧服  
爛爛する暗紅色のほひしてたゞ  
暮れなやむ  
さて在るは、さきに吸ひたる  
ハツシユの  
毒のめぐりを待てるにか  
あるは激しき歡樂の後の覺醒や優  
ぶらむ  
手に持つは黒き鼻  
爛々と眼は光る  
そのすそに蟋蟀の啼く……

提琴樂頌

北原 白秋

ひとわが精舎の庭に

對立する運動として發達し、夫々が相反する方向を目指して、別々に發展して行き、決して合流も調和もしませんでした。

(一) 「音響効果」

これは韻律解放後の内在律から生れて來る新鮮で平明な言葉の音樂的美しさですから、韻文の口調のよさとは違ひ、まだ韻律開放を完成して居らず、定型律は破つても、まだ文語を使用してゐるため多分に字數律的な音感を残してゐる當時の日本詩壇に、之を求める事は不可能でした。

(三) 「象徴表現」

フランス象徴主義詩では韻律開放をして、自由平明になつた格調で、象徴的手法を用ひ渺茫たる気分や雰圍氣を表現したのですが、眞に「平明な口語の自由詩」をまだ獲得して居らぬ當時の日本詩壇では、そう云ふ平明にして渺茫たる雰圍氣を象徴する事は、とても出來る筈がなかつた。しか

晩秋の靜かなる入り日の中に  
あはれまた薄黄なる噴水の吐息の  
なかに  
いとほのにギオロンの、その絃の  
いとほのにうれひ泣く  
燭の火と懺悔のくゆり  
ほのほのと、靡いづる白き衣は  
夕暮に言もなき修道士の長き一列  
さあれ、いまギオロンの苦しみの  
刺すがごと火の酒の  
その絃のいたみ泣く  
またあれば落日の色に  
夢燃ゆる噴水の吐息の中に  
さらになほ歌もなき白鳥の愁ひの  
もとに、  
いと強き硝子の、黒き火の  
地の底の導火線き  
ギオロンぞ狂ひ泣く  
跳り來る車輪の響



しそれのみではなく「象徴表現」と云ふ事自身も充分に解つてゐなかつたため、實際輸入當初の日本の象徴詩の象徴的表現法は、誠に不完全極まるものでした。日本詩壇に正しい象徴的表現法が出て來たのは、實に第二期以後であります。移入直後の第一期は、象徴詩とは云つてゐるが、肝甚なその表現法は實際上は「象徴」を使用せず、他の方法（古語使用）によつて朦朧曖昧たる氣分を表現し、それが象徴表現の結果と似てゐるので、之を「象徴表現」と考へ、之を「象徴詩」と呼んでゐたのであります。

そして是れが眞の「象徴詩」に成長するまでには、まだ幾變遷を経なければなりません。次に我が國詩壇に於ける象徴詩の成長を略述して置きます。

### 九、日本の象徴詩の發展

第一期 しかし實際は、第一期の日本の象徴詩は本當は何等象徴表現で

毒の彈丸、血の烟、閃めく双  
あはれすは火とならむ、  
噴水も、精舎も、空も  
紅の懸懐の、その果ての  
瞬間の叫喚燒き  
ギョロンぞ言ひたる

艦を抜けよ

北原 白秋

はやも駆け、鐘鳴りぬ  
わが子等よ

御堂にははや夕の歌きこえ  
艦の火ともるらし、艦を抜けよ

もろもろの美果實籠に盛りて

汝が鳩ら畑に下り、しらしらと  
歸るらし、夕づつのかげを見よ

我等いま、空色の帆の間に

新なる大海の香爐探り  
額に任せぬ、ひるがへる魚を見よ

さるほどに、跪き、ひとひとは  
目見青き上人と夜に騎り

も象徴詩でもなく、實は、意味不鮮明な古語の濫用によつて、詩効果が鮮明さと適確さを失くして、表現を曖昧朦朧とさせたに過ぎないのであります。然し當時の歐米心酔者流は夫れを以つて、直ちに佛蘭西流の象徴詩我れに出現せりとして喝采歡呼したのであります。偶々結果だけ見ると曖昧模糊としてゐる點は似てゐるとしても、一方は平明な自由詩が本當に象徴によつて表現した「寡圍氣」ですが、日本のそれは晦澁難解な古語の濫用から來た「意味の不鮮明」であつたのです。當時日本詩壇の詩に對する心持ちは、まだ平明な氣持になり切らず、詩といふと何か上品で高尚な特別なものといふやうな觀念もあり、特に「象徴詩」と云へば一そう深淵高級なものとも考へられ、高級神秘的な古語を使用したのであります。「自分の言葉」でない古語を使つてゐる所へ「自由詩と共に成立したフランス象徴詩」を移植する事は餘りにも無理な愚な事でした。かういふ事は蓋し外國文化の渡來當時には常に起り勝ちなもので、蓋し外國文化を不消化のまま丸呑みにした結果の悲喜劇であります。

捧げます御くるすの香にや酔ふ  
うらうらと咽ふらし、歌をきけ  
われらまた祖先らが血によりて  
注がれし假名文の御體にぞ  
未よ永久に照みあれ、われらもと  
鳩半つつ囀らまし、帆をしぼれ  
はやも駆け、鐘鳴りぬ  
わが子等よ  
御堂にははや夕の歌きこえ  
艦の火もくゆるらし、艦を抜けよ

思ひ出

北原 白秋

思ひ出は首すぢの赤い螢の  
聲過ぎの覺束かない觸覺のやうに  
ふうわりと霞みを帯びた  
光るとも見えぬ光

あるひはほのかなる穀物の花か  
落穂ひろひの小唄か  
暖かい酒食の甕で  
ひきむしる鳩の毛の白いほめき！



然し勿論かういふ不完全な移植でそのまま根が生え成長を始める筈は無く、此の第一期象徴詩運動は大して普及発展する力もなく萎縮し、日本詩壇の一角に明治四十年頃から、佛蘭西とは違つて象徴派詩人とは全然別の方向、即ち當時文壇を席卷しつつあつた自然主義運動の一翼から「詩壇へも言文一致を！」と云ふ運動が起り、「口語詩」を確立して韻律解放をすすめる自由詩運動が花々しく展開されて來ました。これは先の象徴詩運動が忽ち古典的傾向に入つて高踏的な局部運動と化したのに反して、素晴らしい勢で普及し氾濫して、全詩壇的大運動となり、忽ちの中に「口語詩」を成立させて、韻律解放を完成して了りました。そして詩壇にこの運動が展開し始めるや、第一期の象徴詩運動は、全く中心から片付けられて了つた観があります。

第二期 フランスに於いてもああいふ象徴詩運動が成立したのは、「自由詩」の韻律解放によつて、詩の姿が平明なすつきりしたものになる事を同伴して始めて成立したのであります。だから日本でも、そうした意味の

晋色ならば笛の韻ひ  
ひきがへるの啼く  
醫師の藥のなつかしい晩  
薄ら明りにて吹いてるハーモニカ  
匂ならば天鵝絨  
骨牌の女王の眼  
道化たビエロの顔の  
何かしらさみしい感じ  
放埒の日のやうにつらからず  
熱病のあかるい痛みもないやうで  
それで因て暮春のやうに柔い  
思ひ出か、ただし、わが秋の中古  
傳説？

水盤

三木 露風

あふるる水盤  
日脚もろとも影傾きの  
もつれつゝ揃みつゝ  
しみゆくや理の眞底に

象徴詩の成立は到底、第一期に於いて求め得る筈はなく、やはり自由詩が成立し韻律解放が完成した後でなければなりません。だから明治四十年の口語詩成立は、此の點でも非常に意味深いものであり、當然これは、我が國の象徴詩發達の上に影響を與へぬ筈はありません。

事實明治四十一年の口語詩運動の影響は、わが國の象徴詩に劃期的な變化を與へ、口語詩運動が最初の一段落を告げると直ぐ、北原白秋や三木露風等の驍將によつて、第一期の犯した誤謬を清算して、象徴の本義に徹した遙かに正しい方向をもつた歩みを始めました。しかし不思議な事にフランスの祖型では一つであつた象徴詩運動と自由詩運動とは、わが國では間もなく對立的な立場を取り、口語詩運動の中心が「自由詩社」の連中の手に移つてからは、北原三木の象徴詩人達は口語詩から退却して文語調に戻り多少の古典味をさへ加へるやうになつて來ました。同時にヴェレーヌ風の渺茫たる「情緒象徴」から變つて「感覺象徴」に移る傾向を呈し異色ある日本象徴詩の特徴を見せ始めました。日本の象徴詩運動が古典色を持つ

さびて幽なるその聲よ  
濡れの光のさしそひて  
朱と霞む聲運の  
忘我の囁の立ち迷ふ  
うるほへる石だたみ  
象牙の白さ  
彫りし芝居は忘られて  
時は靜かに脚きぬ  
地に堅く踏へる串銅獅身像は  
今もかはらず水盤を捧げたり  
夢は身に、身は夢に  
たゝたと響く無心

水底の月

三木 露風

水底の月のかけ  
さびしく頼めりとなし  
暗らき緑の藻を分けて  
音なくその身を揺りながら



たのは、最初蒲原有明出發の仕方に既にその種子が蒔かれておりました。そして、第二期象徴詩運動の後半には「自由詩社」の口語詩と對立して古典色を濃厚に加へるやうになり且つ「感覺象徴」に移るに至り、その歩み方は平明な現實的、大衆的な自由詩の行き方とは、はつきりと正反對な貴族的、高踏的な方向を取るやうになりました。

### 一〇、象徴詩の頹廢

第三期 象徴詩に萩原朝太郎、日夏耿之介等の新進が現はれた頃には、一方口語詩の方でも當時の社會事情を反映して、單なる自由詩の域から一步を踏み出して、思想詩、人道主義詩さては民衆詩といふやうな傾向を持つやうになつておりました。象徴詩はこれと對立して第二期の古典的、感覺的傾向から更に一步を進めて多少の頹廢的傾向を示しつつ神秘主義の色彩を濃厚に加へて來たのです。そして自由詩がプロ詩の方へ突進する頃は、象

あゝ定まらぬ胸のかけ  
たゆたひつ住かわつ  
さはされど  
安らかならぬ隈はなし  
沈黙の夜半よ  
白き輝きただありぬ  
白き輝き月ならず我ならず  
夢と眞の淵に住む

鶉

三木 露風

塵枯れて白く  
霰りたるに  
風吹きて淋し  
水の邊の秋の暮よ  
かかる時  
鶉來り鳴く  
冬、雪の中の笹にも棲む  
あはれかの鶉よ  
鶉は谷に下り

徴詩も新散文詩や超現實主義詩に落ちて行く兆候を見せ始めました。

そして此の頃から、象徴詩はそれが表示する詩内容だけでなく、それを表現するために借りて來られた言葉の表面上に現出する色彩効果を喜ぶ傾向が著しく現はれて來ました。是れは更に一步を進めて、内容を表示する欲求よりも、引用される言葉の表面的色彩の組合せが生ずる奇怪な色彩を喜び、更にそれによつて生ずる虚妄の合理性を面白がるやうになると、そこには最早や超現實派の詩の誕生が豫感されるのであります。

上述の如く、象徴詩は本來、言葉の表面の理性的な意味内容では捉え憎い「渺茫たる気分、雰圍氣」を巧みに象徴によつて捉えて表現すると云ふ事にあつたのですが、それは詩が表現しようとする全體的の内容の事であり、かう云ふ象徴的表現方法と云ふものは更に部分的な細部表現にも用ひられるため、或は嚴格に「象徴」のみでなく、「偶喩」、「諷喩」等いろいろのな比喩表現法が、象徴詩の中に用ゐられるやうになり、元來渺茫たる氣

谷の中にも啼く  
蘆の葉と笹とを吹く  
秋風の白さよ

綠色の笛

萩原朝太郎

この黄昏の野原のなかを  
耳の長い象たちがぞろりぞろりと  
歩るいてゐる  
黄色い夕日が風にゆらいで  
あちこちに帽子のやうな草つ葉が  
ひらひらする  
さびしいですか お嬢さん！  
ここに小さな笛があつて、その音  
色は澄んだ緑です  
やさしい歌口をお吹きなさい  
とうめいなる空にふるへて  
あなたの聲氣を呼び寄せなさい  
思慕のはるかな梅の方から  
ひとつの幻像がしだいに近づいて  
來るやうだ  
それは首のない猫のやうで 墓樹  
の草影にふらふらする



分を表現し朦朧たる詩感を現はす筈であり、その言語的表面は、最初は筋が無いとか合理性が減退すると云ふ程度であつたが、後には次第に、部分部分の象徴や比喩の言語的な強い効果が、一種特別な「味」や「匂ひ」や「色彩」を呈するやうになり、遂にはその言語的表面上に漂ふ「味」「匂ひ」「色彩」に一種特別な表現興味を持つ事になります。

本来、言葉の表面的な意味で表現し憎い「気分」「鬱悶氣」等の内容、を何とかして表現しようと云ふ目的で取られたのが、象徴といふ方法だつたのですが、遂には言語効果に關心が移り、段々と目的と手段とが入り替る事になつたのです。そしてそれが遂に全く逆均衡にまで進み、遂には超現實派のやうな不健康な、病的な詩も生れる事になつたのです。

日本の象徴詩の表面の變化即ち理性減退の状態を見ると、先づ最初は表面が極端な古語で包まれてゐます。そして人々はその奥に何かあるやうに考へて、一生懸命に古語解釋をする所が獨特の興味を呼んだらしい。次は一度口語詩運動で再出發して清新になつた象徴詩は第二期後半には再び古

いつそんなに悲しい暮景の中で  
私は死んで了ひたいのよう。お  
嬢さん!

黒い蝙蝠

萩原新太郎

わたしの愛憎は羽ばたきながら  
ひらひらと部屋中を飛んでゐるの  
です  
あゝ何といふ幻覺だらう  
とりとめもない哀情な日和が 淋  
しい涙をながしてゐる  
もう追憶の船は港をさり  
やさしい戀人の握手もさらさら  
乾いてしまつた  
草場の見識のひげはふるへて  
季節の亡霊のやうにけの白く過ぎ  
て行くのです  
ああ私は何も見ない  
せめては片戀の娘たちよ  
おぼろにかすむ墓場の空から  
夕風のやさしい歌を歌つておく  
れ

興味と感覺性を呈し、人々はその奥に匿された現實を想像する所に快味を感じた。第三期では合理性は全く消え、詩の表面は全く奇怪神秘で特殊の病的興味を呼び起すものがある。更に最後の超現實派の詩の表面は、虚妄の現實を呈し、その怪奇を見る事を自ら楽しむのであります。

象徴詩のこの「合理性の退却」は確かに素人をして「此頃の詩は解らない」と嘆ぜしめるに足るものがあります。凡そ近代の詩を見て素人に「解らない」と嘆ぜしめる原因になると思はれるものに二つあります。一つは自由詩のリズムで、今一つは象徴詩の合理性の退却でせう。しかし是等は決して理解するに困難なものではなく、リズムを解すれば詩の美しさが解り、理性の後退の理由が解れば、象徴の面白さが解ります。

象徴表現は非常に難かしい問題ですが、近代詩に於ける極めて大切な問題です。象徴詩が「働く者の詩」として果してどの位適切であるかは多少の疑問を感じるけれど、近代詩の中に於ける重要項目として、自ら作る事は兎に角、過去の詩人の業績を知る上に、これを理解して置く位は必要です。

黒い風琴

萩原新太郎

おるがんをお弾きなさい 女のひ  
とよ  
あなたの黒い聲物をきて  
おるがんの前に坐りなさい  
あなたの指はおるがんを弾ふの  
です  
かるく やさしく しめやかに  
雪の降つてる音のやうに  
おるがんをお弾きなさい 女のひ  
とよ  
誰れがそこで唱つてゐるの  
たれがそこでしんみりと聴いてゐ  
るの  
ああこの眞黒な愛憎の闇の中で  
べつたりと壁に吸ひついて  
恐しい巨大なおるがんを弾くのは  
誰ですか  
宗教の激しい感情 そのふるふ  
擁護するばいぶおるがんくれえ  
な!



### 第九章 専門家の詩と諸君の詩

(愛國詩と職場詩)

専門家の詩と諸君の詩は、同じものであろうか、違ふだろうか？ 専門詩人と諸君とは、同じだろうか、違ふだろうか？

詩精神と云ふものは、すべての人にあり、すべての人は詩を作る事が出来る。その意味では、すべての人は「詩人」と云ふ事が出来る。しかし専門家を「詩人」と呼ぶのは、この程度の、ただ「詩を作る人」と云ふだけの事でないのは明かです。では「専門詩人」とはどんなものか？ そしてそれが一般の詩を作る人の場合とはどう違ふかと云ふ事は、相當難かしい問題です。

しかしそれは將來諸君が詩を作つて行く上に、その方向、心構へ、態度

等をきめる上に非常に大切な事だから、茲で少しく研究して置きませう。

「詩の専門家」と云ふ事は、詩が非常に巧い人、「素人離れしてゐる人」と云ふ事だろうか？ そうだとすれば、諸君だつて今後圖抜けて巧くなれば専門家になれるわけだ。それとも「全心を打ち込んで、詩だけ専門にしてゐる人」の意か。それとも「職業として生活してゐる人」と云ふ意味だろうか？ 實際上どうなつてゐるか、歴史的に振返つて見ませう。

#### 一、始め詩は仕事ではなかつた

我々はすつと古い昔から、澤山の立派な詩が残つてゐるのを知つて居り、それを作つた数多くの偉大なる詩人を知つてゐます。しかしその殆んどすべては、後世に残るほど立派な詩を作つてはゐるが、生きてゐた當時は皆な何かしらの職業を持ち、生活を持つてゐた人で、詩だけで生活し

お祈りなさい、朝氣の人よ  
おそろしい事はない、おそろしい  
時間はないのです

お弾きなさい、おるがんを  
やさしく、とうえんに、しめやかに

大雪の降り込む時の松葉のやうに

明るい光彩をなげかけてお弾きなさい

お弾きなさい、おるがんを

おるがんをお弾きなさい、女のひとよ。

あゝ眞黒な長い辯物をきて

しげんに感情のしづまるまで

あなたは大きな黒いおるがんをお弾きなさい

おそろしい暗闇の壁の中で

あなたは熱心に身をなげかけるあなた！

ああ、なんといふ激しく陰鬱なる感情のけいれんよ。

#### 冬の海の光を感ず

藤原朝太郎

薄くに冬の海の光を感ずる日だ。

淋しい大浪の音をきいて心は涙くむ

けふ沖の鳴戸を過ぎて行く舟の乗手は誰れなるか

その乗手らの黒き腕に浪の乗りて傾く

ひとり凍れる浪のしづきを眺め

この日向に遣ひ出づる蟲けら共の感情さへ

あはれを求めて砂山の影に遣ひ登るやうな寂しい日だ

薄くに冬の海の光を感ずる日だ

あゝわたしの憂鬱の廻えざる日だからかうと鳴るあの大きな浪の音をきけ

あの大きな浪の流れに向つて

孤獨のなつかしい鈍銀の鈴を振り鳴らせよ

私の傷める肉と心



てゐた人は皆無と云つていい。我々はその人の作品ばかり見て、その人に他の本職があつた事を忘れてゐるから、専門家のやうに思ふけれど、殆んど一人も専門家はゐない。

それには一つは、ずつと昔の社會は組織が單純で、分業が行はれて居らず、種々な事がまだ獨立の職業になつてゐなかつたせいもあります。

しかし近世に入つて、他の藝能がどしどし獨立の職業化して行く時代になつても、詩は一向職業化されずに残つてゐた。これは詩といふものが、本當に誰れにも出來易いものであつた事と、一向金にならず、特別の巧い人の詩でもとても生活を立てる程にはならなかつた爲めでありませう。尤もそれだけに詩はいつまでも商品化されず、長く純粹さを保つて來たのですけれど、しかし本當に詩だけに全身を打ち込んで、専門にやる事は難かしく、そう云ふ人はいつまでも出て來ませんでした。

それで遂に近世まで詩は仕事ではなく多くは餘技であり、財産に餘裕ある人とか、他の仕事で生活してゐる人が餘技としてやるのが多く、この状

しかし笛の音はない  
夜の事

日夏耿之介

今宵、月のひかりは

銀色の細息を吐き乍ら

木の芽木の芽をそつと擲でて聳る

温情の心々に満ち満ちたる

しかし笛の音はない夜の事

夜風も淫りがましい五月の晩

病後の身は

新鮮な萬物に手を取つて迎へられ

るまゝ

天上の月影にも

狂ほしく甘え心地で

魚のやうに泳ぎまわり

この邸の透垣を窺いたのだが……

柔な芝生の青草のなかふかく

夜露にそつと泪ぐんだその片隅に

體を伏し

態は明治の新體詩時代までも續いてゐました。

明治に入つて、一般の富の力が大きくなり、他に職業を持たなくても親譲りの資産で暮して行ける人が増加して來、一方では一般の文化が高くなり、詩だの藝術だのの研究を仕事にする事が、昔ほど擯斥されなくなり、追々と詩だけを専門に研究する者が増えて來ました。殊に生活の負擔も軽く、父兄の援助も受け易い、若い人々の間には、次第に、詩を専門の仕事とし、これを専心に研究する人が多くなつて來た。それに印刷術の進歩や、文化の普及に連れて、一般文學の需要も増加し、たとへば詩そのものは大した金にはならなくても、それと似た姉妹藝術により、或は歌謡童謡等の「應用詩」により、生活を支へ、殆んど全力を詩の研究に注ぐ事も出来るやうになつて、茲に兎もかく、詩で生活はしてゐないが、「詩を専門の仕事にする人々」が出來て來ました。

結び耐へ兼ね

さめざめと

小娘は悲しみ泣けども

まばらなる叢木林の奥手なる

黒壁に古ぼけた洋館造の一間にて

その父親らしい老人は七十才に年

老ひ乍ら

いまだ大冊の古書と試験管とコム

パスと

古めかしい鷹甲の鼻眼鏡とを手離

さめ

慣習の世態かな!

また私はそつてなく睡を返し

冷たい顔で黙々と睡をすえつゝ

己が夢寐の古城たる窮理室の灯の

下で

不可思議の觀念のみどり色のもや

の真中に没入せむと歸路を掃る

温情の泪のかけに満ち満ちたる

しかし笛の音はない夜の事



### 二、特殊専門家の出現

かうして兎に角、「詩の専門家」は出た。しかしこの専門家と云ふのは、他の場合とは違ふ。他の場合「専門家」と云ふと大抵、そればかりやつてゐる以外、それで生活して行く。そのためには自分だけのためにやつて居ては生活して行けないので、専門と云へば必ず「人のために」に仕事をする事になります。自分の着る着物を幾ら澤山持つてゐても、専門の呉服屋とは云はれません。人のための着物を作つたり持つたりして、始めて専門の仕事となるのですが、詩の「専門家」はそれらとは非常に違つてゐる。つまり専門とはいへ職業になつて居らず、人のための生産でなかつた。

その上この時代が個人主義藝術観全盛の時代で、藝術は個の完全表現であり、自我に徹するためには他人や社會と離れる程、純粹になり精進出来るといふ考へ方から、詩の専門家達は愈々、他の場合の専門家と違つて、

### 工場を謳ふ

昭和十八年三月、海軍艦隊本部の委嘱を受け、現代の名流七詩人選船の實況を見んために來航す。此の日終日、猛雨の中を鋭しく各現場を巡覽して後、各詩人夫々所見を語り東京新聞紙上に發表す。左の七篇はその時の作品。

### 産業戦士に捧ぐる歌

大海征きて戦ふが、つげものなれば  
 その船を漕りなす御身らも、つは  
 ものぞ、げに  
 身を刺み、汗流し、心砕きつ  
 遅しき一握りの金槌もて  
 度しき一握みの孔錐もて  
 巧みなる一打ちの斬金もて  
 よく國を背負ひ隠く御身こそは

他人、社會、生活から切り離された一種特別の「専門家」、他の事をせず専心に研究してゐると云ふだけの「専門家」として出現したのです。

しかし兎に角、今まで無かつた、全力を打ち込む専門家が出現したので、詩は次第に是等の人の手に移り、今までにない盛大さを呈して、今まで見た事のないほど澤山の詩が書かれ、評論が戦はされ、研究が行はれて、今までにない隆盛と、今までにない深さと、そしてやがて今までに現はれた事のない種々な特殊な傾向とが、出て来るやうになりました。そして日本に始めて盛大な「詩壇」といふものが出来上つたわけです。

明治十五年外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎等の學者が始めて西洋の譯詩と、それに習つた自分等の試作を集めた「新體詩鈔」を出して以來、湯淺半月、落合直文、大和田建樹、北村透谷、島崎藤村、土井晚翠、薄田泣菫、與謝野鐵幹、岩野泡鳴、蒲原有明、上田敏其の他多數の先驅者の時代を通じて、明治四十年川路柳虹が口語詩運動の口火を切つて以來、詩壇は急に盛大になつて、面目を一新するやうになりました。

雲、嵐の日にも、心には青空  
 幾千人のおのがじし持場にありて  
 おのがじし樂なすを樂しみはげみ  
 襪り叩き響あて或は研くもの  
 野を引き、器型こめ或は曳くもの  
 鎗轟、冥府かとも火を吐く所  
 浪巻ける火の波を汲みて搦ます  
 ひた走る火の瀾を捕へあやつり  
 敲く、打つ、その響  
 廻る音、軋ひ音、唸るベルトの  
 呻き落ち、喚び上げ、吼ゆる機械  
 の

おどろなる轟きに耳は聳ひ  
 響けただれ、油しみ、黴める服や  
 その顔  
 かがなべて働く者のいと高き美し  
 さ、そこにこそあれ  
 御身等の姿にぞ神々の御あかしは  
 あれ  
 げに灰濁める眼はも  
 戦場に於て、嗚きかな、神の御座  
 青じろき電弧の光り眼を刺す所



そして明治の末年から大正へかけては、詩壇は未曾有の盛大な黄金時代を現出しました。しかし大正末年には早くも、この「専門家の詩壇」からは健康性が薄れ始め、分裂や崩壊が相次いで起り、段々と病状を呈し、行詰りの兆候を見せ始めました。

これは如何なる藝術でも、社會や生産から離れば必ず、健康性を失ふもので、決してこの時の詩壇だけの特別な現象では無いのです。

日本の新しい詩壇は外山、井上、矢田部の三博士の著による發生當初から、歐米詩壇の影響を受けて生れたもので、その後育つて來る時も、多分にその影響を蒙つたが、此の時代に入つてからは、歐米思想の影響は最も甚しく、生活的生産的な健康を失ひつつあつたのみか、日本人としての國民的健康も、非常に薄れつつあつたのです。

言葉などは詩壇が最も純正さを保つべきであるのに、この當時の詩壇の専門家は、作詩に於いても評論の文章に於いても、用語も文體も詩風も混亂蕪雜を極めたもので、日本語の純正さなどは影も残さず、拙い直譯文

はた埃煤によこれて小晴き所  
日の本の塵國の神々ませり  
そこもとに飛び散らふかの火花こ  
そ  
たまきはる御身等の鋭き命なれ  
一つ打ち二つ打つその鉄に魂こめ  
て

五十萬打ち終へし鉄のかしこさ、  
海の腰り

あかがねの遅ましき、その腕のは  
たらきにこそ

はた妙にはがねなす鋭き鉄にこそ

足らはぬを足らしめ、しろがねを  
こがねになす、秘はぞひそめ

そはまこと御身等の赤き鐵ぞ  
熱もてダイナモの力強め

心なき機械にも息吹きをそそぎ  
國の基くろがねのもとをなすも

の  
ああ劍は既に取らね、誇ある戰士  
よ、これぞ

や生硬な外國語脈が横行し、詩の傾向も直譯的な外國詩風を不消化で其の儘入れ、遂には超現實主義だの形態主義等の病的な方向を競ひ求め、評論の方でも全く定見を失つて「新散文詩論」が出るかと思ふと、「新韻律論」が出たりして、ただ奇矯のみを極め、一方では遂に詩が藝術運動を脱落して社會運動化するものも出來、非常なる混亂裡に、昭和年代に入つて行きました。

そしてこの頃は、詩は全く、素人を離れて、如何にも「専門家の詩」となり、素人には到底解らぬ特殊な境地を作つて、社會から遊離して特異な、不健全な病的な状態に陥ちて行きました。

本來詩精神はすべての人にあり、すべての人は詩を作る事が出來、詩人たり得る筈であるのに、その頃詩は全く、國民一般の手から離れて、専門家だけのものになり、一般の人々の中に、詩は全然、無くなつて了ひました。

御身等が作りなす物の一つは  
御身等が敵を打つ一つの彈ぞ  
御身等よ、いやさらに魂のハンマ  
ーを振れ  
ものふの鋭抜く氣をこめて、孔  
を打ち抜け

御身等のいと重き鎧の響きは  
北の方アリューション、ツンドラ  
の水を砕き

南はソロモンの、小島なる波にこ  
だます  
しかもげに、下積みにはた離れ榮  
えなき如く

しかもげに聖殿を勝ち抜かしむる  
御身等の腕にこそは

皇國のいと高き  
榮えを御け

造船の日本  
尾崎 喜八

理不盡な五五二を押し付けられては  
わが造船技術家腰骨の苦心は

鈍日本式小粒の薬物



### 三、戦争の影響

かうして詩壇が混乱の極に落ちてゐた頃、突然滿洲事變が起つたので、そしてそれに引續いて幾多の社會的な動搖を次々と重ねつつ、時局は段々と深刻になり、遂に日支事變の發生を見、更に大東亞戦争にまで展開して來たのです。

この晴天の霹靂とも九天直下とも云ふべき大變動の前には、今まで國內に充滿し、どうなつて行くか見當も着かぬやうに思はれた一切の行詰りも混乱も沈滞も、忽ちの間に、すべて霧の如くに一掃して了ひ、日本人性を昏迷の中に麻痺させて居たすべてのものを吹き拂つて、全國民に完全に國家意識を取り戻させ、忽ち古來連綿たる日本人精神に立ち歸らせたのであります。

殊に米英に對する宣戰の御大詔は、一億國民に斷乎たる決意を堅めさせ

珠玉のやうな「夕張」を作つた世界の驚異、地敵の體験「加古」妙高らの特鋭を生んだ艦俣をゆるさぬ創造力こそ由來日本造船術の面目なのだいま國の興廢を決する船戸際に海上輸送力の斷然確保は對等の急務

されば國內至る所に夜を續いて造船のドリルは唸りハンマーは轟く  
しほ風蕩る春の眞晝を  
煌々と輝ぶ塔燈の電弧  
艘トンの鋼板を高々と吊上げて  
風空をよぎる大起重機  
剪断機は押切り  
水壓機は衝き固め  
十五キロの鐵錘憤然と頭上におどつて山形の鋼材を打ち極める  
あゝ自存自榮の出師の名  
大東亞艦隊は不動の國是  
さらば無敵の船を造り船を造つて  
洋の東西南北を

全國民は堅き國民的自覺に立つて、最後の勝利まで戦ひ抜く決心をきめたのです。そして海に陸に、史上未曾有の廣大なる戦線全域に互り、勇敢なる皇軍將兵の赫々たる戦果が、次々と相次いで報ぜられて、國民の血をいやが上に躍らせてゐるのです。

かうした壯大なる時局の前には、勿論詩壇の病狀などは、風の前の木の葉でしか無く、積年一切の病弊は忽ち全部吹き清められる事が出来ました。詩壇がすつかり面目を一新して、新しく日本的な姿に立ち歸つたのは云ふまでもありません。

### 四、愛國詩の出現

既に滿洲事變勃發以後、専門詩壇にはぼつぼつと、今まで遂に見た事のない、強烈な國民意識に燃えて愛國的熱情を歌つた詩が現はれ始めたが、時局が進み國民の自覺が増すに連れて、愛國的詩歌は次第にその數を増

#### 造船戦士を讀ぶ

三好 達治

歴史は一の運行にして  
船舳これを載せ、船舳これを傳ふ  
今日鐵塊を打ち、鐵板を載つて、  
船舳を運送する者  
即ち兄弟は兄弟の双手中て、國民  
の意志を押し切り、祖國の正義  
を、遙かに萬里の外に布く者  
まことに手づから、今日の歴史を  
設計し運送し推進する者  
兄弟ここに終日、陸艇の聲耳を聳  
する間にあり  
鋼鐵鑄け煉し、爐火赤く輝れ、煤  
煙暗く渦巻く間にあり  
起重機軌り、裁断機噴び、重層機  
、喘ぎ息づき  
地軸もためにおののきやまざる間  
にあり



し、遂に日支事變以後になると、詩壇は昔日の昏迷混濁時代とは見違へるやうに變つて來、大東亞戦争に入つてからは、殆んど愛國詩一色の觀があり、實に昔日を知る者をして、轉た今昔の感に堪えざらしめる程で、誠に今次戦争の意義の重大さ、わが國民性の尊貴さに對して、襟を正さずには居られないものがあります。

愛國詩は實に、現代に生活してゐる専門詩人達の心の奥に潜んでゐた、眞の日本人意識の燃え上つた火でありました。悪夢の如き過去の詩風的一切を焼き拂つて、多數の専門詩人達が皇國の重大時局に處し、一億國民に示し、君國に捧げ、同時に自分等の將來歩むべき道を照らす、民族的の炬火であります。

げに兄弟等は茲に、國民の習俗と意志と奮激との調子の、そそぎ集れる頂點にあり  
或は半天の吹響に曝され  
或は船底の陰翳に耐へ  
不慮を冒し  
險を踏み  
緊張し  
集注し  
或は龜手し寒慄し  
或は汗淋漓として  
感力を動まし  
筋力を逞し  
敏密と敏捷と  
手練と巧妙と  
堅忍と持續と  
我我と協同と  
工人の一切の熟練手腕技能層層を  
取り集めて  
しかして更に快活に  
ふすぶり黒みたる眉目をもて、哄  
笑しつゝ、  
幽華美しきかの船舶を、日に月に

### 五、國民詩運動

かうした時に當り一方では、この非常時に臨む一億國民が國家に奉じ、重大時局に處するための國民組織として出來上つた大政翼賛會を始め、幾多の官民陸海軍等の各指導者階級が、この大規模な歴史的決戦に勝ち貫くため、全力を盡して國民の生活形式の改善強化を計り、物心あらゆる方面の施設を、急速に新設改善した多數の施設の中に、詩に關する二つの重大な施策がありました。

それは前述の専門詩人間の健康になつた「愛國詩」を取り上げ、愛國詩による國民の士氣の鼓舞と、今一つは戦へるわが民族の精神的糧として健全な詩の唱道、即ち「國民詩普及の運動」であります。

一方、新聞雑誌書籍小冊子ラヂオ演壇舞臺等の凡ゆる物を通じて、多年詩魂を訓練琢磨して來た多數の専門詩壇の大家達に、折ある毎にその靈筆

蒼天の下に、輝耀する者  
今日鋼鐵を打つて、船舶を建造する者、即ち兄弟等は選まれて  
手づから今日の歴史を創造する者  
祖國の正義と文化とを、遠く萬里の外に布かんとする者  
思へ

大東亞聖理想國の空  
うらうらと今我等の頭上に明け散れゆく黎明を  
かの長夜の悪夢既に跡なく  
昧爽の百の理想油然としてここに  
棚ひき動かんとするを  
げに既にして天に不偏の旗なく、  
地に溟海の未賦なし

#### 造船工人の歌

佐藤 春夫

我等男の子、星國の子  
わが大君の御船造り  
星を戴いて我等つどひ  
紀重殿に懸る鐘月を見返りて隔る



に成る名玉のやうな詩篇を草させて、それを全國民に贈つて士氣を鼓舞し、銃後戦線に精勵奮闘させるのであります。

一方、國民詩運動は、生産増強に、物資節約に日夜身心を捧げて銃後を守る全國民への慰安とし、厚生として、温雅なる休養、清新なる元氣を與へる糧として、「詩」を推賞し、「詩」を味ひ、「詩」に親しみ、「詩」を作る事を奨励したのであります。

既に長年、詩を失ひ歌を奪はれてゐた一般國民、農村に食糧を作る者、工場に兵器を鍛へる者、其の他すべての銃後國民の上に、茲に再び「詩」が齎らされ返されたのであります。

専門詩人達の才筆に成る「愛國詩」、一般國民に齎らされた「國民詩」、この二つは實に、今次戦争が國民に與へた、最も感激すべき贈物と云はねばなりません。

### 六、今の専門詩人

茲に於いて、在來の「専門詩人」もすつかり面目を新たにしました。嘗つて専門詩人と云はれるには、飢餓に迫られても超然と自己のみを押すのが精進であり、人に離れ世に拘らず、自分だけの詩を作る程、詩に専心する立派な「専門家」とされたのであります。

しかし今や新しき「専門家」は、自分のためでなく、國家のための詩を作る事になり、それを本務とするやうになりました。かうなればそれは、自分だけの仕事ではなく、國家から見、國民から見、立派な本務といふ事が出来ます。それは他の職能と同じやうに、人のため國のために役に立つ本務です。かくて遂に、長い間異例であつた詩にも、遂に名實共に完全な専門家が出来る事になつたのです。

我等が打紙は機銃とひびき  
鎗聲の火は照空燦なして  
日ねもす夜すがらなとか休まじ  
わが心、わが腕、わが腕  
我等、（註）軍の子、血は流さねと  
スバナは熱し、脂汗にじみ  
ハンマアの船漕りは  
未だ浮ばざる船に怒濤す  
腰腕を切り、腰を纏ち穿ち  
キカイの火床のうすら明りに  
幽鬼の如く我等は働けど  
心は明く、深く、直し  
眞心を眞實に加へ組み  
われら大君の御船造り  
浮べる城や走る倉庫や  
「枯野」「飛鳥」もわれらぞ畏る  
みいくさ人醜の船十を死ぬ  
我等わが船の百を造らむ  
かくそ我等必勝の耶を取ふ  
（註）枯草、はや鳥は配紀に見え  
し古代勇船の名

### 船造りのうた

百田 宗治

こは神の船なり  
わが手に打ち、わが手に煮がき、  
わが足にかけて作るも  
こは神の船なり。  
——墨の江の神、腰り給ふ。  
こは神の船なり。  
現圖引き、ポンチ打ち、  
台切りに掛けて作るも  
こは神の船なり。  
——墨の江の神、みそなはせ給ふ  
こは神の船なり  
大火床赤くし、地火床しつらへ  
綱まけて作るも  
こは神の船なり  
——墨の江の神、まもり給ふ  
こは神の船なり。  
燐かし、燐ぎ、スバナ振り



七、勤勞青年の本務

所で諸君、諸君の本務は何だろう？ それは云ふまでもなく生産です。所が、銃後に生産位大事なものはない。これは第一線に戦ふ將兵に次いで、戦争に於いて最も大切なものです。諸君はそれを本務とし、それによつて國家に繋がりを持つてゐるのです。

これは實に偉大な仕事です。諸君の本務は、他のどの道を取るより、一番御國の役に立つ事の出来る仕事なのです。

これを考へる時、諸君の詩は如何なる方向を取るべきか、その行き方は自ら明かになつて来るのです。それは諸君の詩がどんなものである事より、諸君の本務たる生産の増強に少しでも餘計に役に立つものである事が、結局一番御國のためになるのです。

専門詩人は、詩が本務であり、之に依つて國家に繋がつて居り、之によ

紙もて打ち固むるも

こは神の船なり

— 風の江の神、みそなはせ給ふ

こは神の船なり。

すめらぎ、袂べさせ給ふ

あきつ國、まもる船なり

— 八百萬の神々、ことほぎ給ふ

さかんなるかな造船

高村光太郎

鐵は生きてゐる

鐵は生きて人間に答へる

鐵は人間の氣魄を喜ぶ

鐵を御し得るものは、鐵の如き心である

鐵を左右し得るものは、鐵の如き心である

鐵を切り崩し鋭ち削りわがわが

忽ち幾千噸の船を建造するもの

かかる鐵の如き意志の人々、晝夜

を分たす

力をつくし今御國のため

つて國家に御奉公するのが義務であるが、諸君に於いては、詩は本務ではない。諸君の本務は生産であり、生産こそ諸君に課せられた義務である。茲に、専門詩人と諸君との間の本務の違ひがある。そして詩は専門詩人の場合と違ひ、諸君に課せられた義務ではない。そこに諸君の詩と専門家の詩の違ひがある。

諸君に取つて最も大切な事は、本務たる生産力を増強する事だ。これが他のどの道より一番大切な事である。だから詩がもしそれに役立つ事が出来れば、それは諸君にとつて、他のどの道より一番正しい方向と云ふ事が出来る。茲に諸君の詩の特質があり、時局下最も大切な生産を本務とする諸君の特質がある。諸君の詩は「厚生」の詩として諸君の人間性を厚くし、日本人としての國民性を深め、精神の糧となり、銃後の生産に立ち向ふ諸君に強い元氣を、高い氣魄を與へるものであり、諸君の生産力を増強するものであつたなら、それは直接國家に奉仕する専門詩人の愛國詩に優るとも劣らぬ立派な役目を果たす詩と云ふ事が出来る。詩としてそれは

炎と轟音と油と帶帶機械に挑む

人は鋼板にケガキする

人は魁大な機械場に部署を守つて

押切る、打ち抜く、孔を穿つ、は

つる

十五キロのハムマーを揮つて曲げ

る

瓦斯切断機の青い危険な火花

幾千百の火床の白熱

巨人のやうなだんまりの水際機

轉物、製鐵、鍛冶、研磨

そうしてここには無數のベルト

旋盤、マイリング、機切り、ター

レット

人はバスでミリの又ミリを争ふ

一切のかくれた勞務に合力されて

見よ、大空の下、天の鳥船は形つ

くらは

生きた鐵の伸縮を制して船の中心

は測られ

幾十萬のリベットはカシメられ

あらゆる人智と人工の有機體

鐵の一大交響樂篇は成る



直接國家に捧げられたものでなくても、間接には、専門家の愛國詩に優る御奉公をするものです。

諸君が詩に於いて、専門家の如く直接國家の御役に立たうと云ふ事は容易の事ではない。しかし諸君にとつて、生産に於いて御奉公する事は易しく、その生産力増強に詩を役立てて間接に國家に奉ずるこそ、諸君の詩の正しい道と云はねばならぬ。茲に於いて諸君の詩が、専門家の詩と違ひ、専ら「厚生之道」をとるべき理由があり、それが他のどの方向を取るより、諸君の詩にとつて正しい進み方だといふ理由がある。

### 八、人間性を高める詩

では如何にすれば詩は一番厚生、の實を擧げる事が出来るか。幸にしてこれは極めて易しい事だ。何故なれば詩は、既に選ばれて「國民詩運動」として唱道された通り、どうしなくても、夫れ自身最もよき厚生の方法であ

さかんなるかな、造船  
力あるかな、船を生む人々  
鐵の如き意志をもて鐵をして寄へ  
しむる  
この人々は輝しいかな

#### 巨船生誕

西條 八十

聳天の造船工場  
動く天鼓てり、速る機々  
いま我等オーバーの機立てて  
軒氷雨の中を踏み廻るとき  
ここに存るは轟音と猛火と  
大蛇のごとく腕うち腰材と  
群舞の力の美しき亂舞！  
逞しきベルトは宙に咆哮し  
電氣熔接機は冥府の如き蒼白の光  
を放射し  
怪獸に似たる剪断機は黙々  
山なす鋼材を船の如くに押切る  
見よ  
散風するもの、重疊するもの  
いまだ形なきもの、僅に形を爲す

るからです。

詩を、楽しく作り、明るく親しめば、自然に最もよき厚生効果が上つて來るのであります。

ただ注意すべきは、諸君の詩は、自己を養ふ所に意義がある。作る事により親しむ事により讀む事によつて、諸君自身を作る所に、諸君の詩の意義があり、厚生の意味がある。この點また専門家の詩と本質的に違ふ。専門家の詩は國家に捧げ國民に讀まらるべき詩だ。國民が讀んで感奮し、その詩が新しき元氣を振ひ立たす効果を持つ所に意義がある。換言すれば、専門家の詩は「人に讀まれる」所に意義があり、諸君の詩は自ら作る時に意義がある。そこで専門家の詩に大切な事は、巧い事上手な事であり効果的な事であるが、諸君の詩に、それは必ずしも必要でない代りに、作る時の態度が正しく立派であり神聖でなければならぬ。諸君の詩に必要なものは、巧さや効果ではなく、作る時の精進である。何となれば、それによつて作る人の資性が高められ、稟質が上げられるからである。

もの

悉くいま生れ出でたる龍骨なり、  
汽船なり、煙突なり、舳櫓なり  
動く、動く、  
すべての物、必死の力もて動く

燃え上る巨大なる熔鑪爐のほとり  
に立ち

ここに蕩沸する灼熱の鐵汁の如く  
正に高潮せるこの工場精神を歎美  
するとき

ゲートル穿きの精悍なる造船部長  
は我身に響く

「急ぐのです。とにかく船が要る  
のです。もう煙突など四角でも  
三角でも構はぬのです。」

朝風くから深夜までの、この緊張  
張振りを見て下さい

半裸の少年旋盤工の肩より  
如月、湯氣の如く濺々立ちのぼる  
熱汗

撥刺たる若人の諸聲もて振り上げ



ここに専門家の詩と諸君の詩の違ひがある。だから諸君には詩を作る態度の神嚴が絶対に必要だ。作り方の眞剣さ、作る時の眞面目さ、それが自己を鍛え高めるものであつて、最もよき厚生の効果を生むものです。それだけに、上手下手の問題や、取題や詩風や、出来上りの効果に關しては、諸君達の詩は遙かに自由です。専門家はそこに課せられた國家的義務があるが、諸君はその點、非常に樂であり自由であります。

諸君は必ずしも巧い詩を作らなくてもよいし、諸君の詩は、人に讀まれる時の効果に心を勞さなくてもよい。諸君はただ、作る事によつて自己を高めればそれでよいのです。

諸君は何を歌つてもよい。それを作る事によつて資性を高め、人格を磨く事が出来るなら。諸君は自分の感激にまかせて、自由な題材を取つてよい。勇壯なもの、優雅なもの、悲壯なもの、物靜かなもの、喜び、悲しみ、苦しみ、怒り、何でもよい。清らかな月が歌ひたかつたら月、美しい雪が歌ひたかつたら雪、五月の太陽と青葉の新鮮さ、落日の街の靜けさ、遠く

### 九、戦争の感激と勤勞の感激

諸君は連日海に陸に、諸君の心を打たすには置かぬ幾多の戦の、次々に報ぜられるのを耳にしてゐる。諸君の親、兄弟、友達が血を流し命を捨てて戦線に戦つてゐるのを知つてゐる。そして一億の日本人が一人残らず、火と燃えて一心に守つてゐる銃後を見てゐる。諸君の若く純情な詩精神が、この感激的な時代を歌はずに居られる筈がない。諸君の血は戦争のため湧き立ち、愛國の情に燃えてゐるに相違ない。この世紀は必ず諸君の

る艦船のもと  
銀の三日月のごと美しき弧に銀は  
れゆく艦隊  
涙ぐましくも朝もしき艦隊は  
窓外の海波の如く、豊かに我胸に  
溢れ来る

氷雨すさぶドックには  
鏡工間近き巨船  
誰ぞ、この寒風を物ともせず  
見逃かす數十丈の高き足場の上に  
蟻の如く群りて立ち働くは？  
舷に儘々と鉄打つ音の高らかさ力  
強さ！  
誰か知るは十ニ一〇の斷乎たる  
信念もて  
必勝に猛進する我が大和民族の  
この小氣味よき造船風景を！  
幻ならし、我が耳朶を醒して  
猛進する東京灣の海波の上、  
藤岡、神武御東征の日の  
久米の手擲の歌乃は  
いま朗々と鳴り響く

### 職場詩集

#### 午前の工場

##### 朝の工場

起重機 渡邊 良一

薄暗い鐵骨の屋根の下  
驟然と立ち並んだ幾つもの機械が  
いま靜かに眠つてゐる

モーター、旋盤、ボール盤、フラ  
イス盤、シカル盤  
寢息も立てず靜かに眠つてゐる  
ベルトは長々と垂れ下り  
圖面が氣味の悪いほど可い  
眠つてゐる工場……

磨かれた軸が黒光りを放ち  
機械油の甘たるい匂ひが  
隅内を漂ふ



情熱的な心に次々と無限な感激を展開し、詩精神を刺戟するに相違ない。かうした時、諸君の中からも必ず「愛國詩」が生れて来るに違ひない。専門家の「愛國詩」は、それらの大家たちの神聖なる義務であり職域奉公である。しかし諸君の「愛國詩」は義務でもなく、本務でもない。云はずには居られぬ諸君の眞實の聲として生れ出た「愛國詩」である。専門家のそれと、諸君の夫れとは、技術も違ひ本質も違ふが、この中に燃える眞情は更に強く、更に純眞なものでなければならぬ。

これと同じ事が、諸君の職場にも見出される。

諸君が毎日の殆んど全部を暮す職場、そこには諸君の最大の使命を持つ生産が圖はれ、最高の情熱を捧げる仕事が行はれてゐる。親しき友達が居り、尊敬する先輩や長上が居り、親しき機械があり、茲に諸君の最大の喜びや苦しみや悲しみや歎きや感激がある。

以前、労働をただ生活の資を得るものと考へてゐた頃は、「生活さへ出

來たらこんな労働はしない」と思ひ、「仕事は苦しいもの嫌なものだ」と考へ、そして賃金は「この苦痛を忍ぶ代償として貰ふものだ」と感じてゐた。

だが、かういふ考へが間違ひであつた事は、今こそ諸君にはつきり解つたに相違ない。戦争がそれをみんなに教へて呉れたのです。

戦争は國民のすべてに、國家といふものをしつかり考へさせました。今まで多くの人の間違つてゐた根本は、何事につけても、國家といふ事を忘れてゐた所にある。だからたつた一つ「國家」といふ事にさへ氣がつけば、考へはすつかり變つて来る。職場の仕事も、國家性といふ事に氣がつけば、今迄発見する事の出来なかつた重大な價値に氣が付き、今まで知らなかつた新しい感激を発見する事が出来、今迄思つてゐたとは、すつかり違つたものとして諸君の目に映つて來ます。

「我等は金のためではない、御國のために働いてゐるのだ。この仕事は國家の仕事だ。この仕事の御陰で我々は御國の役に立つ事が出来るのだ。」

聊かな露骨の屋根の下

眠つてゐる！

顔てが眠つてゐる！

その明けさの中に……

やがて天井をはわ飛ばし

鐵板を裂き

コンクリートの大地を露擧させる

底知れぬ鋭氣が

じつと滲んでゐる……

嵐の前のあの明けさ

眠つてゐる！

響べての物が眠つてゐる！

七時三十分

検査 白石 政次

始業の鐘

露は冷く光り

手先は指まで凍つてゐる

だがもう露凝してはゐられない

さらつと白い塵が

天井から落ちて

ベルトが動き出す

取り壊されたストロープが

一人瞬々しい焔をかしげて居る

露は冷たく手は凍つてゐる

だが思ひ切つて鐵材に手を掛ける

眉毛がびりつと吊り上るのを感じ

乍ら

腰まで持ち上げる

全身の血がむら／＼と湧

もう平氣だ！

動き出す工場！

始業

紀原機 渡邊 良一

七時三〇分の時報が鳴つた

機械が眼を醒す

ぐ／＼と凄まじい音を上げ



日本國中、一人も遊んでゐる者のない今日、一番大事な銃後の生産に従事してゐる我々は、金を貰ふから辛らさを耐へて働いてゐるのではない。歴史的な大仕事を果してゐる日本人の一人としての、偉大なる義務を果すために、自分の心から進んで、喜んで働いてゐるのだ。賃金はその忠良な國民に國家が與へる生活保證の一部なのです。

これに気がつけば諸君には、新しい感激と新しい喜びが湧く筈だ。仕事も職場も、昔の人が見たとは違つた希望と感謝で輝く筈だ。諸君の先輩に諸君の友人に、諸君の機械に、諸君の仕事に職場に、新しい感激が充ち、新しい光が輝いてゐる筈だ。ここで諸君の詩精神の動かない筈はない。生産は諸君に取つて、國民的意義であり、勤勞は諸君にとつて、人生の價値である。

職場に働いて居ればこそ、諸君はガダルカナルに、ソロモンに、アッツ島に於いて、身命を賭して闘ひ、そして玉碎した勇士にも恥かしくない、立派な御奉公が出来たのだ。この感激から、諸君の素晴らしい詩の生れな

モーターが撥ね起き  
ベルトが走り出す  
段車の上を全速力で

沈んでゐた構内の空気が暴れ出す  
滑んでゐた構内の塵芥が飛び上る  
じつと押へてゐた脚輪がすつ飛ぶ

廻る、廻る、廻る  
いくつもの機械が  
夫れ夫れ廻つた唸り聲を上げ  
鋼骨の天井が  
轟々と反響する  
廻る、廻る、廻る  
機械が、機械が

始末！

廻れ 旋盤

起重機 渡邊 良一

廻れブラット！  
大氣を震はして  
廻れブラット！

い筈はない。これこそ、今までのどの専門詩人も感じた事のない新しい感激であり、今までのどの専門詩人も生んだ事のない新しい、諸君のみの詩ではないか！

この詩の世界のみは諸君だけに許された世界である。何人と雖も犯す事の出来ぬ、諸君たち勤勞青年だけの獨壇上だ。ここから諸君の最上の詩が生れて來ない筈はない。諸君から、勤勞を歌ひ、生産を謳歌した、素晴らしい「職場詩」が生れて來ない筈がない。

十、愛國詩と職場詩

私は本書に於いて今まで、如何にすればよい詩が出来るか、出来るだけ具體的な説明をして來たつもりです。諸君は最早や一通り詩の作り方は知つてゐる。私はこれ以上諸君に、更に如何にして「愛國詩」を作るか「職場詩」を作るかを説明しない。一通り一般的な詩の作り方を理解すれば、

眞黒な頑固な俺の手が  
スマートなハンドルを握るとき  
見て呉れ、バイトの切れ膝を

軟弱な木材ではない  
鈍重な鉛ではない  
鋼盤だ！  
叩けばカーント響く  
俊敏な鋼線が削つてゐるのだ

センターよ、繋げるな  
カウンターよ、繋げるな

懸線となつてさらさら落ちる切粉  
塵を吐き油を撥返して落ちる切粉

走れベルトよ！  
新魂の續く限り走れベルトよ！

カラカラと回轉するバックギヤよ  
バイトよ、送りよ、スピンドルよ  
お前らは俺の命だ！



夫れ以上「愛國詩」と「職場詩」の場合、私が何を教へ足す必要もなく、諸君の國民的自覺と感激とが、充分にそれを諸君に教へて呉れるから……諸君の「愛國詩」と「職場詩」は、諸君が自分の仕事の國家的意義を解し、自覺する所からのみ生れて来る。本書が幾度も述べてゐる通り、眞の詩は、眞實の感激のみから生れて来る。諸君が本當に自己の國家的意義を理解し自覺してゐるのでなかつたら、どんなに澤山の作詩上の技術が與へられたとしても、決して立派な「愛國詩」も「職場詩」も生れて来る事は出来ない。

それは諸君の國家を愛し、自己の價値を理解する所からのみ生れて来る。この戦ふ國家に生れ、この輝く時代に生き、「愛國詩」を作り、「職場詩」を作る事は、詩をやる諸君に與へられた最大の特權であり、最大の光榮であります。

油に染みた作業服を肩た俺の生命

粗材を取り寄せ  
ブラットを離動させるのも  
お前、送りよ、有難う！  
正確にネジを切れるのも  
お前、親ネジよ、有難う！

走れ、弛まず走れ  
水の流れの如く走れ  
廻れ、弛まず廻れ  
地軸の覆るまで廻れ

センターよ、焼けるな  
カウンターよ、焼けるな  
廻れ廻れ、俺の旋回！

働く人の影  
起、仕上 程塚 力男

いろどりは溢れ  
黒と藍色の空気が影が映る  
白色に輝く光の矢は  
その中に打ち込まれ

### 第十章 定型詩

#### 一、古來の詩型

外國の詩は字數以外に平仄（音の抑揚）、音韻（字音の響）其の他の規則があつて非常に複雑だけれど、日本の詩の規則は古來、字數だけで、その字數の單位を五音七音にするだけでなく、それを基礎として一定の形に組合せる事になつてゐました。この基本單位が五音か七音であると云ふ規則も大體、「萬葉集」の出來た奈良朝時分までに出來上りましたが、それを組合せる定型も、その頃までに次の四種類が出來上つてゐます。

片歌 五七—  
短歌 五七、五七—  
七 (十九字)  
七 (卅一字)

えいえいと西に向ふ  
そのとき人間の影の稀に持った美しさ

お、働らく人間の影は  
新しい美の焰となつて燃える陰鬱な足音の中に  
鈍い灰色の音響の中に  
歯ざしりする男性の情熱  
美しく、激しく  
碎かれたコンクリートの上に

憩ひ  
紀重機 石川 清澄

固く結ばれた糸目はほぐれ  
こはばつた神懸は崩れる  
溫和な芝生は息つき  
舞臺の扉に  
タバコの煙は開き  
空間に美しき曲線を描く  
白雲は動かぬ油の縁に落ち  
ゆるやかに流れて行く  
鋭く……強く……  
輝の聲は伸び



長歌 五七、——、——……七 (不定)  
旋頭歌 (片歌を二度重ねる) (卅八字)

(この他「佛足石歌型」と云ふものあれど重大ならず)

そしてこの中、短歌は特に後世益々盛んになり、平安朝に入ると宮中貴紳の特に愛好する所となつて非常な發達を遂げました。詩形も萬葉までは五七、五七、七の形であり、「長歌の短い形」だつたのが、平安朝に至つて、いつしかこの構造が變じ、五七五、七七の上下二段切になりました。そして全く「國歌」となる基礎を築きましたが、一時は餘り貴族化した觀があり一般國民からは却つて遠ざかる傾向があつて、連歌や俳句の勃興を促したが、江戸時代の中頃から、勤皇思想の勃興に連れて、和歌の復古運動が起り、明治御親政と共に、再び國民一般に普及する事になり、新しき時代や國民に結び着いて、明治後半の新短歌運動となり、古今未曾有の明治大正の短歌隆盛時代を現出して、今日に至つてゐます。

晝の朝寂に焼け込む

工場の晝休

検査 白石 政次

工場の晝休み

鐵管の壁から出て来た四人の青年  
油やペンキだらけの作業服  
背の一番高い青年が

オーと手を上げる  
申し合せたやうに一所に坐る

一人が鐵板の上で踊り出す

ごつい手つきだが

調子もいい

顔色もいい

體格もいい

真ん氣らしい顔の

口の達者な一番小さい青年

ズボンが破れてゐる

帽子が曲つてゐる  
それで平氣である

俳句は、歌が平安朝時代に餘りに貴族化したため、新しく起つた武士の間に發生した連歌から生れて來たもので、一つの歌を上の句と下の句に分けて二人の人が問答型に應答した事から始まり、更に多數の人が、上の句、下の句、上の句、下の句と連続して歌つて行く法式が流行して、茲に「連歌」が成立したのです。この連歌の精神が、最初は和歌的なものであつたのが途中で變化して、俳諧的なもの、貴族的なものではなく、武士的で平易なものになり、「俳諧連歌」と呼ばれる事になりました。この一番始めの句、即ち「發句」だけを特別に苦心吟詠する所から、この「發句」五七五(十七文字)だけが獨立した藝術となつたのです。そして江戸時代には士農工商の間に非常に流行し、遂には餘り大衆化しすぎて、卑俗低級化した程ですが、明治に入り、諸制革新の新しき時代の光を受けて、新時代の精神を盛る最小の定型詩となり、名稱も昔の「發句」を「俳句」と改める事になつて、今に見るやうな、非常な隆盛に及んだのです。

青服の青年が

背の高い奴からかけられて

にこにこしてゐる

呑氣でいゝ

何の屈托もない

親しい仲間の晝休み

冬と思へぬ温さに溶けて

歌つたり、踊つたり、なだめたり  
冷かしたり

とぎれとぎれの歌聲が

調子はずれのまゝ

大氣の中へ消えて行く

やがて就業の時報のスピーカー

きりつと立あがつて

惜し氣もなくにつこりと笑つて夫

夫に別れて行く

あゝ四人とも

責任重き産業職士

晝

光

起重機 石川 清澄



二、短歌

この「短歌」及び「俳句」について、詩の立場から如何に考へるべきかを要點だけ簡単に述べて置きませう。

我國の詩の特色ともいふこの二つの小型定型詩は、諸外國にも一寸比類のないもので、前述の如くその歴史も古く、その研究は非常に専門的に、澤山行はれて居り、想像以上に進歩したものであります。

一體西洋人は、革新革新と云つて、物の形を變へて、變化させる中に進歩を形作らうとするが、東洋人は、進歩や完成をそう云ふ外形に求めず、與へられた一定の形は其の儘にして置いて、その中で鍊成を重ねて行く事によつて、今までよりもよりよき完成に達しよう、と努力する傾向を持つてゐます。短歌、俳句などが古來一定の形を持つて居ると云ふ事も、東洋的なこの精神の現はれたもので、「定型詩」は實に、東洋人獨特の美點の現

破れ硝子からこぼれ落ちる  
春の光り  
紫のけむりが  
白いけむりが  
青いけむりが  
思ひ詰めたやうに立ち置める  
一筋の光の中で  
働く人  
動く機械  
窓からそつと  
川蒸汽の音がする  
外にはうららかな  
春近い日が照つてゐる……  
戦ふ工場  
大振り  
紀重機 渡邊 良一  
知つてゐるか

はれたものと云ふ事が出来ます。

詩の方から見ても、かうした定型詩は、勿論その性質は、五七、五七、の字音にリズムの基礎を持つもので、新體詩と同じ「字數律」であります。しかもその五句七句の組合せ方も一定してゐるし、おまけに長さまで一方は五句三十一文字と決つてゐるし、他方は三句十七文字と決つてゐるの、一般詩が生命とする所の「リズム」は最早、形の上から殆んどきまつて了つて居て、手をつけたり、苦心したりする必要はないのです。

馴れない初心の中こそ、歌にしても俳句にしても指を折つて字數を數へる事があるかも知れぬが、そんな事は直ぐ馴れて了ひ、少しやれば直ぐ口調だけで、字數を間違ひなく合せる事が出来るやうになり、この小型詩のリズムの根元たる字數は、忽ち殆んど問題にならなくなります。

そして其の後餘す所は、すべてリズム以外の問題になります。リズム以外の事だけが問題になると云へば、それは殆んど、詩精神の問題とその他

ファイバーを當てて  
メカニカルブレイキの軸を  
四貫目の大ハンマーでぶち込む  
この音——  
が、つちりと大地を踏んで  
若く逞しく  
朝熱に燃えた赤銅巴の腕に  
四貫目の大ハンマーを  
目よりも高く振り上げ  
鋼軸も砕けよとぶち込む  
鋭めしい顔を見ろ  
躍動する全身の筋肉を見ろ  
お、生命ある人間像——  
はね返す大衝動に  
微動だにせず  
しつかりと鐵着を振つて  
ファイバーを當ててゐる少年工  
その紅潮した顔を見ろ  
その緊張した腕を見ろ  
力!



は、一般文學としての問題だけになります。詩の方で詩精神が問題になつたのは自由詩以後の最近の事だけれど、その點、歌や俳句では非常に早くから、これが究明されてゐました。歌の方では既に平安朝末期に「有玄體」と云ふ事が唱へられ、俳句の方では芭蕉の頃「正風のさびの精神」と云ふ事が唱へられてゐますが、これらはいづれも詩精神の探求であります。そして一般詩の場合だと、殆んど全力をリズム表現に集中するのに、定型詩にはそれが不要なため、一方ではそうした「詩精神の探求」をすると共に、他方では歌や俳句の場合には、一般文學的研究、藝術描寫の研究をすれば足る事になるのであります。

それで形が小さくて手軽なので、皆んなが簡単にやれる特色があり、且つこの小型詩の研究で、一般文學的研究も一通り出来るといふ特典があつて、國民詩として非常によく普及され、國民文化を高める上に非常に役立つて來ました。

打つ力  
押へる力  
打つ者と押へる者の  
びつたり合つた二つの力  
仕上工場に立つた逞ましい姿  
それは日本の若き工員の姿  
戦ふ日本の工場の変

霞み立つ鐵骨の大天井に  
轟叫びを立てて反響し  
轟々と焰をなし  
炎々と燃え上る  
全工場の工事の音

汗だ！  
意氣だ！  
闘志だ！  
聞け、逞ましいこの音  
聞け、勇ましい工場の大交響樂

三、五音・七音

五音七音

短歌や俳句の一番の問題は用語問題です。五音七音が確立したのは、日本言語に歐米は勿論、朝鮮支那の文化が影響して來る以前で、日本語が非常に純粹であつた時代です。それで純日本語の性格上五音七音制が確立したのですが、その後諸外國文化が入り特に漢字音の濁音半濁音やンの鼻聲だのキャッキョ等が拗音などが交ちつて來るし、戦國末に少々と明治以後に非常な歐米文化の影響があり、時代のテンボも早くなつて、舊來判然發音された母音が不鮮明になつた上に、語調が早くなつて、多少のアクセントも生じるやうになつて來たので、言葉、殊に日用語や口語は非常に變化して來、五音七音制では多少の無理が出るやうになりました。そこで現代語を如何にしてこの詩型に盛るか云ふ事は、この傳統的な定型詩が感じる一番大きい難問題です。

打て！  
打て！  
十回大振り  
打て！  
地球の底まで響く力  
逞ましい力  
逞ましいこの音——

工 人  
起、仕上 程家 力男  
鐵ヲ掛ケ  
鐵ヲ掛ケ  
更ニ鐵ヲ掛ケ  
鐵ヲ削ル

手ニ微シイ疼痛ヲ感シ  
衣ハ直立ニ裂ケテ  
刺キ出シタ肌が見エ  
環境ハ深所ニ入ルニ從ツテ  
烈シイ音響ノ中ニ包マレ



それから短歌の方は五句三十一文字といふ大きさで、小型だと云つても、在來の日本語で何か一つの事を云ふ爲には、さまで無理のない大きさです。だから短歌では、リズムを型態に托し、短歌といふ詩精神を理解すれば、後は、一般文學に準じて無理なく自然に、一つの事を云つて行けばそれで出來上つて行くから、一般文學の原則を勉強して行く以外に、別の努力も要らず、比較的樂な藝術です。勿論百人の中の一人になるには百人を抜く苦心が要るし、千人の中の一人になるには、千人を抜く勉強が要るのは、何の道でも同じ事です。しかし歌が作れる水準にまで達する事は、決して困難な事ではありません。ただ、従つて歌をやつてゐる人が澤山あり、昔から種々な細かい研究もあり、澤山の作品も殘されてゐるから、夫れ等の業績を知り勉強する事を怠り、自己流一點張りで進むと、意外の不覺を取る事があります。古い藝術だけに、一面では革新を要し乍ら、反面では古典勉強の必要のある所に、短歌研究の特色があります。

「リズムミカル」ニ開動スル  
昔饜ハ吃リ  
年老ヒテ高聲ヲ發シ  
キシム キシム  
徒ラニ不平ナル喚聲ヲ上ゲル  
尙維  
詞維  
實方  
立方  
隋圖  
ソシテ  
不規律形ニ至ルマデノ  
アラユル物體ハ動ク  
動ク、動ク  
メマグルシク動ク  
ソノ中デ  
唯ダ鐘ヲ掛ケ  
鐘ヲ掛ケ  
唯ダ鐘ヲ掛ケ  
鐘ヲ削ル

四、俳句

俳句が、歌と少し違ふ點は、その大きさが、更に歌の半分に近い位の切りつめた最小型であるために、これだけでは、日本語で普通に云つたのは、とても諸君に一つの事を敘述する事は出來ぬ。そこで俳句の表現は普通よりずつと切り詰めて、切れ字を用ゐたり、助詞を短かくしたりする獨自の表現法を定め、そこから「二段切れを禁じる」などの約束も生れて來る。しかしこれとても少し馴れば何でもない問題で、今までの名句などを少し讀めば自然に解つて來る。そしてやはり一般の文學的修養で容易に達成出來るものです。寧ろ餘り専門の俳句的表現にのみ陥ると、俳句仲間以外に通用せず、一般の人から見ると片言としか思へぬやうなものを平氣で「俳句の言葉だから」として許すやうな弊害に陥り易い。實際、芭蕉、蕪村、子規等古今の名家の句を見ると、いづれも之を一般文藝の立場から

窓ハ花白色ノ半線ヲ縛シ  
天井ハ紫紺ノ噴煙ヲ瀾シ  
オ、凜トシテ制作感ハ  
綾ノ様ニ纏ラレタ伶俐ヲ忘レ  
愚ニ屈伏シタ感情ヲ怒リ  
誰ニ尊貴ヲブチマケルノダ  
黙々ト鐘ヲ掛ケ  
鐘ヲ掛ケ  
更ニ鐘ヲ掛ケ  
オ、鐘を削ル  
少年工  
實習 金子 達也  
我等異國の子  
大儀の如く  
明るく、強く  
戰場に征き  
鐵と戦ひ  
木と戦ひ  
吾等の感觸  
いよいよ盛ん



見ても立派な作品と云ひ得るもののみだから、俳句だからと云つて「餘り俳句的」になるのはよくない。一般文學としての勉強を基礎としてやるやうにしなければ、本當によい句は出来ない。

ただ一つ、詩型の短い事から必然的に生れて來てゐる、重大な約束がある。それは「季節」と云ふ事です。短小なる敘述も、それが四季の風物として考へられる時は、その季節的な聯想が生じて、非常に含蓄する所が廣くなる。つまり短い十七字の俳句の中に讀み入れる言葉は、詩の方で云ふ所の象徴であり、季節一般の廣い風物をも言外にたゞよはせて象徴すると云ふ表現法を取る事になつてゐる。そしてその用語の中には必ず一つ、その季を代表する言葉を入れる事になつてゐる。それが所謂「季節」であり、それは日本の四季の風物を長年の經驗から選り出して、何千といふ「天文、動植物、人事」に關する言葉を、仔細に研究して、春夏秋冬の四つに分類して決定してゐる。それが「季節集」「季節せ」「歳事記」などといふ小冊子になつてゐる。一句の中には必ずこの「季のある言葉」を一つ

擊滅に振り上げるこの國  
精魂こめたこのハンマー  
興亞の爲に  
天地にとどろけ

我輩皇國の子  
羅の如く  
強く、逞ましく  
船を造り  
舟を造り  
國を造るこの心  
いよ／＼堅し

汗

一粒の汗大地にこぼれ  
みるみる  
土に消え入る  
汗となる業の貴さよ  
にじみ出て  
朽ちて行く短かき命

起東機 渡邊 良一

入れる事、そうすると他のすべては、その季のものとして、季節聯想を加へて感じると云ふ、巧みな組立てになつてゐます。

一體、自然や四季を愛するのは、日本人の優美なる特徴である。だから俳句に季節がある事も實に、日本人の國民性から出づるもので、尊重すべき事で、みだりに新しがつて革新したり廢棄してはならぬ。そう云ふ事をして得々としてゐる人があるが非常な心得違ひです。又素人が一寸俳句の眞似などをする時、十七字にする事は忘れないが、季節の事は得て忘れ易い。これは日本俳句の生命だから、決して忘れてはなりません。

又俳句獨特の詩精神とも云ふべきものとして、芭蕉の正風以來「さび」と云ふ事が貴ばれてゐる。これ又、日本の質實な武士道精神から現はれたもので、俳句を學び、俳句に徹して行く中に、精神的に大悟徹底し得るのには、この詩精神の力によるものだから、この「俳境」も尊重しなければならぬ。季節題を入れた十七字形の短詩を作つても、それに「さび」がなく、單なる滑稽や皮肉其の他の心境であつては、決して俳句と云ふ事は出

私の手

補機 松崎 治  
よ、私の手を見て下さい  
不格好な幾本かの指を  
沈黙の中に積年の苦勞と  
現世の忍苦を物語つてゐます  
それから此の爪を  
痛々しく短くなつて  
垢で塗れた爪先を  
生きる事の尊さを敬へてゐます  
そしてその掌も  
いくつかの傷跡と



來ない。俳句は川柳や狂句ではない。さびを精神とする「俳境」が、俳句の詩精神であり、俳句に於いては、缺くべからざる最も大切なものです。「さび」の精神は、俳句が成立した時代に偶然流布してゐたから、それに便乗して、俳句の精神としたと云ふやうなものではない。それは實に、五七五といふやうな形の小さい詩形が、獨立の藝術たるために、その形式からの要求の必然の結果、之が詩精神となつたものであります。かうした片たる小詩形であつて、若しどんなものでもよいから、一片の感情を出せばよいと云ふのであつたら、餘りに小さく一つの藝術たるの重味がなく、遂に一個の詩と成り得るものでない。そこでこの最小形詩には、特殊の比重にしてしかも小形の器にも盛り得る所の、哲學的な深奥なる詩精神がなくはなりません。それによつて俳句を、天晴れ一個の藝術とするものでなくてはならない。質素、剛壯にしてしかも、内に全體を含むやうな哲學的な「さび」といふ精神が、この短詩の中心に置かれて、始めて俳句は、形こそ小さいが、一個の堂々たる藝術となり得るのです。

硬り切つた筋肉の微動と共に  
皆正しい生命の痕跡です  
おゝ偉大なる手よ  
燦たる指々よ  
來るべき技術の世界に  
私は高々とさしのべやう

組立つた起重機  
検査 阿世 勝彦  
小さな鉄の孔から  
幾條かの光がさし込む  
組上つた起重機の上の小さい部屋  
區一つなく覆み上つた青空の下  
冷たい冬の空の中  
高々と組上つた起重機の機械室  
齒車は新しい光を放ち  
モーターは山のやうとしつと  
ケーシングもドラムも  
長いシャフトも紫色に包まれて  
靜かに横つてゐる

だから俳句は、十七字形である事、季題がある事、「さび」の俳境を持つ事の三つが揃つて始めて一個の藝術となるもので、そのいづれもが、日本性から生れて居り、その三つの中の一つが缺けても、俳句にもならぬし、日本性も薄くすると云ふ事はくれぐれも注意しなければなりません。

### 五、童謡、民謡その他の字數律詩

尙ほこの他に「童謡」「民謡」「歌謡」その他の字數律詩があります。「童謡」と云ふのは、本當に子供が作つた詩の場合にも云へるし、「子供のために大人」が作つた詩の場合にも云へるし、「童心を貫んで、子供の詩の形式を借り大人のために作つた詩」もあります。いづれにしても、直接に大人自身の一義的の詩ではなく、字數律の應用と云ふべきものであり、勿論それは、時にとつて面白いものでもあり、よいものでもあるけれど、これを眞剣な、最上の、一義的な詩と考へるべきではありません。

しかしその内部では  
電子と電子とが物凄い勢で走り廻  
つてゐる  
鐵骨と鐵板と鉄とボール板とが  
しつかりと結合して  
次に来るべき新世界への躍動のた  
めに靜かに待機してゐるのだ  
組立てが終り  
すべてが完成すれば  
モーターは物凄く呻り出し  
齒車は狭い部屋中に油を撥飛ばし  
て噛み合ひ  
地響を立て  
天地を震駭させて動き出し  
茫茫とした宇宙を揺り起し  
新しい世界を創造して行くのだ

我等鑄造工  
鑄造工場 松本 光男  
熔鉄爐の凄じい音を聞け！  
その偉大なる體軀の中に



「民謡」と云ふものも同様に字數律であり、本來、長い年の間に自然ある特殊地方の民間に傳へられて來、判然とたれが作ったのか原作者も解らず、然も原作者が無名詩人であると云ふに止まらず、口から口へ傳承を重ねて行く間に、段々と方々が直されたり間違へられたりして、實際上は、非常に澤山の人間と長い年月によつて作られたといふやうなものもあり、それには非常に濃厚に地方色が出て居り、民情が溢れてゐるといふやうなものもあります。

しかし又、さうして出來上つた本當の自然な民謡を真似て、現代人や、判然とわかつた特定の作者が作った所の「民謡」もあります。字數律にして、一義的の詩と違ひ、自己のみを振り下げず、寧ろ一般的な民情を表現しようとするもので、或は用語に於いて民謡らしさを出し、或は歌ふ所の内容によつて民情を出したりします。

しかしこれ又、眞剣な一義的な詩と同じだといふ事は出來ず、やはり一種の應用詩と見るべきものであります。

次に「歌謡」は、節をつけて唱歌として「歌ふ目的」を以つて作られた歌詞であります。

詩は素より本來歌ふべきもので、決して現代多く行はれてゐるやうに、印刷して、それを目で讀むものではありません。しかし「歌ふ」と云つても、それにも種々の程度のある事です。「朗讀」する程度も歌ふのであるし、唱歌の如く、字數や行數を正しく繰り返へし、節も一聯一聯同じ節で歌ふ時もあるし、淨瑠璃や浪曲のやうに一行一行變化する場合もあります。この場合「歌謡」は最も定型的な「唱歌」の歌詞をするもので、最も厳格な字數律をする場合が多い。

これまた純粹の「詩」ではなく、明かに二義的な應用詩であります。

既に字數律であると云ふ事が、現代の「詩」に對する考へ方から云ふと、詩性の在り方が、本格的でなく、藝術本來の精神上のものではなく、口調の上にあるもので、我々が追求する一義的な詩ではないのであります。

若い我等の情熱の

赤熱し白熱する  
變遷の叫びを聞け！

土の底から掘り出され

精進された塵と

土の底から掘り出され

乾溜されたコークスとが

混然として燃え上つてゐる様を見よ

その凄しく逞しく

増強しに奔騰する轟を聞け！

熔鉄爐から噴き出る熔けた銃蓋

その上に高く飛び散る湯玉

華やかな火花

おゝ我等の情熱から迸り出る熔湯

取柄に溢れるまで満ちてゐる熔湯

湯――

それはたぎり立つ

大東亞建設への息吹だ！

取柄の中にキラキラと

太陽のやうに輝く熔湯――  
起重機は廻轉する地軸――

滾々と上る煙は湧き出る雲……

――國型は我等の眞剣によつて

全くどつしりと地に着いて

微動だにしない！

取柄の把手を握るのは誰か

取柄の把手の汗を握るのは誰か

黒煙の如く中央に立つは

我等の職長！

湯止棒を押へるのは誰か

湯止棒を引上げるのは誰か

全身緊張して待機する我等

全身緊張となして環視する我等

高熱と闘ふ我等が産業戦士

それは生きてゐる群像だ！

炎々と燃え上る火の柱だ！

熔湯は國型に注がれて無數の湯玉

となり

飛び散つては華やかな火花となり

星とかげり



第十一定型詩

だから現在、本格的な詩である以上、それは偶々、形が或は七五調或は五七調等をしてゐても、それが根本的に詩性の根據とする所は、そういふ字數や口調の上にあるのではなく、飽くまで内容が如何に詩性を持つてゐるか、と云ふ事にあるのです。

だから現在我々は、時々形式上字數律詩を見る事があるが、しかしその詩の眞の價値を決める時、我々は決して、それをただ字數律の上から、又は口調の上から考へるべきではなく、その詩の内容が持つ「詩性」を見る事を忘れてはなりません。

もしも、「内容」に詩性が無く、本當に字數律や口調にのみ「詩性」があるものなら、我々はそれを最早、我々の一義的な詩と考へる必要はなく、「童謡」「民謡」「歌謡」などと同じく、一種の應用詩と考へて、軽く取扱へばよく、我々自身も、それらを作る時、一義的な詩の場合のやうに、眞剣になる必要はないのであります。

雨と降る空の流星群——

それはたぎり立つ  
大東亞雄飛への息吹だ！

我等は砂塵に槍れ湯玉を浴びて  
ふ日本の産業戦士——  
生命を賭ける崇高なる藝術家

それは

遅しい感力戦の烽火だ  
力ある生産戦の火花だ

——たぎる熱意だ！  
——燃える闘志だ！

時間だ！

空間だ！

驚愕らしい宇宙の創造だ！

お！

我等製造工こそ

美しい神代の御業を受継ぐ

新しい創世紀を貫く  
雄大なる先驅者だ！

第十一章 詩の朗讀

一、歌はれる詩・讀まれる詩

詩の朗讀は最近非常に普及して來ました。もともと詩は聲を出して歌ふもの朗誦すべきものであつたのだから、朗讀が盛んになつて來ても、それは當然の事でありませぬ。

詩が聲を出して歌ふべきものであつた時代は、勿論みんなが聲を出して朗誦して居り、勿論一定の抑揚や曲節があり、それが聲樂の起原をなしたものです。日本でも謡曲、淨瑠璃、浪曲その他、「朗誦が聲樂を發生して行く経路」を示す中間形態のものが非常に澤山残つてゐます。

巨船進水

起重機 村井銀次郎

限りなき力を揮げ  
限りある生命を揮げ  
一切を生産に携はる

巨大な

ニューマチクハンマーを振り

巨大な

スプリングハンマーを抱いて

鐵を削り、鐵を削り

更に鐵を削る

紙を打ち、紙を打ち

更に紙を打ち

それは生活のためにあらず  
資金の奴隷たるにあらず

遅ましき造船戦士

我等の抱けるは

必死に生き  
必死に働き



しかし文字が出来、記録したり印刷したり出来るやうになると、今まで口から耳へのみ傳へられてゐた詩が、紙の上に書かれるやうになり、聲なしで目から目へ傳へられるやうになつた爲め、詩の朗誦が段々と忘れられて來て、本來「聲の藝術」だつたものが、やがては「目の藝術」の如くに轉じ、和歌の如きは美しい筆蹟の藝術となり、俳句は木版刷の藝術、近代詩は活字の藝術であるかの觀を呈するに至り、詩の朗誦や朗吟は次第に減じて來ました。

しかし我々は古來の和歌に朗詠があり、漢詩に昔から詩吟があるのを知つてゐます。最近になつて蓄音機やラヂオ放送に詩の朗讀が採り上げられて以來、久しく「目の藝術」の如き觀を呈してゐた詩は、再び幾分「聲の藝術」に復しつゝあります。

必死を賣く  
生ける魂、生ける魂、  
生ける魂なり  
打鉄の音、天に木響せよ  
我等の血、熱と燃えよ  
我等は東亞を制する船を築く  
世界を制する船を造る  
熱涙頬に流れ  
感懐胸にせまりぬ

おお  
聖なるかな、無敵の生産  
聖なるかな、必殺の遺物  
聖なるかな、船を造る者等  
貴き汗を額に流せ  
情熱の涙を頬に浮べよ  
感懐の血、血管を破り  
感懐に胸迫る朝

工場之夜

二、朗讀の種類

元來聲の藝術として最も立派な發達をしたものは、云ふまでもなく聲樂です。この他に準音樂としての前述各種の朗誦歌曲がある。そして現在、更に音樂分子の少ないものとして、發牙形態の若干の「朗讀」がある。

最近最も普及してゐるのは、「劇臺本の朗讀」と「ラヂオの物語朗讀」です。その他に「映畫説明」と「演説」とが發牙形態の聲の藝術です。

そこで詩の朗讀はどんな風によつてよいかと云ふと、現在實際行はれてゐるものは、聲樂、各種の準音樂的朗誦歌曲、殊に和歌朗詠と漢詩の詩吟とが参考にされつつ、姉妹朗讀である「劇朗讀」「物語朗讀」「映畫説明」「演説」等を参考として、最近いろいろ新しく工夫されてゐます。

しかし詩には「詩の朗讀」があらねばならぬ。詩の特色に立脚し、詩の

洗面所

紀重機 機邊 良一  
もうもうと立ち上る湯氣の中で  
袖に汚れた手を洗つてゐる  
手、手、手、手……………

ハンドルを握り、機械と取組み  
萬力を脱めつこしてハンマーを振  
つた手を洗つてゐる  
手、手、手、手……………

もうもうと上る湯氣の中で  
袖にすくけた顔を洗つてゐる  
顔、顔、顔、顔……………

埃だらけの空気を吸つて  
臭い煙を吸つて  
穴を明けたら軸を仕上げたり  
朝から晩まで  
あつちこつち氣を配つた顔を洗つ  
てゐる  
顔、顔、顔、顔……………



特徴を十分に生かした朗読でなければならぬ。

詩の特色と云へば、云ふまでもなく、リズムです。詩の朗読は、リズムを生かす所にその特色がなければなりません。

現在ラヂオで放送したり、各種の人々のやつてゐる「詩の朗読」を見ると、この事に気が着いてゐる者もあるが、氣づかずにゐる人々が大部ある。工場などの詩朗読會を見ると、最も多いのはこの「劇朗読」「物語朗読」「映畫説明」「演説」から影響されてゐるものが最も多い。それも一應によいとして、しかし問題は、その中に詩のリズムを生かしてゐるかどうかが、重要な點であります。

本來云ふと、劇には劇朗読があり、物語には物語朗読があり、映畫説明や演説にはまたそれぞれの違つた目的があり、特色がある。詩の朗読をしようと思ふ人は、それを一應考へて置く事が必要です。

劇朗読は夫々の出場人物の性格に基づいて、その科白の持つ自然な表情

突つたり怒鳴つたり水を掛けたり  
終業の洗面所は賑やかだ

もうもうと立ち上る湯気の中で  
曲に汚れた手を洗つてゐる

手、手、手、手！  
顔を洗つてゐる  
顔、顔、顔、顔！

歸途の門

監査 白石 政次  
午後七時〇五分

歸り仕度の工員が  
機械、仕上、起重機、鑄造  
各工場から出て来る

誰かが口笛を  
誰かが下駄を鳴らし  
辨當風呂敷を  
さゝやかな笑ひをかゝへ  
工場から出て来る

と、その意味が作品の根本に對して持つてゐる關係を充分に表現し、聞いてゐる人に客觀的な同感を生ぜさせるやう朗読すべきです。

物語朗読は表情ある會話と、淡々たる中に状況を明瞭に理解させる平敘とが交じつて、聞いてゐる人に主觀的な同感を抱かせるやう朗読すべきであります。

映畫説明は一方に視覺的に映畫が示してゐるから、補助的に協力的にそれの出し得ぬ部分の會話と解説を附加して行く。演説は、聞く人の理性と感情に訴へるやうに説得して行く。

しかし詩の朗読は、そのいづれとも違ふ。詩の章句を聲で傳へる事によつて、その詩の持つリズムの美しさを音聲で表現して、聞く人にリズム感の美しさに感激させなければならぬ。そして聲によつて詩精神を傳へ、詩の世界を知らしめるのです。その目的は、劇朗読、物語朗読、映畫説明、演説等とは、全く違つた別個の使命を持つてゐる。前例のない爲め、やり

飛んで来る人  
歩いて来る人  
追ひ越す人

門は閉ざされてゐる  
出て来た人々は  
先着順に並ぶ一二三四  
四列にならぶ

煙草に火をつける人  
口を開いて空を見てゐる人  
退屈してゐる先に来た人

出て来る、出て来る  
優から優から  
列はどんどん長くなる

門はまだ開かない  
たまり兼ねて叩かれる門  
難然たる中に  
がつちりと閉まつてゐる門

門はまだ閉まつてゐる



方が解らず、一應それらのものを参考にするのはよいが、夫れ等を眞似し過ぎては、詩朗讀の本來の意味を失つて了ひます。

### 三、詩の朗讀

詩の朗讀は、リズムの理解が出發點にならねばなりません。だから、詩のリズムの解らぬ人には、詩の朗讀は出來ぬと云ふ事になるし、且つ、自分にその詩のリズム感が理解出來ぬ作品であつたなら、その「詩としての朗讀」は出來ない譯です。

詩のリズムは大別して、新體詩のやうな字數律と、自由詩のやうな心律（内在律）とがあるが、字數律の方は、音聲の中にリズムがあるから、この朗讀法は比較的容易です。殊に古來和歌の朗詠が傳へられてゐるが、それが七音五音の字數律によるものであつて、共通する所が多く、非常に

電燈がパツとついた  
一時に明るくなつた昔の顔  
歡喜に滴ちた顔、顔  
輕快に流れる聲、聲  
團圓の夕餉を思ふ胸、胸  
勤勞と慰安とを境する門は  
まだ開かない  
列はまだ伸びる

まだ來る、まだ來る  
機械、仕上、起重機、鑄造  
各工場からまだ出て來る

うつむいて來る  
胸を張つて來る  
一人で走つて來る  
グループで話して來る

終業の工場  
歸途につく工員  
門はまだ開かない

参考になります。

字數律のある新體詩の朗讀は、比較的容易に短歌朗詠などを参考にし、口調を發見する事が出來ます。そして内容と韻律が別々に存在しますから、内容に應ずる表情を罩めて朗讀しても、その表情は何の妨害もせず、リズムは字數から生ずる口調の上で、充分にその韻律的美しさを發揮する事が出來、内容と韻律が別々だから、表情と韻律美は別々に夫々完全に發揮し得、お互に妨げ合はないから、非常に朗讀しやすい。

だが自由詩の方になると、リズム美は最早や字數や口調の上にはない。意味そのものの在り方になるのだから、もしも聲を意味の表情にのみ向けると、その在り方の美しさ表現する事が出來なくなる。自由詩にあつては、聲に乗せて表はす所の意味が、その内容を傳へると同時に、その在り方の美（リズム）をも表現しなければならぬ。二役を果さなければならぬ。散文であれば、意味を完全に傳達すればそれでよいのだが、詩にあつては、

### 歸り路

紀、仕上長谷川勝則  
たかだかと  
終業のサイレンが鳴り渡る  
空には星が、そして美しい月が  
私を迎へるやうに輝いてゐる  
私け辨當箱を小脇に抱え  
晝の疲れを忘れ  
美しい空を眺めつゝ  
家路に急ぐ

リズムを取る下駄の音

私の心は晴々として  
今日の務めを無事に果した事を感  
謝する

### 相生橋

仕上工 高野 勇  
思ひ深き晝の碧玉の色もあせて  
私の空暮れ行けば



意味の傳達よりも、リズム美の表現の方が主であり、意味の表現は、それ程に重要でないか、又は全然必要ない。それは詩の性質によるもので第二一九頁の分類を参考に考へてみて下さい。

従つて詩に於いては表情は、リズム表現と相半ばする程度でよい時、リズム表現より少ない程度の表情であるべき時、及びリズム表現のみ必要で、意味は事柄がわかりさへすればよく、表情効果は全々不必要、又時にはあると邪魔になる時もあります。

従つて自由詩の場合は、

(一) リズム感は音聲的に充分に出す

(二) 意味は内在律ではリズムの根元だから、十分解る必要があるから明瞭に、解るやうに發聲する事

(三) 表情は次のやうに扱ふ

1、少くとも、リズム、意味の表現の邪魔にならぬ程度

2、その作品に応じて、(甲)軽く出す場合、(乙)全く出さぬ場合

果し無き鋪道の灰色の壓迫に  
草木はあれど  
枯果てぬ  
ブラタナス——

今日もまた一日を終へ  
歸り行く……

見よ、疲れたり影も、心も  
あゝされど

吾が求むる憩ひとなし  
街の灯は赤くともれど——

空なる心にて

いつも暗渡る

權にてありき

習つめたき鐵と石もて

築かれたる

權にてありき

いと暗き水則揺れば

光こぼす蒼ざめし橋燈——

灰色の黄昏の底に

詩朗讀に於いて、「表情」をどの程度出すかは最も難かしい。劇朗讀なら表情を出す事は最も必要だが、詩の場合には決して必要でない。誤つて劇朗讀みたいに表情をつけると、リズム感が不明になつて詩朗讀の生命を奪つてしまふのみでなく、安つぽくなつて、非常に「卑しい」感じがし、品格が下がつて来るから、これは十分に警戒すべき事です。

そして詩朗讀の時には表情は有り過ぎる方がよいか、無さ過ぎる方が宜いかと云ふと、無さ過ぎる方がよい。むしろ無表情で淡々と行く方がよい。リズムの音聲表現は詩朗讀の美感の根元であり、表情は面白味である。面白味は無くても、美感さへあればよい。面白味は附加物である。附加物の過重、しかもそのため主眼たるリズム感が損じたら、全く失敗であり、詩朗讀の生命を失つて了みます。

#### 四、表情とリズム

取り残されて人も知らし  
夕闇にはかなけれど  
ほのかなる温み持つ  
その光に暮ひ寄り  
わが心すゝり泣く

橋燈——

夕暮の私の景色

調遣工 松本 光男

この世はもう黄昏れ始めた  
佗しい都會の空に

また私の景色が漂ひ始める

海にそそぐ大川のほとりに  
大工場の巨大な煙突が

疲れ果てた大空に聳え立ち

サイレンの餘韻の消えて行つた

空のいや果てには

眞赤に焼けた落日!

一日の終つた後の倦しげ……

憂鬱に沈んだ雲が一片



それに詩は、日常會話の表現ではないから、劇の科白や映畫説明のやうな會話的表情を出すのは最も間違つたものです。また映畫説明や演説は、理性に訴へたり感情に訴へたりして、理解や説得をしようとするものだが、詩のリズム感、泌々と味得さすべきものだから、映畫説明や演説のやうに、押かぶるせるやうな調子はいけない。

あらゆる意味で、聞く人の心琴に、餘分の刺戟を與へぬやうにして、靜かに泌々と、内在律を充分に感じさせるやうに朗讀しなければならぬ。

### 五、方法の工夫

以上は主として纖細微妙な内在律の詩を、一人で朗讀する場合を述べたのです。しかし詩の朗讀は作品の種類によつては、必ずしもソロに限つた事はない。二人の時も面白いし、三人、四人も面白いし、もつと大勢の合唱

灰色に覆んだ空を  
細長くふつくりと横はつてゐる

秋風は私の心の中から起り  
秋風は私の悲しみの中から吹き  
雲は靜かに漂ひ始め  
私は唯だ一人しくしくと泣く

あゝ貪慾なる大空よ  
私の燃え立つやうな情熱の燃べて  
を煙にして、  
お前はそその巨大な煙突から皆な汲  
ひ取つて了つたのだ

物憂げに流れる雲よ  
私の過去のすべての情熱を含み  
穢み離き思ひ出を隠して  
お前は何處へ行つて了ふのか？

此の世はもう黄昏れ始めた  
そして飽しい都會の川邊には  
またいつもの  
秋の景色が漂ひ始める

もよい。勿論それはその詩の構造による。また或る場合には、折返しになつてゐる行を多勢の聲で合讀し、その前を一人又は二人で讀む事も出来るし、聲を分けて問答的に受渡したり、芝居の「割り科白」のやうに、何人かに受渡すのもいい。全體が單聲よりも複聲に適したのもある。

集團朗讀には、新體詩は、曲節の表情が出し得るから歌に近く、自由詩の方は、シュプレヒコールに近く、種々と構成に工夫が出来ます。

北原白秋の作品などは種々な構造のある定律詩があるから、工夫によつては集團用として、非常に面白いものがある。「祭」などはその意味で、最もよく用ひられる詩です。

又最近頻りに作られてゐる愛國詩などは、國民の士氣を鼓舞する目的が判然してゐるから、この朗讀も非常にやり易く、意味もあります。こんな場合は、表情と聲の組合せ方を工夫すると、時局的に非常によき集會の席上の「出し物」となります。

なほ詩朗讀に樂器や擬音の伴奏を入れる事も出来る。それらは夫々その

ゆらゆら  
ゆらゆらと  
細長く水の面に  
ゆらゆらと  
疲れ切つた煙突の影が  
今日もまた、揺らいでゐる。

### 工場の夜

検査 白石 政治

夜——  
冷たい夜  
一本の木にも食ひこむ寒さ  
今日の朝ひを忘れた  
タレインがぼんやり  
月の光の中に落ち着いてゐる  
深い冷たい夜——  
こゝへて動きさうもない  
暗いとばりの中に  
すべてが今日をたゞかひつくして  
たゞすみかけてゐる



作品の詩性や内容をよく考へ、正しい解釋に基づいて、詩に對するよき理解力ある人が「演出者」となつて、夫々を専門にやつてゐる人に托すがよい。しかし注意すべきは、すべて詩をよく翫味してやらぬと、これも、却つて詩の持つ美しさを壊し、品の悪いものになる恐れがあるから、この點はくれぐれも注意すべきです。

要するに詩の朗讀は、「詩のリズム」に對する最も具體的な、立體的な、理解力の表現なのであります。

圓ひ後の取けさだ  
北風も沈み  
草木の顛へ響もなく、  
激しい機械の音もない

何時まで潜んでゐるのだらうか  
何時まで續くのだらうか  
この深い夜の静けさ

寒さが木にも食ひ込んでゐる  
クレーンが月の中に落着いてゐる  
冷たい静かな夜――

徹夜

肥重機 渡邊 良一

マシンの油が  
寒天のやりに凍つて行く夜  
四十ワットの電燈を頻近く寄せて  
じつとバイトの歯先を見つめる  
直結モーターは快調  
凍えてゐる空気を小刻に震はす

第十二章 勉強の仕方

一、詩を樂しめ

詩は元來樂しまねばいけない。詩は詩精神に導かれて、安易な常識の世界を離れ、自分にとつて最も本當な實感の世界で、心のまま歌ひ上げる事であるから、根本的に先づ明るく楽しい氣持を失つてはならぬ。若し詩を作つて居ながら、心の中から樂しさを失ふやうだつたら、それは何所かに間違ひがあるのだと考へてよい。或はその詩を作る氣持に、競争心とか功利心があつたり、或は詩が人間性の修養になるとか勉強になるといふ事から、修養とか勉強とか云ふ事の意味を、大儒學派的に考へ違ひしてゐる等の事から起つて來てゐるのです。

夜は更けてゆく

徹夜の夜は更けてゆく  
赤々と燃えさかるストーブの温みに、  
ともすれば緩む心を  
動ました動まし

じつとバイトの歯先を見詰める  
手袋も透すハンドルの冷たさ  
ハツと我に返へる

もの音が深い眠りに沈み  
もの音が夜の冷氣に包れて行く頃  
四十ワットの電燈を頻近く寄せ  
あかあかとストーブを燃やし  
モーターを唸らせ

じつとバイトの歯先を見詰める  
寒さを押しして働く  
夜を通して働く

徹夜の朝

補仕 松崎 伯

幾十時間 働き通した  
徹夜の朝



だから詩の勉強は、先づ大どかな心で楽しく作り、楽しく読む事です。詩の勉強は云ふまでもなく、澤山作り、澤山読む事です。しかし読む事も作る事も、根本に於いて、明るく楽しむ事を忘れてはなりません。

### 二、人格と結び着けよ

それから詩に於いて今一つ大事な事は、詩が筆先の技巧から生れるものではなく、人間性の現はれるものと云ふ事を根本的に理解して居り、詩を常に人格と結びつけて考へる事です。そう云ふ考へ方をするとならないとは、その影響が非常に大きい違ひになつて來ます。

だから詩を作る事は、自分の人間性を詩に表現する事であり、詩を勉強する事は、人格を磨き自己を修養する事です。それで詩はいはば自分の姿を寫す鏡か寫眞のやうなもので、詩を作り詩を勉強しつつ、人格を磨き自己の修養をするといふのは、いはば自分の姿を寫眞か鏡に寫し乍ら、反省

肉身がボロ／＼で  
痛い腫に  
朝のハイライトが射す

おゝ、さん／＼とふり注ぐ早聲の  
陽光よ

起きるすべも忘れた  
眠い、情い、此の五臓！

席を敷いて  
臥して來ても

心一途の

光一途の

淡い生甲斐は

朝の工場南の窓に射すひかり

### 工場景物詩

器具室

検査 回掛 勝彦

薄暗い鐵格子の中の

し修養するのと同じで、その點普通の修養とは非常に趣きが違つて居り、寧ろ普通の修養に見られない効果があり、しかも普通の修養と違つて、何等、苦しみのない、非常に楽しいものであります。

殊に詩が獨特の精神修養になる點は、詩が徹頭徹尾、卑俗な功利主義を排除し、且つ安易な常識や理窟の世界を超越して、より高くより深い實感の世界へ直入する所にあります。それは詩をやる人々の心境に、非常に大きい影響を與へるものです。

そうして功利、打算、利慾、理窟等を離れて、そこに明るく、楽しく、高邁で、眞實な境地のある事を、詩が我々に教へて呉れます。

だから詩を作るにも詩を読むにも、必ず詩を人格と結びつけて、澤山作り、澤山読む事が必要です。

作る方に就いては、本書が各部分を大體、御話しましたから茲に再び述べる必要はありません。

埃だらけの棚に

一列に置かれた

バイト、カッター、ケレー

貴い数多い生産の思ひ出と

その生産の犠牲の

数多い百傷や怪我の思ひ出を秘め

ずらつと一列に置かれた

バイト、カッター、ケレー

探けた低い天井には

過ぎ去りし神祕が、煙の如く立ち

罩め

油と手垢に汚れた

部厚い書類は埃にまみれ

その真中にじつと坐つてゐる男

白い頬のこけた

顔中一杯にマスクを掛けた番人

ドリル、リーマー、ソケット

消えかゝつた名前

小さい一尺四方の窓から  
手を出して



### 三、詩の読み方

詩の読み方について云ふと、一番大事な事は、やはり詩は藝術であるから譬へ人の詩を読む場合も、先づ「楽しむ心を以つて読む」といふ事です。勉強するのだと云ふやうな氣持に驅られて、楽しむ氣持を忘れて讀んだなら、その本當に藝術的な面を掴む事が出来ず、單なる知識的な勉強に終つて了つたり、功利的な結果を得るに止まつて了ふからです。「詩」は藝術だから、楽しく讀まなければ、本當の味、本當のよさの解るものではありません。そしてその「詩のよさ」を見落したならば、いくらその詩に對して理窟を云つて見ても、擧げ足を取つてみても、缺點を搜してみても、本當の藝術味を理解する事は出来ぬものです。これはすべての藝術に共通な特色であつて、他の勉強と、全く趣きの違ふ所であります。

そして明るく楽しい氣持で、幾度も幾度も讀み味ふ事です。詩は一度讀

俺たちのチツキを一つ一つ  
工具に換えて呉れる  
お伽噺の中の不思議な小父さんの  
やうな道具番

#### 蜘蛛の巣

鑄造工 松本 光明

黄昏の工場天井に  
小さい蜘蛛の巣が張られて居る  
網に生活の糧の得られる事を願ひ  
蠅取蜘蛛は  
貪慾な觸角を動かす

灰色の埃に塗れ  
醜い手足で

網ばかりを頼りに  
しつかりとしがみ着いてゐる

落日は赤々と燃え立ち

靜かに淋しく風が渡り

ゆら／＼揺れる蜘蛛の巣  
余りにも物堅い現實に押されて

んだ位で、言葉の表面の意味や、一通りの筋道を理解した位では、必ずしもそのリズムの持つ美しさまで解ると云ふ事は云へない。幾度も幾度も讀み味つて行く中に、そのリズムの美しさ解る事があります。だから詩は成るべく、幾度も繰り返して讀む事です。

詩の意味や筋道は一通り讀めば直ぐ解るが、その詩が出してゐる氣分やリズムは、餘程注意しないと掴み損ひます。だから詩を讀む上の注意は、氣分やリズムを落さないやうに讀む事です。それにはどうすればよいかと云ふと、二つの方法があります。

第一は先づ最初に、明るく楽しい氣持で軽く讀む事です。第二は幾度も幾度も繰り返して讀む事です。どつちにしても要するに、意味や理窟に引掛らぬ様に讀む事です。

先づ明るく楽しく讀むのも、意味や理窟に引掛らぬためです。次に幾度も幾度も繰り返して讀むのは、一度頭に入つて來た意味や理窟が麻痺して感じなくなり、それを脱して、ほのかな氣分やリズムを深く味ふためであり

惨らしくも潰されて了ひそらだ

落日の隙赤く燃え立つ時

空の果に大きく虹懸る

細くばかりの美しい虹懸る

唯、美しい七色の虹

それは空に張られた夢であり幻で  
ある

人よ!

その夢幻の中に解け込んで行き

そこから新しく生れ離ろうよ……

地の果てに落日は沈み

薄れ行く黄昏の優彩色

見る見る消えて行く七色の虹

夕暮の工場の天井に

なほも蜘蛛の巣が

風に吹かれて揺れてゐる

夕の風は消去つた虹の香を惹つて  
此の世の底から吹上つて行く――



ます。それで詩は文句をすつかり覚え込んで暗誦するやうになると、ますますその美しさが解つて来るものです。讀む時、もし聲を出して朗讀するとしたら、前章の朗讀の項で書きましたが、極力餘分の表情や節は着けないやうにし、専らそのリズムを生かすやうに朗讀する事です。リズム以外の表情や節を持つた朗讀をすると、却つてリズムの理解を妨げて、有害になります。

また人の詩を讀む場合に二つの方法があります。それは個人的な「詩集」を讀むのと、澤山の詩人の詩を少しづつ集めた「詞華集」風のものを讀む方法とです。

勿論最初の中は「詞華集」風のもので、一時に澤山の詩人の詩を大觀する事が必要ですが、やや進めば、出来るだけ個人の「詩集」を讀む方がよい。「詞華集」で一通りの見當が着いたなら、その中で一番自分の氣に入つた詩人の「詩集」を買ひ、なるべく澤山、出来るなればその人の制作の時代の理解出来るやうに順序正しく詳細に讀み、その人と作品を結びつ

火の踊り

検査 阿世 勝彦

火がストロブの燄突の上で  
たのしそうに踊つて居る

赤い燈物を着て

燄突のふちを

飛んだり跳ねたり

何本もの足を

つけては上げ

つけては上げ

片足で立つたり

たのしそうに

一人で踊つて居る

だれも見えてゐない

このおもしろい火の踊りを

見てゐるのは僕だけだ

赤い燈物を着て

ごう／＼と燄をかけて

踊り子は一人で踊つてゐる。

け、その生活と作風とを結びつけて、詩風の變化成長を知り、單に作品個個として味ふだけでなく、その人の魂の現はれ、その人の人間性の成長して行く姿として理解するやうにし、詩を必ず人格と結び着け、なるべく深く理解すると共に、人間性の勉強を、人間性の修養をすべきです。

四、模倣について

人の作品を讀んでゐる中に模倣したくなる事があるかも知れない。そんな場合には樂な氣持で模倣してみるがよい。模倣も一つの勉強の方法であります。漫然と見てゐただけでは解らないものも、自分が模倣してみてもて納得出来るといふ場合もあります。

但しその時斷然注意しなければならぬ事は、そうして出来上つた作品は決して自分の作品だと云つてはならぬといふ事です。「模倣」は上達する手段としてやる場合には何でも無い事で勿論許されるものだが、云ふまで

工場の蝶

監査 阿世 勝彦

埃と油とに汚れた工場に

飛び込んだ蝶よ

お前は何故この様な處に來たのか

錆び切つた硬い鐵と

ほこりだらけの鐵骨と

機械の騒音と

ハンマーの雜音との中で

お前は何を求めやうとするのか

油手に汚れたガラス窓に

バタ／＼と翅を動かしてあへいて

ゐるお前

お前はなぜこゝを逃げ出さないのか

か

お前はなぜ太陽の輝く外へ行かないのか

花は美しく咲き

多勢の美しい友達が

お前を待つてゐるのに



もなく、自分の作品を作る方法ではないのだから、模倣によつて自分の作品を作るといふやうな事は、如何なる場合でも許されません。

それに一體我々の詩は、「作る」點に意味があるのであつて、よき作品を得る點に意味があるのではない。だからいくら「よき作品」を作り上げても大した價値はないし、又更に、その作り方が正しくなかつたらいくら作品がよくても「働く者の詩」としては全く意味のないものです。

尙ほ勉強の方法として模倣は結構だが、それは新しい技巧を理解する上の勉強であり、これによつて、詩の根本的なものを學び得ると考へては間違ひです。特に模倣も軽い氣持でやれる場合はよいが、それが自分の詩を作る場合の習慣にでもならうものなら、一つの致命的な悲劇でありますから、餘り度々繰り返へす事は危険です。これだけは注意して置く必要があります。

純白な翅を持ちながら  
お前はなぜ外へ行かないのか  
汚れた工場に飛び込んだ様よ。

現場に別れる

實習工場 松崎 治

可愛い、優麗よ、さやうなら  
可愛い、弟達よ、さやうなら  
明日も愉快に仕事をしてお呉れ  
私は行かねばならなくなつた

私は君達を愛して来た  
埃だらけの現場も  
捨てて来た一本のポルトにも  
心残るまで愛して来た

だが、可愛い、優麗よ、  
私は君達よりもつと澤山の  
優麗を教へに行くのだ  
愛しに行くのだ

だが、可愛い、弟達よ、

五、廣く讀書せよ

詩の出来る根本は人間性であります。人間性の成長する事が、如何なる作詩技巧が熟達するよりも、より根本的な上達の條件であります。

だから詩の本當の勉強は、自分の人間性を成長させる事であり、自分の人間性は勿論一方から云ふと詩を作る事によつて成長し、詩は人格修養の最もよい方法ですが、云ふまでもなく、詩を作るといふ方法以外にも自分の人間性を成長させる方法は幾らでもあります。そのすべての方法は、結局、詩を上達させる事になります。だからそれらはすべて自分の詩の勉強だと思つて行ふべきであります。

勿論此の場合、人の「詩集」を読み、或は「詞華集」を読んで勉強するのも最もよい一つの方法ですが、根本の人間性を養ふ方法と云ふなれば、むしろもつと廣範圍に、偉大な藝術を讀む事を御勧めしたい。世界的に偉

私が母なくても黄色い壁で  
他の人達に甘えてお呉れ  
他の人達に可愛がられてお呉れ

可愛い、優麗よ  
可愛い、弟達よ

私も廣い原っぱの實習工場で  
お前たちやこの職場の生活を  
思ひ出して居やう

さやうなら  
さやうなら

櫻が散つて櫻がまた咲く頃  
私はまた歸つて来る  
そうしたら手を握らうよ  
きつと握らうよ

その日まで  
お互に幸福であらうよ  
お互に元氣よく働かうよ



大だと云はれるやうな立派な小説や戯曲、日本の國民性を養ふやうな立派な藝術の讀書は、人間性を成長せる上に最上の方法であります。その他讀書は何によらず青年期の人格向上の爲め最上の方法です。どんな本でもよい、廣く讀書する事を御勧めします。中には「いい本を読むのはよいが、悪い本を讀んでは却つて害がある」と云つて、青年の讀書を非常に狭い範圍に限定する指導者をよく見受けるが、それは舊式な頭の古い人です。どんな本でもよいから、廣く讀書する事を御勧めする。

凡そ今日世上に出版されてゐる位の本はどの點に於いてか、必ず世間一般より優れた點を持つてゐるものだから、讀めば必ず得る所があります。殊に此頃では「日本出版會」といふものがあり、出版物は必ず一度ここで、立派な専門家が集つて充分研究した上、許可されたものだけが出版されるのですから、昔のやうに有害な本が出版されると云ふやうな事は、殆んどないから、諸君は安心して、なるべく廣く讀書してよい。

小説本は讀んで益がないとか害があると云ふ説は、狭い見識の人の一家

可愛い、後藤よ、さやうなら  
可愛い、弟達よ、さやうなら

實習工場

補機 松崎 伯

實習工場の  
窓から仰ぐ  
空は青いよ

小さい少年工の  
頭から見える  
海も青いよ

橋向ふの  
川向ふの  
公園の木も草も  
青いよ

春だよ  
少年も私も  
みんなみんな  
青い風景だよ

言であり、決して現代世間に通用する議論ではありません。立派な小説は修養書などより、遙かに強い感化力を持つものです。だから讀書については、決して狭量の意見に捕はれる事なく、なるべく廣く多く讀む事を勧めます。殊に従來の工員は、讀書の量や質の低かつた事が、工員の質の低かつた最大原因です。今後の青年工諸君は何よりも讀書の量と質とを高める様に努力して下さい。ある意味で云ふと、詩をやる事が、現在の青年工諸君に非常によい影響を與へてゐることの原因の一つには、確かに、「詩」をやつてゐると、何彼と讀書する機会が多く、よい讀書の習慣をつけるため、そのために非常によい結果を來たしてゐると云ふ事は、否定出來ません。

「日本出版會」などが出來た今日、書物が與へる悪影響を恐れる位時代を知らぬ愚かな事はありません。もし現在の許可されてゐる書物の、副作用を恐れてゐたら、現場で集つて話してゐる事だつて聞いて居てはいけないと止めなければならぬ。何となれば、如何なる點から云つても、我々が

蛇

實習工場 成田 一鶴

實習工場の  
庭に咲いて居る菜の花の  
小さい黄色い花の上に  
汁を吸ひに来る  
あふの群

指先でついても  
口で吹いても  
逃げない蛇

黄色い花粉を  
身體につけて  
じつとしたまゝ動かない蛇

青い空にいつか雪が出て  
捨てられた紙が  
風に吹かれて飛んで行く

一匹二匹と  
花を飛び去つて行く  
やがて蛇の居なくなつた庭



常に耳にしてゐる卑俗なおしやべりより、現在出版を許されてゐる本の方が下らぬといふやうな事はありません。必ず現在出版されてゐる本は、安心して読んでよく、且つ読む値打のある本です。その點は日本出版會といふものが出来た以上、昔の考へを改め、もつと出版會の仕事を理解し、その存在價値を活用して、不必要な心配をせず、安心して廣範圍の讀書によつて立派な人格を築くべきです。

### 六、詩の雑誌

既に詩には詩専門の同人雑誌があります。此の頃は統制されてその数が非常に少くなつたが、以前はこれがすべての青年詩人の登龍門となつてゐたものです。それには若干の著名詩人を中心に段々と若い數段の詩人が詩を出して居り、全國にはかうした集團が無數にありました。だからこの中の重要なもの數冊を見てゐると、大體全國の詩壇の動きが知れ、特に若い

風の吹いてゐる庭  
草の靡いてゐる實習工場の庭

退院して

起 鳥居 龍夫

私の好きなホッピングよ  
幾日か見なかつたがその間  
お前は私とやつたやうに  
動いてくれて居たか

私は病床の上で  
お前のことを思ひつゞけた  
馴れない人とやつてもしや  
故國でも起しはせぬかと

私はお前の癖をよく知つてゐる  
お前から出るこの甘い匂も  
私だけに解る大好きな匂ひだ  
嗚呼その匂ひは私には悲しい思ひ  
出、嬉しい思ひ出だ

人々の作風を知る唯一のものでした。これは又反面から云ふと若い人が詩を發表し、世間に問ひ且つ成長して行く足場でありました。最近それが合併され、數が減じたので一冊で著名詩人の數は、以前より多く見る事が出来るが、その代り若い人の發表の機會は非常に減縮されて來ました。しかし、働く青年にとつては、各會社に産報會報等が出來て、それに夫の文藝欄風のものがあり、産報會員の作品發表に新しい領域を提供するやうになりました。

しかし我々が常に念頭に置かねばならぬ大事な事は、我々働く者の「詩」は、作る點に價値があり、それを發表したり、讀められたりする所には、何等の價値はないといふ事です。そして「詩の表現」といふ事は、「心を言葉の形にする」といふ所で終始し、それ以上の事は最早「作詩の道以外の事だ」と云ふ事をよく考へ、發表するといふ事は、餘り深く考へない方がよろしい。發表といふ事を餘り念頭に置く事は、詩精神の純眞さを汚が

私はお前と一緒に生活して來た  
何時も變らぬ調子で

お前は私の愛人なのだ  
私の生活の中で一番長く一緒に  
ゐるのだ

お前とならばどんな事でも  
やり遂げる力はあるよ  
さア疲れた顔をせず、元氣を出そ  
うよ

私はやらなければならぬ  
お前もやつておくれよ  
峠は高いが登つてこらん  
きつと楽しい勝利が待つてゐるよ  
兩手を廣げて、私達を待つてゐる  
よ

職場を思ふ

松崎 治

夜が風を呼び  
風が思ひ出を呼び  
月が空を



す事にさへなります。だから自分が作った詩を人に見せるもよいが、それは自分の詩作の興味を助ける程度に止め、決して夫れ以上に、自分の詩の發表に心を煩はさないやう注意して下さい。主客轉倒して、人に見せたり發表したりするために詩を作るやうになつたら、それは最早明らかに「働く者の詩」としては、邪道に陥ちたものであります。

### 七、詩の友達

楽しく詩をやつて行く上には、よき詩の友を持つ事が何より必要です。それはよき發表機關がある事よりも尙ほ一そう望ましい事です。しかし詩の友人は出来るだけ、同じ工場の人であるやうにして下さい。工場外の人との交際は何につけても都合がよくないし、不自然だし、且つ種々な弊害も伴ひ易いものです。殊に自分の工場に居らず詩をやつて居るといふやうな人との交際は好ましくくない。第一に立派な勤勞者である所の人が、詩をや

轉かつてゐる  
眠られぬ真夜中  
窓をあけ  
耳を澄まし  
冷たきしとねに  
胸の鼓動を聞く  
靜かに脈うちて  
夢うつゝ  
生きてあるを知り  
過ぎし日の帶廻の  
思ひ出を辿る  
白い屋根  
露骨の家  
錆臭い匂  
午後の帶廻  
そして遊びし友のこと  
夢うつゝ耳を澄まし  
冷たきしとねに胸ふかく  
過ぎし日の

つてゐる所に、新しい時代の生産者の詩の價値があるのです。單に詩をやつてゐるといふだけの事には、現在では大した意味は見出されません。そのういふ中には、専門詩人など含まれてゐますが、此の専門詩人の價値や意義は、云ふ迄もない事だが「働く者の詩」とは本質的に意味が違つてゐます。そしてそう云ふ人の詩と諸君の詩とは、その性質が根本的に違つて居り、諸君は譬へその詩を読みその詩を参考にすることはよいとしても、かう云ふ詩を諸君が作る必要はないし、そう云ふ詩を學ぶ必要もないし、況んやそう云ふ専門詩人に近づき、専門詩人を眞似たり志したり、その仲間になつたりする必要はない。諸君達は、諸君達の立派な仲間がある。夫等は藝術家にも負けぬ立派な本務を持つ人々だ。その職場の仲間だけでやるがよい。そして諸君達独自の詩の境地、専門詩人とは根本的に違つた境地を建設する事が、必要であり、正しい行き方です。況んや専門詩人とも言へぬ單なる詩をやる外部の若い人々と接する必要は、全然ありません。その意味で、當然諸君の詩の仲間は、同じ工場或は同じ現場の中で作る

戦場の思ひ出を辿る

### 出征兵

友を送る

監查 白石 政治

天を仰ぎ  
地に俯して聞く  
墨軍怒濤追撃の聲を——  
君は征く  
國土傳來の大和魂をもつて  
磨礫の銃聲の眞只中に——  
君よ、征け！  
眞珠灣海峽に永遠の神となり  
そして南海の華と散つた  
幾多の軍神に續き——  
君も我々も聞いた  
山本提督の壯烈なる戦死の報を



がよい。結局はその方が楽しく、その方が自然で長続きする。そしてすべての弊害も起つて来ないし、何かにつけて便利だし、安心です。

ただややともすると諸君の間には、「そんな男はゐませんよ」と云ふ考へが相當にあるかも知れません。「詩をやるやうなしやれた奴は我々の周囲にはゐない」と、私も最初はよく此の言葉を聞きました。しかしこれは間違つてゐます。決してゐない事はない。たとへ現在は居ないにしても、少し勧めればすぐやるやうになります。始めは大抵みな、口を揃へて「居ない」と云つたが、私は「そんな事はない、知らないからだ。教へてやり勧めれば、すぐ作るやうになる」といつもそう答へたが、果してそれはいつも例外なく適中しました。そして今では、どここの現場にも数人、数十人ゐるやうになりました。蓋し詩といふものは、本人もまた近くの人も氣が着かずに居るが、現代の青年の胸の中に燃えてゐるものです。ただ詩の始め方を知らず、詩を始めるきっかけが無いため、まだやらないだけで、やるだけの情熱はみな持つてゐるのですから、決して「俺の外にはゐない」など

アツツ島二千数百人の悲願なる玉  
砕の報を――

おお、奮起して征け！

風凍る北海の孤島とも

風が躡躑き日光もすべる赤道直下

とも

征け！

血を擲げ 肉を擲げ

睨ちてしまむ！

顛折るれば 彈丸盡きれば

肉を持つてせよ

たぎる情熱こそ

若き男児の決意こそ

それは、大東亞を貫く動脈だ！

見よ！

傲然と轟へる敵米英の姿を

長期抗日を標榜する固陋頑迷なる

敵米英を！

君が征きて

考へず、辛抱よく勧めて御覽なさい。必ず直ぐに二人や三人の仲間は出来て来ます。そうして同じ職場の中に、詩の友達を作れば、その職場の中に親しさ暖かさが出来て楽しくなるし、自分が詩を作る事も楽しくなります。そしてその仲間同志で見せ合ふ範圍の「發表」の仕方は、最も地味で、普通の「發表」に伴ふやうな弊害も起つて来ません。

そして若しも同好の士の數が多くなつたら、親方や工場長、或は勞務や厚生課或は産報の人に報告し、それらの人の公認を得、賛助を得て、明るく堂々と、楽しく詩の會を作ると、非常に面白くなります。

### 八、批評の意味

詩の會は、お互の作品を發表し合ふ事、その詩をお互に批評し合ふ事です。例へば一定期間にみんなの近作を集め、名前を發表せずには謄寫版刷りにでもして、豫め會員の間に配つておく。そして各會員は數日間鄭寧にそ

若き我等が饑き

遅しいこの肉、この血を擲げるの

だ！

おお、旭光燦然として

新しき黎明にはよくたく

我々情熱の日の丸――

あゝ君は朝旗の下

我等榮譽の尖端を行くのだ！

今日よりは省なくて

大君に捧ぐる

手だ、脚だ、肉だ、血潮だ！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

征け！ 征け！ 征け！

冬が来る  
(出征中) 高野 勇

しつとりとした

柔かな若草の鬨聲を求めて

俺の魂は枯れた草原を這ひ廻る



れを見て、翫味鑑賞して感じた事や批評を簡単に記入し、又點を着けてみて置く。そしてそれを一定の日、一定の所へ持ち寄つて、先づみんなの點數を出して貰つて、總合計を出して、優劣順位をきめ、一方では一寸記入した感想や短評をもとにして、懇談會式に互評會を開くのです。そして順序に、又は議長指名の下に、批評をし合ひ研究をし合ふのです。するとこれは實に楽しい集りであると共に、又非常に勉強になる會合になります。

一體人の作品を鄭寧に見、十分立派な批評をするといふ事は、殆んどその詩を自分が自ら作つてみるのと同じ位、自分のためになるものです。だから詩の互評會の批評は、寧ろ作者の参考のために批評してやるのだと考へたら誤りで、批評する人自身の勉強のために、人の作品を批評してみるのです。だから互評會の時はその氣持で、自分の勉強のつもりで、一生懸命に努力して、成るべく餘す所なく、且つ責任のある批評をすべきです。

互評會の時などには、會員以外の人も連れて来て傍聴させるとよい。そうすると詩といふものもいくらか解るやうになり、ふと始める氣になる人も

中支に冬が来る  
この船色の空の下で  
お前はいつ迄  
さうした姿を續けるのだ  
戦つて戦つて戦つて  
曠野の中で  
萌え出づるものの  
生命の鼓動が力強く  
漲つて来るではないか  
冬が来る  
冬が来る  
俺は起ねばならぬ  
戦はねばならぬ  
新しき生命のために  
新しき光のために

兵士

(出征中) 高野 勇

山越して山越して  
笑しきを空見たり

あるし、また詩によつて結ばれた友情、詩を中心にする集りが、如何に楽しく美しいものであるかを、教へる事にもなります。

### 九、いと高き世界を知れ

かうして職場の中に、ただ仕事だけの接觸でなく、かうした楽しく美しい「詩」によつて結びつけられた友人が居るとなると、職場はすつかり楽しいものになり、潤ひあるものになる。そして夫れ等の人が、職場で、仕事腕を磨く以外に、「心」を磨き、人間性や人格をも錬磨して行き、次第に詩が解るやうになり、詩精神に目覺め、功利主義や常識以上の深い人生を知り、高い世界を知るやうになるのです。

楽しく明るく詩を勉強して居る中に、皆さんには必ず、そう云ふ世界が解つて來ます。金、地位、生活、名譽、評判、人氣等の世界でなく、それよりも遙かに高い所に、日本人として、人間として、立派な世界があり、

戦ひて戦ひて  
静かなる大地を思ふ  
沸へる血潮の中に  
嚴な祖國を偲び  
今日もまた湖み行く  
早春の日の下  
静かなる  
大地を踏みつゝ

老農夫

(出征中) 高野 勇

この船に、この岸に  
私は故國の香を嗅いだ  
小魚が幼い頃の思ひ出の  
波紋を描いて消えて行くクリーク  
の岸に佇んだ農夫よ  
故郷の父親に似たお前ゆへに  
俺は立ちて止つてゐるのだ!  
嵐を擔いだこの俺にも



高い人生があるといふ事が解つて来ます。金や地位のために働いてゐるだけではなく、そう云ふ事が解つて来て、明るく楽しく仕事に精勵するやうになれば、それはどんなに貴い事か解りません。そうして「立派に働く事」を中心にして、「詩」が夫れを助けるやうになり、人間性を完成するのに役立つやうになつてこそ始めて、「働く者」の生活に本當の意義が出來、精神的深さが出來、本當の立派な「勤勞人格」といふものが完成するのです。人間には魂があるのです。ただ目先の事を見てゐるだけではいけない。それよりもずつと高い世界、美しい星のきらめいてゐる高い世界の解つた人にならなければなりません。「詩」は夫れを諸君に教へて呉れます。

明るく楽しく詩を作つてゐると、それが諸君に解つて来ます……

お前のやうな父がある  
お前の苦惱を刻んだ深い鼓ゆへに  
俺は悲しいのだ  
この縮躰に澄んだ大空の下で  
鵜を辱れたお前も  
俺の父親のやうに  
さア  
微笑んで手を振りうてはいないか

壺

(出征中) 高野 勇  
柔い朝日の中で  
ゆらゆらと湯を溢えた小さな壺  
この貴しい食卓の上  
何と偉大なお前の存在よ  
この家も、この妻も、  
この農夫の生活も、  
そしてお前も  
士で語られてゐるのだ  
柔かい朝陽の中で  
ゆらゆらと湯をたたえてゐる  
土の壺よ!

# われらの詩帳

石川島詩友會

石川島詩友會は四五十人の會員を持つてゐます。その職場や工場生活を歌つたものは先に職場詩として第九章以下の下欄に掲せましたが、青少年工として、決して職場や工場生活のみ歌つて居るものではなく、寧ろその作品は多く、一般の詩と同じものです。その二三を次に掲せてみます。見る人の便宜のため大體類題を以つて假に集めました。勿論、題詠などしませんが、自然皆んなが似た物を題にするのです。そこに青少年工の心を示す何物かを感じます。

## 外光

雲

補機仕上工 松 崎治  
ほのかにも朱を孕んだ  
可愛い真綿のやうな  
十月の雲よ

はかなくも立ち  
はかなくも迷へる様  
まことお前こそ  
愛すべき漂浪兒だ  
白い素足の少女の様に清く  
モノリザの微笑の様な謎の中に  
幸福は南にあるなんて  
お前は美しく消えて行くのか



おまことに愛すべき  
漂浪兒よ

豊の噴水

検査工 阿掛 勝彦

眞夏の公園  
日は照り極まつて動ずみ  
木立も砂利も  
色褪せるまで白熱して  
燃えてゐる  
たゞ青一色に  
くるめき輝く空に  
むくむくと光り動く雲  
物みなが光り輝き  
物みなが燃え狂ひ  
地上のすべてが  
暑さにあえいでゐる時  
勢よく空の上まで噴き上げ  
その樂しげな踊を踊つてゐる眞

豊の噴水

噴き出し噴き出す水柱  
右に揺れ左に揺れるしぶき  
そのなよやかなる袖は  
薄絹の如く青空を舞ひ  
あるなしの風にゆれて  
なびき返す裳裾  
あとからあとからと  
限りなく  
出ては消え出ては消えて  
限りなく續く  
眞晝の公園の噴水の  
よろこばしさ  
青空を讀へる如く  
眞夏日を喜ぶ如く  
勇ましく美しい  
眞晝の噴水

ポプラの木に凭れ

検査工 白石 政次

ポプラの木に凭れ  
廣い空を凝視める  
晴れ上つた空を流れる雲  
うつゝなく空想を描けば  
苦悶の胸に限り無き情熱  
あゝ、寂寞たる中に荒寥たる自  
然よ  
風は静かに吹いてゐる……  
ざわめき立つ柔かいポプラの葉  
風は私の心を蘇らせ  
物憂げな初夏の陽光は土に紫の  
影を落とす  
地に生きる喜び  
そして地に生きる悲しみ

ポプラの木に凭れ  
眞實なる祈りが心に湧く

海・山・田園

父の詩

検査工 白石 政次

砂つぼく乾いて  
皺と赤ぎれだらけの手は  
荒れ果てた田圃のやうだナ  
麥詩が濟んで  
庭の銀杏がすっかり落ちると  
ほれ、冬がひよつこり来るぞい  
山の如く積上つた米俵  
瘦せ腰を伸し乍ら  
増産に精出した一年

淺間風が吹き出すと

破れ障子が泣き始める  
どれ、わしも短燵へもぐるべエ

おゝ寒い寒い

畜生！ 猫めがわしの眞似して  
首を縮め  
背を丸めてゐる！

巖

機械仕上工 高野 勇

嵐に吹雪に  
如何に慮げられか  
深い龜裂と荒々しい肌は  
汝の過去の歴史を物語る  
大空に聳え  
自然と戦ひ乍ら磨れる汝と  
苦惱によつて鍛えられた人間は  
捨石になつても強い基礎を作る

鳥

熔接工 中谷 傳次

輝き聳ゆ白哲の頂  
雲低く重なる静寂の世界に  
奇しき一羽の鳥、物憂げに  
空を舞ひまた羽を休める  
……それは飢えたる心地か  
雲は重く徐ろに空を垂れ  
銀一色の中を奇しき唯一點の鳥  
日は忽ちにして隠れ  
時しも降る、萬字巴の雪  
痛ましき鳥、汝は恐れず  
雄々しき鳥、汝は騒がず  
翫へず翼、圓を描きて  
山蔭に山頂に消え映る  
萬象の中に鳥たゞ一つ



嗚呼上越國境の朝

郷愁

鑄造工 松本 光男

汽船は港の棧橋に浮び  
一日の疲れを慰めてゐる

丸窓のそばのテーブルに  
コップに注いであるレモン水

何となく故郷が慕はしい晩だ…

海ノウタ

起、旋盤工 渡邊 良一

ヒロイ青イ海

何處マデモ

青イ青イ海

ナンノ飾リモナイ

オ前ガ

俺ハ好キダ

岩ニ碎ケテ

ハネ上ル

ソノ様ガ

ソノ音ガ

俺ハ大好キダ

ケレド海ハ恐シイ

ソレハ

俺ガ海ヲヨク知ラナイカラ

一丈底ヲ流レル

水ノ様ヲ

水ノ色ヲ

ヨク知ラナイカラ

ダカラ、俺ハ恐シイ

ヒロイ青イ海

何處マデモ

青イ青イ海

海ハ恐シイケレド

俺ハオ前ガ好キダ

澄ンダ空ノ色ト同ジダカラ

俺ノ好キナ空ノ色ト同ジダカラ

ソシテ海ハ

俺ノココロヲ

ヨク知ツイ居ルカラ

ダカラ俺ハ

青イ海ガ、大好キダ

風を歌ふ

風

起、仕上工 長谷川勝則

甦つて頭を振り動かしてゐる草

木

冷たい新鮮な風が流れる

全速力で動く雲

そして西には青空が覗き始める

濛々とした雲の間からは  
赤い夕日が淡い光を落し  
雫の垂れる木立

私は體一ぱいに

夕立あとの涼風を受けて

仲々と歩いてゐる

七夕

旋盤工 谷部 吉一

淡い思ひ出をのせて  
めぐり来た「七夕」――

若竹の枝に

夏の柔らかい風がそよいで  
清々しくゆらぐ短冊

赤―青―黄

化粧をした

はなやかな

「星まつり」の飾り

飾りに満ちた色彩に

子供の頃の思ひ出が

おぼろめき

わたしは思ひ出す

姉が話してくれた

遠い昔の天の川の物語を

思ひ出をほのかにのせて

通り過ぎてゆく風――

風

検査工 阿掛 勝彦

そよそよと柳の葉を振はして  
窓の赤い風鈴を鳴らして  
私の部屋に入つて来る風

机の上の花をゆるがして

お前は私の所へ優しい香を運ん

で呉れる

そよそよと緑の草に囁いて

しらじらと蝶と舞ひ乍ら

緑の野原の上を

地上のすべての物の上を吹いて

お前は何所かへ行つて了ふ

あゝ風よ

お前は何所から吹いて来るのか

そして何所へ行つて了ふのか

お前は丁度私の悲しみのやうに

私の知らぬ國から来て

私の知らぬ國へ行つて了ふ

風

起、旋盤工 藤浪 一

私は今



丘の頂に立つてゐる  
風は強く私を打つてゐる  
帽子は飛び  
上衣は宙に  
ズボンはやがて  
足から下へ滑り落ちる  
そしてたゞ一つの裸像の私が  
現実となつてゐる

風と  
打つ風と戦ひ乍ら  
私はやがて倒れるまで  
立ち續けやうとしてゐる

雨

日照り雨  
起、旋盤工 相川美智夫  
濡れはしないが

白銀の糸が降つてゐる  
黄色い光が射して  
したゝる緑の並木に  
生き更つた赤いポストの上に

塗りかへられた  
看板の白さ  
水たまりに映る  
ちぎれ雲の白さ  
——空の碧さ  
濡れはしないが  
白銀の糸が降つてゐる

成る日の雨

起、旋盤工 小室 三郎  
歩道の上に雫が  
強く弱く  
何時までも落ちてゐる

傘を持たない  
私の上にも……

ビルヂングの硝子窓の縁に  
軒並の庇に  
心ない雫が踊る

雨よ  
別れ征く友への餞けか  
濡れそぼつた私の心を  
黒く塗りつぶす  
雨——

オーバーの襟を立てて  
肩を上げて  
傘を持たない私は  
一人濡れて行く  
灰色の雨の街を……

梅雨時の胸の印象

鑄造工 松本 光男  
じめじめした梅雨、今その最中  
朝、薄ら明りに燻る雨足  
吹きしぶる大川  
流れ行く泡  
油の色に滲む水面

雨、雨しきり降る  
物憂げに、又、眠たげに  
岸邊の家の硝子の窓に  
静かに霞み行く淡い思ひ出……

何處かで美しい花を見た  
それは小さな垣根の中で  
唯一つにこやかに微笑んでゐた  
南から雨に誘はれて  
吹いて来る甘たるいその風に

桃色に色着いてゐた

見たのは何時？  
その花を燻り行く雨の最中に……

春 雨

検査工 阿掛 勝彦  
雨がしとしとと降る  
乾き切つた地上に  
疲れ切つた私の心に  
知らない所から  
知らない天の彼方から  
雨が降つて来る  
雨が落ちて来る

埃だらけの此の地上に  
荒び切つた私の心に  
しとしとと降る雨

柔らかに大地を潤ほし

荒れ果てた人の心を和らげ  
枯れかけた草木を醒らせ

遠い所から  
遠い天の彼方から  
春を連れて来る雨  
花を持つて来る雨

しとしとと雨が降る  
しとしとと春の雨が降る

ふるさと

検査工 白石 政次  
雨が降る  
雨が降る、都の空に  
あゝ我が目に浮ぶふるさと  
降りしきる雨のたゞ中  
降りそゞぐ胸のたゞ中

ふるさとの  
ふるさとの、山路は戀し



あたゝかき我が家に灯ともる  
なつかしき父と語りむ  
なつかしき母と語りむ

我が家の  
我が家の、軒端のわらじ  
いそいそと薬を打ちし日ぞ  
幼き日あゝ歸り來ず  
幼き日あゝ巡り來ず

咲く花も  
咲く花も、香り滿つ  
野にいでて我と遊びし  
はらからよ、いまいづこ  
ともがきよ、いまいづこ

ふるさとの  
ふるさとの、山のはとり  
川の岸谷水のせゝらぎ  
山鳥の聲はなつかし

さざなみの音はなつかし

雨は降る  
雨は降る、千筋の糸  
とめどなく家思ふ夕べ  
あたゝかき父の腕  
あたゝかき母のふとくろ

何時の日か  
何時の日か、家にかへらむ  
降りこむる雨の夕べ  
幾山河雲はへだつ  
ふるさとの父が戀しき  
ふるさとの母が戀しき

早利後の雨の降る夜  
鑄造工 松本 光男  
雨の降る夜  
神様の群が過ぎて行く

かさかさに乾き切つた  
大地の上を――

物みな聲もなく  
歡喜に溢れてゐる中を  
ひっそりと沈んでゐる  
人家の外を

蒸し暑い臥床に横はつてゐる  
わびしい心の中を

しめやかに、いとしめやかに  
神様の群が過ぎて行く

ひでりの後の  
雨の降る夜

秋のうた

落葉

補機仕上工 松崎 治

紅塵の中から飛び出した  
一枚の落葉！  
見上ぐればやるせなく  
プラタナスが  
臨終を蕭飾つてゐる

秋！  
溜息の中に落葉を拾ふ

手にとれば  
葉脈は捻れ、葉裏は乾き  
緑の香は消え  
柔さは跡方もない  
千乾びた無数の皺は

あゝお前の生活の名残か

或は雨に、或は風に  
或る時は炎熱の日光  
埃の中に生きて來た葉  
落葉よ

私はお前の闘志を尊敬する

でも限り無い宇宙の掟には  
若く生れたお前を季節の訪れと  
共に  
死に歩ませる運命がきめてあつ  
たのだ

哀れなる落葉よ  
淋しき秋のプラタナスよ  
街に生き街で眠つたお前には  
赤い落日と灰色のアスファルト  
が、丁度いい墓標だ。

ひっそりとした夕陽の中に

冷たく立ちすくむ  
秋のプラタナス。

すゝき

機械仕上工 高野 勇

一本もすゝきはすゝき  
群れ生ふもすゝきはすゝき  
さり乍ら  
すゝき分けつゝ歩む野は  
心うつけてやるせなし

群れなせば群れなすゝき  
群れ立ちて野邊にさやぎつ  
たそがれの風一めん  
吹き行けば秋の野は  
身一つの置き所なし

群れ立てどすゝきはすゝき  
さびしとは誰れか云ふ  
手に取りしすゝき一本



しみじみと  
秋風の野に一人たどずむ

故郷の思ひ出

検査工 白石 政次

夕映えの細道  
友と別れて

暗い思を抱きつゝ家路を辿る

黄色くしぼんだ葉が

風に吹き飛ばされてゐる荒野

秋は逝く

あゝ、眞夏の情熱に燃えたポプ

ラも枯れ果てて立つてゐるで

はないか

冥想と祈禱

永遠の魂を引ずり乍ら

空と大地が繋り泣いてゐる

鐘の音が響く

求むる限り求むれど

私の胸は躍らず

冷やかな道を、私は歸る

見よ、いつもの星は輝き

人も、草も、風も、鳥も、

皆な哀歌を歌ひ始めた

あゝ鐘野に

秋は逝く……

たそがれ

夏

起、仕上工 長谷川勝則

夏の蒸し暑い夕方

遠い所で雷が鳴つてゐる

ほつとした人々

靡き出す街路樹

微笑を浮べる草の葉

私は籠から飛出した小鳥の様に

甦つた木の下を伸々と歩く

たそがれ

起、旋盤工 小室 三郎

たそがれは灯を呼び

大きな悲しみを載せて

私の胸に歸つて来る

しみじみとした火影に

晝の間の道化者は影を消し

一切のものが昔に歸へる

私は本當の私を見出し

そしてびつくりする

落日

検査工 阿掛 勝彦

静かに落ちて行く太陽

夕靄の中に沈んで行くオレンジ

色の輝き

ポプラの木は立ち並び

街路は次第に遠ざかり

薄暮の煙の中に告げてゐる

今日一日の『さようなら』

走り行く電車

動く人々

太陽は静かに

落ちて行く

薄暮の感謝

検査工 白石 政次

ほの暗い御空に突立てる

煙突の煙消えて  
けふの日も暮れて行く

私は見る

公園の樹下に佇み

泣いて居る幼き者を

貪慾な大空の下に

大手を振つて歩く青年を

風は吹く

巷の中にも、黄昏の川面にも

そして弦月は

情熱を潜ませてゐる

あゝ私は詩を愛す

私の生命は詩により深淵を逃れ

苦しみを忘れる

父よ、母よ、兄弟よ、妹よ

そして数多きわが友よ

私は孤獨ではない事を感謝する

大いなる自然の中に生きてゐる  
事を感謝する

御空にはいつかしら星が輝き

夜はやがて私に

幻想の城を築いて呉れる

街

煙 突

鑄造工 金澤 敏雄

ごたついた街の中に

憂鬱を噛みしめて

突立つてゐる煙突

どすぐろいくすんだ體軀を

青空の下に晒らし

あつけらかんと

街の中を見下してゐる煙突



無口でのつそりと突立つてゐる  
が時たま思ひ出したやうに  
腹の中の感情を  
はつはつと吐き出してゐる煙突

横濱風景

起、旋盤工 石川 清登

尖つた屋根  
丸い屋根  
赤い屋根  
緑い屋根

ふつくらと  
生きものゝ様な  
緑の丘  
小さい船が浮ぶ  
箱庭の様な  
青い海  
うす絹の  
ずれてゆく様な

碧い空  
横濱は刷物繪に出てくる  
異人館の匂ひ

小麦色の頭髮  
青い瞳の人々

尖つた屋根  
丸い屋根  
赤い屋根  
緑い屋根

横濱は刷物繪に出てくる  
すました  
異人の横顔

夏

起、旋盤工 渡邊 良一

濕っぽい梅雨があがつた――

焼けたとれた太陽が  
地上に熱風を叩きつけ

銀色の舗道をとかす

白いサンダルと  
カンカン帽の行列  
泥水をはね上げて  
水まき自動車が通る

水屋ののれんが  
上つたり下つたり  
急がしい！  
レモン、イチゴ、メロン

汗を流して車をひく  
風鈴屋  
街路樹の木蔭は  
開襟シャツと  
スフのワンピースで一ぱい  
夏が来たぞ  
まぶしさうな大きな顔の

東京の夏が来た

壺のある風景

旋盤工 青木 芳雄

雨が降る  
うわべばかりの街  
涙のやうな雫が光つてゐる  
思ひ出の暮れて行く窓が一つ  
誰れも知らない街の一隅にある

赤ん坊の泣聲が  
雨の中に聞えてゐる  
灯の消えた街

プラタナスに寄りすがり  
白々しく顫える街の音を  
冷たく見守つてゐる  
黒いインキ壺が一つ  
その底には

吐き出してしひたい痒と  
甘つたるい追憶が  
うづくまつてゐる

夜の景色が  
冷たい雨の中に  
濡れてゐる……

郷愁

起、仕上工 小林 清次

私は生れ故郷が懐かしい

遠い異郷の街の  
見知らぬ人の中を行く時  
思ひ出のない道を行く時  
道行く人の誰も私に呼びかけて  
くれる人はない  
涼しげな風にそよぐ草木さへも  
私に親しみを感じさせない  
私は生れ故郷がなつかしい

遠い異郷の窓邊で

思ひ出の多い月を眺める時  
母の話の種だつた  
数々の星を眺める時  
数多い星のどれか  
又は清く澄んだ月が  
私の心を母のもとに  
映してくれる事だらう

私は生れ故郷が懐かしい。

霧

霧の街

起、旋盤工 渡邊 良一

息がつまりさうだ  
信號燈が烽火のやうに  
幽かに



幽かに—  
點滅する

怒號にも似た  
警笛を吹鳴らして  
トラツクが行き過る

あゝ私は  
何處へ歩るいてゐるのだ  
地の果を行く迷路か  
銀の軌道が深い謎を秘めて  
霧の中に吸込まれて行く

人が擦れちがふ  
影の如く現はれて  
現はれては消へる

息がつまりさうだ  
憂鬱—  
悪寒—

感傷—  
濕っぽい灰色の幕に覆はれて  
街が泣いてゐる

夢だ  
信號燈が烽火のやうに  
幽かに—

點滅する  
あの橋もかすんで  
淡い螢火の橋燈ばかり

灰色の重い帷りに  
冷たく抱かれて  
私の心は

さめざめと濡れた街路を  
何處へともなく  
彷徨ひ歩いてゐる  
霧……

真白い霧

鑄造工 松本 光男

真白い霧……  
十字街には時々警鐘が鳴り響き  
霧の中から忽然と姿を現はす電  
車

真白い霧……  
それは雲の中で歩く山上の小都  
會か、それとも神秘なる運命  
の姿か、  
霧の中は「未來」、近い影像は  
「現在」、そして後の方へ消  
えて行く「過去」

太陽は乳色をした霧の中で  
白く圓かに光輝なき空虚となり  
橋の下には  
霧笛を鳴らす曳船

遠くより近くへ来る毎に  
次第に早目に  
重い空気を破つて鋭く響く

真白い霧……  
すべての運命と現實とを深く奥  
底に  
押し包んで揺れてゐる  
真白い都會の朝霧……

雪

初 雪

起、仕上工 程塚 力男

十二月の夜  
その静かな足音を  
その無言の訪れを  
とろとろと  
炎の踊るストーブの傍で

しめやかに  
いとしめやかに

私は聞いた  
遠い故郷の  
冬だよりも似た  
いとしさで

優しい父と母との聲を聞くやう  
な懐しさで

十二月の夜  
さらさらと……

冬 の 夜

起、旋盤工 關口 秀雄

冬の夜  
ふとんの中に並ぶ頭  
坊主の頭  
お下げの頭  
おかつばの頭

冬の夜

ふとんをかぶつて  
頭だけが見える  
一ツ、二ツ、三ツ、四ツ

ふとんの中から  
頭だけが見える  
雪の降る夜

雪 理

起、仕上工 程塚 力男

雪ぞ降る  
東京の  
あはき  
はかなき  
雪ぞ降る  
ぬかるみに  
その形なく  
そのけだかさなく



降りて消ゆる

東京の  
あはき雪の  
はかなさ

薄暗く  
空にごり

あたゝかき

東京に

あはく

はかなき

雪ぞ降る

雪ぞ降る

北洋の港

鑄造工 松本 光男

北洋の淋しい港は  
眞白な雪にとざされてゐます  
冷たい季節の風が  
激しく海から吹いてゐます

波止場には  
漁船の影が淡く、にじみ出てる  
ます

港の入口には

古い碎氷船が一隻――

埠頭にならぶ倉庫も

固く扉がおろされたまゝ

深い霧の中にぼやけてゐます

結氷期が来るのです

總てのもの深く停止してゐる

時に

總てのもの動かなくなる時に

此の地は美しい極光の季節に入

つて行くのです

夜

花 火

起、仕上工 伊藤 誠一

花火を誰か上げてゐる

蠟人形のやうな女の子

金の玉

銀の川

青い火は静かな流れ

青い火はピエロの踊り

花火は夜の虹

出ては消え

出ては溶ける火

幼き火は

夢の火

幻の火

闇の中に母の聲

淡き光

美しき光

光と影

起、仕上工 程塚 力男

私の貧しい部屋に

影が顔へて居る

ゆらゆらと立ち上る

あやかしに

くつきりと描かれた

黄い直線

正しく壁を区切る

光と影

對稱の作つた現實

貧しい此の部屋に

古びた三つの火鉢

背に影を

面に光を浮べ

そして沈黙を守る

寄邊無き物は

何を語るや

すべてが

ささやかな光の中に

静寂を守り

沈黙を作る

灯

起、旋盤工 渡邊 良一

星のない暗い夜

風の沈んだ池の面に

黒い落葉が浮んでゐる

立ちすくんだ

樹木の繁みに

そつと濡れる七月の吐息

息苦しい夜の

公園の一隅を

じつと照らしてゐる

電柱燈――

疲勞した闇の沈黙に

力のない光は震へ

路傍に冷たく落ちこぼれ

四方の空気を乳色に照らす

星のない暗い夜空

眠つた草の陰から

名の知れない

虫が聞えてゐる

甘美な夜の憂愁の

立ちこめた空に

眩惑な闇の空の

じつと涙ぐんだ灯の光に

身も心も溶け入つて



静かに慕ひ寄る  
ほのかなる影法師――

思ひ出  
起、仕上工 伊藤 誠一

星は西の空に輝いた  
濕つぽい闇が  
街を押しつぶした

よろよるとよろめく灯に  
人々はうようよと踊る

酒の香は  
よいどれの父の面影

幼き日

父を載せた小舟の纜は切れた

一滴の潤はひも無い體に  
血潮は逆上する

眼は殺される虎のやうに  
照り輝き  
床の上をのたのたと  
うごめき廻つた

一人ぼつちの私  
酒は街で燃えた。

北風の吹く夜  
補機仕上工 松崎 治

河岸近き家に住みつゝ  
心に求むる煩もなく

家にこもりて一人  
北風の夜は歌を書くなり

夜を送るに堪えず

大なる虫の如くに

ふさぎては床に伏しつゝ  
北風の吹く夜は寂しき

はらからも持たなく  
語らぬ白壁に向ひて

静ごころ静かにたもち  
北風の夜は歌をかくなり

河岸近き家に住みつゝ

吾が歌のなげきこそ

風よりほか知れる人もなし

北風の吹く夜は淋しき

淡い思ひ出  
鑄造工 松本 光男

心かなしく北風の吹く夜は

一人町に出で

明るい光に包まれた

かの玩具屋の店先にそつと近寄

り  
華やかた色彩を戀ふて涙する

昔々は乙姫様と浦島太郎の物語

り

これはピエロとキュービット  
燃えて了つたその跡は  
灰と消え行く果無さを  
知るや知らずや泣笑ひ――

冬の夜空にさみしくも

星の瞬く頃の夢

店の冷たいウインドの

硝子にそつと唇を

寄せて静かに吐く息は

白く曇りて涙する

心かなしく北風の

吹く夜の淡い思ひ出――

瀬戸物屋の狸

起、仕上工 伊藤 誠一

紅の灯は  
道化師の唇と成つて

夜空に、人々に  
べらべらと流れ出す

魚の目玉のやうに  
どろん

溝泥の灯のよどむ

ウインドの

片隅の狸

硝子箱の底に

こびれ着いて

むつくりと浮び上つた

茶色の狸

足もふらふら

酒もふらふち

心もふらふら

淋しかろうよ  
この狸

涙の徳利さげて  
何處へ行く

酒屋の親父の  
怒つた顔も忘れて  
帳面さげて

さぞかし泣くだろ

子狸が

まゝよ

飲んで歌つて

騒がうよ

午前零時

起、仕上工 程塚 力男

涙ぐみ

その音を聞けるか

青ざめて

その音を聞けるか



青ざめしその頬に  
涙ながしつゝ  
その音を聞きぬ

新しき年を告ぐる

その音を

涙ながしつゝ

われは聞きぬ

十九なる

我は聞きぬ

月

月夜の郷愁

検査工 白石 政次

月がつぶやくやうに  
輝いてゐる秋の晩

光に葉はしつとりと濡れて

幹も枝も

青い郷愁の色に塗り潰され  
止め途なくむせかへつてゐる  
月光……

あゝ野良犬の如く

月に吠えれば

想ひは光に追はれ

闇をくぐり

故郷への軌道を

ひた走つて行く

郷愁――

秋

起、旋盤工 今井 一三

思ひ沈む秋の影を見せる  
三日月……

乳色の香の戀しさも  
愛しいと云ふ程の感傷に走らぬ

若さを描く星の舞臺

月の影、星の影、秋の影  
そして若さの影

ひとり嘆き慰め合ふ

影のきらめき若さの輝き  
そして希望のときめき

蟲の音に泌みる

幸福の憩ひに  
更けて行く秋の夜……

一人の月

補機仕上工 松崎 治

義兄と嫂が引越しました  
あとの淋しいうつろには  
疊の敷と白い壁  
火鉢の舟と胡桃の机

取り残された窓るべなさ  
大きくなつたその部屋で  
何と小さなわが机

悲しい窓の格子から  
そつと覗けば裏屋根に  
丸く浮いてた銀の月

影法師

起、旋盤工 渡邊 良一

月の光に  
照らされて

月の夜道の

影法師――

姿こゝろを  
照らされて

月の夜道に

うづくまる

街の月

鑄造工 松本 光男

遠くの家の屋根の上の空に  
途方もない大きな月が  
盆のやうにぼんやりと輝き

街中に繰り出した人の群は数も  
知れない

それらはぼろふらのやうに  
うよ／＼うよ／＼

うよ／＼うよ／＼  
歩き廻つてゐる

低く垂れ下つた空  
雲はやはらかい綿のやうにふん

わりと、  
暖い布團のやうにすつぽりと

南から空を被ひかぶせてゐる  
その中にくるまつて息を殺して

ゐる蒸し暑い七月の夜

體はけだるく

此の世の總てのものに

家も橋も樹木も路に一杯溢れ出

た人の影も

その心も

夢も

すべて地上に蒸し返して

べた／＼に食着き合つてゐる

それらは微のやうに

腐り爛れ發酸し

大氣中に一杯に

異様なガスが充滿し

ガスが充滿し

それが時々稲妻のやうに

大空に

青白い光を爆發させる



都會の夜

都會の夜

起、旋盤工 村井銀次郎

春の夜静けさの中に  
私は獨り彷徨ふてゐる

凡ゆる家々は沈黙し  
四方には人影もなく  
銀行も 映畫館も  
デパートも、ビルディングも  
光と美の世界を失つて  
深い眠りを續けてゐる

何處からか……  
犬の遠吠が流れてくる  
つゞいて他の一匹が  
廣大な暗黒の世界に

もの哀しげな聲で泣き續けてゐる

それはうら寂しいメロディとなつて

あるひは高く、あるひは低く  
空虚な幽霊のやうに  
底知れぬ暗黒の世界に  
吸はれるやうに消えてゆく

春の夜の静けさの中に  
私は獨り彷徨ふてゐる

都會晚秋

補機仕上工 松崎 治

蒼ざめた十一月  
北風は破れ  
漠たる窓邊に  
青い窓掛は硬く垂れてゐる

すべての物は硬ばり

黒色に澱んだ窓格子に  
冷やかに忍び寄る月光  
吐息がガスのやうに顫へる

窓より見る街路樹は枯れ盡し  
哀悼の風わが心を吹けど  
背き去りし戀人の如く  
限りなく悲しいロマンスを囁く

冷え切つた月明り  
光の搖籃

孤獨の寂影に  
何を詩はせるや

嗚呼都會の晚秋

闇を走る

鑄造工 松本 光男

星さへ輝かぬ大空に向つて

餓えた一匹の犬が吠えてゐる

だが信號燈だけが黄色に點滅し  
てゐる十字路を幾つも越えて  
私は此の暗闇を抜けきる爲に  
力の限り駆け抜ける

人道と車道を區切る街路樹も

枯れ果てゝ

暗闇は恐怖と疑惑とに充ちてゐる

重く垂れ下り

何處までも續く闇の中に

私の心は押潰されてしまひそう  
だ

此の北風の吹き荒ぶ巷の中で  
徒らに走るのは止めよう

一月の夜

補機仕上工 松崎 治

身にいたく底冷えのする  
一月の悲しい夜

並木の葉おちつくし  
霧白々と街をおそひ  
遠く走つてゐる電車の音  
寒く鉛色の空にひびく

夜を迎へた街の灯よ

路傍に蹴られてゆく

小石の一つ一つに

裏道を歩いてゆく私の影に  
いつかしら夜が戦いてゐる

カラコロ カラコロ

私の下駄が鳴つてゐる  
一月の悲しい夜

探照燈

補機仕上工 松崎 治

重苦しい眞暗な空に  
それは  
白刃と白刃が散るのか  
夜をつらぬき

闇をつらぬき

きらめき續ける探照燈がある

一本、二本、そして數本

十字を切つて

きらめき續ける探照燈がある

星も見えず

近いものが遠くへ

萬象のすべてが

朦ろ朦ろ闇の中に消えた後  
それは空間の饗宴だらうか



明滅する不安な光  
怒號に似た線の群集  
星も見えない  
重苦しい  
眞暗な空に  
夜と闇、つらぬき  
きらめき續ける  
探照燈がある

詠物

平家蟹  
補機仕上工 松崎 治  
平家蟹  
俺は砂山の平家蟹  
砂山を掘つて

掘り下げて  
砂に埋れて生きてゐる  
持つて生れた運命を  
背中にしよつて  
にがい顔  
前も後も  
進み得ず  
横に這ふだけ知つてゐる

平家蟹  
平家蟹  
俺は砂山の平家蟹  
海盤車  
起、仕上工 程塚 力男  
我は悲しき海盤車なり  
委醜き海盤車なり  
水の清きの恐ろしく

暗き泥土に潜み入り  
ひねもす涙す海盤車なり  
我は悲しき海盤車なり  
心卑しき海盤車なり  
人戀ふ心も恐ろしく  
蟹なほ暗き牢獄の  
格子に纏はる海盤車なり

我は悲しき海盤車なり  
一人寂しき海盤車なり  
さだめの姿恐ろしく  
ひねもす暗き海底に  
此の世を呪ふ海盤車なり  
我は悲しき海盤車なり  
罪に怯ゆる海盤車なり  
心卑しく青白き  
委形海盤車なり  
此の世の中に匿れ生く

我は悲しき海盤車なり  
我は懺悔の海盤車なり

笑ふ能面

起、旋盤工 石川 清澄  
古びた教科書の中の一つの顔  
それは柔和な能面  
張り周らされた眞綿の  
魔睡して行く快感に  
年古りた能面は  
青い過去の中に沈み  
「時間」を秘めし玉手箱  
立ち昇る神秘の煙  
あゝ盲ひたる私の瞳は  
うつろなる影を追ひ求める  
ほの白き昔の能面は笑ふ

角の擦り切れた教科書の  
薄青い汚染の中から

赤松

起、仕上工 程塚 力男  
赤松は伐られぬ  
その身  
堅く強くありとも  
剛くきびしくありとも  
赤松は伐られぬ  
古きものは悲し  
その身  
伐り割られ  
薪木とされぬ  
古きものは悲し  
古ければ赤松は燃えぬ  
その身

堅くありとも  
燃えさかる焔に焼かれ  
煙となりて消えぬ  
古ければ赤松は  
悲しくも消えぬ

島

同 程塚 力男  
ひたむきな波の音が……  
渦を巻いてゐる風の聲が……  
そして今  
島は月明りの外にある  
その時  
島は静かにねむつてゐる  
くろくとした沈黙の中に  
抱かれてゐる



そして  
無限りのない風洞も吠えてはる  
ない

おお、そして  
島に密生する木々の枝には  
何百といふ鴉が  
翼をかき包んで居る  
ねむつてゐる

只  
風洞の虚空の中から  
ものうげな  
海鳥の聲だけが聞えて来る

夜――  
すべて  
原始につながりつゝある  
大きな世界だ

ひたむきな波の音が……  
渦を巻いてゐる風の聲が……

雑

眞白き地表

同 程塚 力男

純白なる火山灰よ  
降り！  
すべてを埋め盡せ

純白なる火山灰よ  
大いな、啓示よ  
過去を運命と變へるものよ  
降り！ 降り！  
ものみなを埋め盡せ！  
新しきものよ

沈滞する創造の凍土帯を  
青ざめし感情の枯渴を

かつて華やかな色彩を持ちし魂  
を輝かし、振起し、再興させ  
る新しきものよ

降り！ 降り！ 降り！  
おゝ、極北に輝くオロラの如き  
光の中に  
凜然ときらめきて……

純白なる火山灰よ！  
今こそ再生の旗を立てよ！  
この常暗の國土に  
極北の地表に

おお、純白なる火山灰よ

夢

同 程塚 力男

これは

けはいのする  
命の息づかひ  
ひそと語る  
小さな戀

これは  
ふるさとの  
かたちの中にあつた  
水際の葦の  
そよと動く姿のやうに

これは  
どんよりと  
流れのない沼の水藻  
藻草のゆらくとゆれる  
ふうけい

これは  
手足もぐつたりとした  
青白い色彩

今朝死んだ  
薔薇の匂ひ

そして  
これは  
覚えのない記憶  
その中で  
ふと瞳をひらいた花――

奇 想

鑄造工 松本 光雄

おや？……

しッ！  
しッ！  
……ツ・カ・ニ……

見給へ！  
僕の頭を……

おや！  
ムギワラだな  
否！  
否！

馬鹿に大きい目玉だな  
頭――全體が目玉だらけだ  
大空を飛ぶ羽根まである？

あッ！  
そうだッ！

ふ……………はあッはッはッはッ  
……………



昭和 18 年 10 月 5 日 初版印刷  
 昭和 18 年 10 月 9 日 初版發行 (2,000) (出版會承認  
 い 160021)

著者檢印

著者略歴 大正八年東京高商(現商大)卒業，同九年米國英國を經て佛國に留學繪畫演劇研究，同十年歸朝，大正十二年岡崎市立高女繪畫科囑託，昭和十二年石川島造船所に入り，現在同所勞務課産報係。譯著「グレゴリ夫人戯曲集」(新潮社)「セザンヌ傳」(ポオラール原著)(改造文庫)等，著書「働く者のための繪畫」(東洋書館)

勤勞青年文化叢書  
 『働く者の詩』

著者	近藤孝太郎	發行者	大井徳三	印刷者	中村 紳	配給元	日本出版配給株式會社 <small>東京都神田區淡路町二ノ九</small>	發行所	株式會社 東洋書館 <small>(出版會員二〇五八四)      東京都神田區九段一ノ十二      振替東京一七〇三六三</small>
定價	二圓五〇錢	特別行爲 稅相當額	一〇錢	合計	二圓六〇錢				



# 土より鐵へ

—少年産業戰士—

大西藤米治著

B6判上製美裝  
價二・六〇 送料二〇

農村の國民學校を巢立つとすぐ都會の工場へ戦力増強の一翼を擔つて郷里を出で立ち、そこで産業戰士として逞しく成長して行く少年達の眞摯可憐な姿を、嘗て同じ環境に育つた著者は後繼者に對する強い共感と深い愛情とを以て興味深く描いた。少年産業戰士は勿論、父兄、勞務擔當者必讀の書である。

# 熔鑛爐と共に四十年

岩下俊作著

B6判上製美裝  
價二・一〇 送料二〇

八幡製鐵の宿老白石竹松翁の半生はまた實に我國製鐵業の發展史そのものと言へよう。八幡製鐵創業の頃から現在の躍進の時に至るまでの波瀾多き長き期間を一職工としての職域にあつて熔鑛爐を守り抜いた彼こそは正に勤勞魂の楯化と言ふことが出来る。凡ての勤勞人に一讀を薦めたい。

## 勤勞青年文化叢書

刊行の言葉 本叢書は、現下必勝生産戦の第一線に立つて日夜勤勞に勵む青少年工員諸君に、逞しく、潤ひある、而も美しい勤勞者の文化をもたらしべく、各々の著者が熱情を傾けて書かれたものである。勤勞青年の讀みものとして自信を以てお薦めする。

訂改

### 勤勞者の生活設計

日本製鐵  
勞務課長 鈴木舜一著

本書は現下の戦力増強の一大支柱として工場事業場を導く勤勞する青少年の生活の正しいあり方を著者の實際指導経験に基き歳時季風に面白く説いたもの。

送價B6判美裝  
價二・九〇

### 青年の明治維新史

田中惣五郎著

本書は今後の日本の支柱力たる勤勞青年に明治維新の眞の精神を自覺し体得せしむるために具体的な史實に基いて出来る丈分り易く、面白く説いた。

送價B6判堅牢  
價一・二〇

### 小松雄吉著 工場醫の記録

秋葉保廣著 われらの生活と法律

送價  
價一・八〇

送價  
價一・九〇



979
179



終

